

二〇二四年(令和六年)三月

東京阿部家資料

文書編(14)

福山市教育委員会

目次

凡例

『奏者番心得九冊物』三卷について

『奏者番心得九冊物』三卷

当番勤方並心得一	1
御番之部二	53
助番之部三	58
当番構無之部四	66
御番割之部五	69
病期之節御番取扱之部六	76
出仕心得并伺御機嫌七	79

出仕断之部八	82
新役心得九	85
火事之節之部十	90
雷地震之節心得十一	93
差扣之部十二	96
雑之部十三	99

凡例

- 一 旧福山藩主阿部家（東京阿部家）より福山市に寄贈いただいた資料『御奏者番心得九冊物』の第三冊目を、「三巻」として翻刻・収録した。（第四冊目以降も順次刊行予定）
- 一 文書の収録については、原則として原文の形に添うように努めたが、内容に正確を期し、読者の便を図るため、次のように編集した。
 - 1 漢字の字体については、原則として新字体を用いた。別体・旧字・異字等はつとめて通行の表記に統一したが、そのまま用いたものもある。
 - 2 旧仮名遣い、および「ㇿ（より）」は、原文のまま記した。
 - 3 平出・欠字は省略した。
 - 4 誤字や当て字は原則原文のまま記し、行間に括弧で適切な文字を記した。
- 一 朱書・朱線については、灰色で表した。
- 6 読者にわかりやすくするため、読点（、）を付けた。
- 一 本書の解読は、つぎの東京阿部家文書解読グループのメンバーに協力いただいた。

小林浩二 佐藤恭子 藤井和枝
- 一 本書の編集は、福山市経済環境局 文化観光振興部 文化振興課 まなびの館ローズコム 歴史資料室の鐘尾光世・桑田直美・有木歩があたった。

『御奏者番心得九冊物』三巻について

本書『御奏者番心得』は幕府で要職を担った阿部家代々に受け継がれた奏者番としての先例集である。全て揃っているものは「九冊物」と呼ばれ、東京阿部家資料にはその全九冊が揃って『御奏者番心得九冊物』として残っている。一昨年度に一巻、昨年度に二巻を翻刻した。本資料はそれに続く三巻目である。

奏者番は日替わりの当番制を敷いており、三巻では毎日の「御番」に関して貞享二年（一六八五年）から安永四年（一七七五年）までの事例を数多く収めている。基本的な当番の勤め方から出勤・謹慎・新任の振る舞い・病気や非常時への対応まで、奏者番として勤務する上で基礎となる事柄の先例を、十三の項目に分けて整理している。例えば当番割りについては、休む際は事情により代わりの者を立てるか、順番を繰り上げるべきか等細かい規定がいくつも示されている。奏者番を拝命した大名は、そつなく務めるため事ある毎に「心得」をひもとき、何事も先例に則って対処していた様子がわかる。

今後「奏者番心得」の続巻を翻刻していく予定である。



御奏者番心得九冊物 三卷

当番勤方並心得

当番勤方並心得一

御番之事二

助番之部三

当番構無之部四

御番割之部五

病氣之節取扱部六

出仕心得並御機嫌窺七

出仕断之部八

新役心得九

火事之部十

雷地震之節心得之部十一

差扣之部十二

雑之部十三

一 五半時登城部屋江罷越若年寄衆非番登城二而中之間江罷越当

番座二罷在老衆江ハ会釈有之候間致時宜候、若年寄衆御側御

用人江者無会釈老衆茂間柄候得者不致会釈候

但無会釈之儀ハ右之老衆江兼而申込承知之上之事

一 老衆江会釈茂登城退出計二而其余ハ不致会釈候事

一 老衆揃後芙蓉之間江罷越候

一 廻り前外席江御用等有之罷越候節者暫之内同役衆江当番代り

頼置候事

一 廻り後老衆御座敷方被出候節共跡方罷越席々二出席之事

一 惣出仕或ハ御三家二老衆御逢之節老衆罷出候儀芙蓉之間二而

知兼候間中之間二罷越例当番座二罷在候事

一 廻り後箱之儀坊主江為知候様申付部屋二罷在候而者可然又芙

蓉之間二罷在候而も勝手次第之事

但八時二相成候ハ、箱不出候とも中之間二罷在候事

一 紅葉山上野増上寺御成之節者当番老衆揃後直二中之間二罷在

候事

右旧キ留二相見申候、当時ハ芙蓉之間ニ罷在候

一 御礼日ハ老衆退出茂早々有之候間中之間ニ罷在候、又ハ芙蓉之間ニ扣可心附事

一 紅葉山上野増上寺遷御後は又老衆退出早ク候間中之間ニ相詰罷越候事

一 月次前日或ハ御礼衆有之節ハ御用番御同朋頭を以当番江御逢可被成候段申来候ハ、早速中之間江罷越当番席ニ扣罷在候事

一 老衆奥江之入口ニ而奏者番大目付御目付江御礼書御渡候、老衆方明日月次御礼有之段被仰聞候事も有之、明日月次御礼之儀不被仰聞節ハ当番月次御礼有之哉之段伺候事

但月次之節ハ老衆登城之刻限ハ御用番退出後御同朋頭江承候、且御直ニ登城之刻限伺候事

右之通兩様有之候事

一 不時御礼衆有之節ハ御礼書御渡候与明日何時御登城候段御直ニ伺候事

一 老衆御礼書被渡候与進物番何人出シ可申哉西丸江茂差出可

申哉と伺候事

但右之者古格ニ而当時ハ伺不致候、御礼書見合何人被差出候之段番頭衆江申達候

明和二酉年十月六日

当番
加納遠江守

一 替儀之伺明日台徳院様御靈屋御修復外任座ニ候得者表向江被仰出茂無之事故伺も有之候方可然と土佐殿被申候ニ付、当番今日被相伺候

一 老衆招請ニ而早ク退出之節当番中之間江出ルニ不及候

一 老衆御成御留守番等ニ而遅ク登城之節ハ中之間江出ルニ不及候

一 箱出候与当番中之間江罷越御用番退出之節会积いたし跡ニ付、桔梗之間御目付衆江も会积相济候と明日相替儀無之哉之段伺候事

但御三家江以上使被遣物等其外不依何事為御礼登城之節居残可懸御目哉之段、且大広間之衆御譜代衆御鷹之鳥以上使被下候為御礼登城有之候ハ、居残謁可申哉之段伺候事

一 増上寺方丈上使為御礼登城之節も右同断居残謁可申哉之段

伺候事

但増上寺江上使之節ハ寺社奉行方伝達有之候事

明和元年十二月廿三日

当番
内藤大和守

一松平信濃守大久保加賀守堀田相模守江以上使御鷹之鳥被下

候為御礼相模守計御老中御退出寄出仕二付被謁伊予守殿江

御同朋頭を以被申上、其節殘三人も為御礼出仕候ハ、謁可

申哉之段被伺謁相濟被申上候由

同日

西丸当番
仙石越前守

一右三人為御礼出仕二付居殘被謁未周防守殿退出前二付其段

被申上候由

一御老中退出之節明日相替儀伺若桔梗之間二而同落候節ハ廊下

迄罷出伺候事

一非番老衆与一所二退出上座之老衆月番之節者不殘時宜請いた

し候而罷立脇より先へ驅抜伺可然旨土佐殿被申聞候、采女但殿二

ハ御会釈相濟候ハ、外非番之老衆ニ無会釈直ニ桔梗
用番之間江被相越明日替儀之伺被致候由被申聞候

一月番老衆退出之節着席二不居合候ハ、廊下辺迄茂罷越直に明

日之伺致候事、右間二合不申候節ハ御用番宅江罷越明日相替

儀無御座候哉之段伺候事

一御用番先江退出非番跡二退出候節ハ御用番退出有之候得者無

構当番退出候事

一八打御用番所二候得者御同朋頭を以明日之伺致候事

一大目付衆江も伺之節者其旨申達候事

一両番頭躑躅之間二詰被居候間明日相替儀無之段申達

但御精進日前日二も明日相替儀無之段酒井飛驒殿二者被申

達候、越中殿二ハ明日御精進日二付替儀之伺不致候段被申

達候由

一御礼衆有之候得者其段申達進物番何人被出候様申達

但進物番之數者御礼書渡候上御礼衆之數ルテ相定候事、尤

三四人も余計二申達候

一西丸江茂進物番出候節ハ何人被出候様申達候事、御礼日之前

日ハ月次御礼無之候得者無之段申達月次御礼有之候得者有之

段申達

一御前事二而無之拜領物之節者御目付方申達有之候間当番方両

番頭衆江不申達候、但老衆方進物番之儀御差図有之候得ハ両

番頭衆江申達候事

但御目付庄九郎江平日進物番之數承り候所、一側十人充相

詰候間大概之儀者御間二合申候段被申聞候由美濃守承候事

一 兩番頭衆一人被罷在候得者一方之番頭江も被申達候様二与申達候事

一 躑躅之間二番頭不居合候得者部屋江呼二遣候而明日替儀之事

申達、又進物番江兩番頭衆江被申達候様二と申置候事

一 進物番所二進物番被詰居候間退出之節致会釈候事

明和二酉年十二月十三日

助番 戸田長門守

一 明十四日於西丸拜領物有之候付進物番差出候之様周防守殿

以休阿弥被仰聞候付、去年之通余計共二被差出候様番頭衆

江申達候

一 前々ハ明日相替儀無之哉之段御用番江伺候節何日迄より明日

御礼衆も有之候哉之旨被仰聞候旨古キ帳面尔相見江候、尤御

礼書ハ前々ハ当日相渡り候

右者古格二而當時ハ無之候得共為見合記置

一 退出之時分御老中御退出後二而も火事沙汰有之候得ハ退出不

仕部屋二而見合、様子次第老衆登城之沙汰有之候ハ、中之間

江火事羽織着罷出候事

一 地震雷等之時ハ早速中之間江罷出伺御機嫌候儀者大目付衆与

申談御同朋頭を以御用番江申達候事

一 泊り伺候事格別二重キ事有之候時御老中方之御泊有之候得者

同役申談二而伺申候事

延享四年四月十六日

当番 井上遠江守

一 二ノ丸出火有之夜御用番酒井雅楽頭殿若年寄板倉佐渡守大

目付衆も泊り有之候得共、同役中申合泊り伺不致候

一 廻状古案を以見合相認候事

一 朝献上二ハ当番無構進物帳坊主持參為見申候を見候分二而

相済申候

但御凶事之節者別帳二致候事

一 御三家方不時之御登城并使者日光御門跡増上寺方丈登城其

外被下物有之候ハ、心附席々江罷出候

一 西丸御成之節当番西湖之間御縁頼八頭御杉戸之内二而御目

見仕候、吹上御庭より直二御成二候得者御目見無之老衆退

出候得者還御迄不及罷在候

一 招請被相越候老衆外老衆方先江退出之節当番中之間江罷出候二不及候事

一 御用番御断二而退出いたし候節ハ御同朋頭を以明日相替儀伺候事

一 御奏者方挨拶之趣

御三家方并御嫡子方為御礼登城之節八年寄共退出仕候、

御出仕之段御側之者江可申達旨及挨拶

表向四品以上之衆江ハ老衆退出と申候

御譜代衆詰衆江ハ御老中退出と申候

柳之間大名江八年寄衆と申候

同役衆を他江申候二ハ呼者なし二致候

戸田越前守留書之内

一 正月四月十七日雨天二而紅葉山御社参御延引之節ハ、為御名

代老中参詣御進献之御太刀目錄奏者番役之御名代御宮江被上

候前二御別当江御太刀目錄相渡ス、夫方階を下り薄縁之上二

退参迄有之候、尤大紋二而罷出候、正月四月十七日之当番可有

其心得事

一日光御門跡御登山前御帰寺之後御対顔之節者当番一切勤方無之候、御用番登城はやく候故前日其段承当番早メ罷出候迄之儀二而候

一大納言様小菅江御成御止宿中者西丸当之者ハ八ツ打候以後退出之事

出之事

一 御番改有之節当番一切構不申候、芙蓉之間罷在候

一 遠国御使等御役所江罷越候衆江山吹之間二而奉書杯御渡候節

当番構不申芙蓉之間二罷在候

享保八卯年正月廿三日

当番
牧野因幡守

一大目付被申聞候者年寄衆登城之節於中之間懸御目候面々不相

見方茂有之候、年寄衆登城前罷出懸御目候様可有之事二候、昼

御座鋪廻之刻不相見方茂候間此段も心を附可申旨年寄衆被仰

聞候由御座候間為御心得申進候

享保八卯年四月廿八日内藤丹波守家来方方此方家来方迄左之書

付差越、翌廿九日太田備中守番方左之通相成候

一 当番日只今迄もすくれて事立候儀者廻状方前同役中江紙面遣

候事候得共、其外書面事長節者おそなハリ候得共明日御成又者明日御礼衆杯時二より及暮承候儀も有之候、在宿之者心得二成候儀者早ク廻状相達候様申合候、且又當時同役衆多勢二候故廻状数通二而兎角及延引候付在所之衆江ハ翌日廻状相達候筈二候、さりなから留主之子息并家来等急ニ承知候而可然儀者即日申達候筈、寺社方之衆江も同役何茂申合候事

元文三年七月十九日

当番
朽木土佐守

一此間竹千代様表江就出御其節之儀能登殿江承候処、退出前出御二候ハ、芙蓉之間ニ相詰罷在芙蓉之間迄被遊出御候而茂其俣罷在可然候、併御目付衆御人被払候者中之間江退可然候、謁等ニ而居残退出後二候ハ、芙蓉之間ニ相詰ニ不及旨指図相濟候間其段委細同役中江手紙を以申遣候、尤出御之内御礼衆有之候ハ、殿上之間ニ而謁可然与存候間其段も咄置候事

元文六酉年六月五日

当番
朽木土佐守

一今日田安御殿江被為入夫々遠御成ニ付左近殿九半前登城中之間江罷越居候、左近殿登城相濟九半前箱出伊豆殿中務殿退出ニ付伊豆殿江明日之儀相同候処後刻左近殿江相同候様被仰聞

候、其段番頭衆江茂申達候、還御後左近殿退出ニ付明日之儀先刻伊豆殿江相同候処御手前様江相同候様ニと被仰聞候旨申候処、替儀無之旨被仰聞其段番頭衆江申達候事

一御三家方御礼事ニ而御登城ニ付伺之上居残御登城無之節退出御用番江御届ニ罷越候二者不及候、御城附江承合御登城不分明二候ハ、其趣を以伺置宜候、御三家方御老人御登城御兩人御登城無之候とて其段御用番江御届ニ参候儀ハ無之候得共、御老人御礼事ニ而御登城居残り御登城無之候とて御届ニ可相越筋ニ無之段土佐殿より申来候事

一四月晦日増上寺就御成年寄衆御先江御越五月朔日御礼之儀式進物番人数候儀、翌月之御用番御先江御越候節伺申候而宜候、又ハ其以前御同朋頭を以伺候而も宜候

例

宝曆十四申年四月晦日

当番
土岐美濃守

一明朝日御礼書来月御用番左衛門尉殿御礼書御渡可有之処、増上寺江御成有之候御先詰御越候ニ付当月御用番右近将監殿御渡候、月次御礼有之段茂被仰聞候、依之左衛門尉殿

登城刻限之儀二而御同朋頭江承合候事

一 御三家方江何も上使有之御礼御登城可有之二付伺相残居候処、

御不快二而御登城無之使者出候付居残不申退出之節御用番江

御届二罷越候

例

寛保二戌年七月廿三日

当番
松平紀伊守

一 紀伊宰相殿江御鷹之雲雀被遣候付為御礼御登城候ハ、居

残可懸目哉と中務大輔殿江相同居残候所、俄御不快二付

御登城無之使者出候由二付御三家方為御礼出候使者江ハ

謁不申候付而御目付衆江被謁候様申達候、八時過罷出候、

右二付中務大輔殿御宅江罷越右之段申達退出仕候段申置

候、以上

一 寛延二巳年九月五日日光准后御馳走之御能有之、四日当番金

兵部殿御用番相模守殿退出二翌日之儀一向伺無之登城刻限計

伺被申候由之事

一 御鷹之雁初而拝領之同役其日西丸当番二而候者、外同役御番

替致し西丸当番相勤初而拝領之同役者御本丸江罷出可然由、

寛延二巳年十一月七日土佐殿初同役中一同申談相極候事

但二度目よりハ其儀二不及候事

一月次講訳聴聞加役衆若被出候節此方之高之衆二而も加役二附

被出候条当番方ハ次二出席被申例格二候段、寛延二巳年土佐

殿青因幡殿申談濟候事

一 御普請御手伝相濟家来大勢拝領物之節者非番罷出有之候ハ、

一 両人如先格可罷出候

右之外非番者芙蓉之間二可罷在候

寛保二戌年十一月廿五日

当番
朽木土佐守

一 刑部卿殿御婚禮御祝儀相濟候与左近殿御出之筈候之由候得共

退出之節者御出無之候、老衆若年寄衆茂退出無之御規式相濟

候而左近殿被出言上相濟夫より一橋江御越候筈之由、老衆若

年寄衆熨斗目麻上下二而被出候、先達而御書付之通表向平服

二候事今日丹後殿平日之通御出可有之旨被仰聞候由昨日廻状

二申来候事

延享元子年八月廿九日

当番
朽木土佐守

一 明日触二付四時揃之由昨日廻状之節書付来候事、尤廻状江者

当日前日共不出

明和元年九月廿一日

当番
牧野遠江守

一松平兵部大輔増上寺御先詰初而相勤候付為御礼登城候得共、

松平隱岐守例ヲ以当番無構退出候事

明和二酉年十月廿日

当番
牧野越中守

一右近將監殿下屋鋪内昨晚出火有之今日登城無之候、御用番伊

予守殿御努候旨大井勢州被申聞候、然処右近將監殿九時過登

城直御用番御勤候旨同人被申聞候

同年十月廿二日

当番
松平伊賀守

一右近將監下屋鋪内今朝出火今日登城無之候、御用番伊予守殿

被相勤候旨筒井和州被申聞候、然所右近將監九時過登城直御

用番相務候旨同人被申聞候

明和二酉年十月廿六日

当番
土岐美濃守

一八時前御用番退出例伺桔梗之間二而大番頭戸田淡路守江被仰

渡有之二付右相濟候而同席二而例伺いたし候、大目付兩番頭

江も明日替儀無之段申達

同年十月廿八日於部屋申合

一同役江申談候而月々廿八日当番之節来月之御番割書付いたし

部屋江張置候事

但御番割張替候節古キ御番割放取候様申合候事

同年十一月四日於部屋申合

一当番二押合朝出候者助順改相濟候分八点掛致候事

一居殘謁候節御本丸当番謁相濟退出之節西丸当番ハ御側衆江謁

之儀申上二被出候間部屋を明押合忝人殘候事

同年十一月八日

初当番
増山対馬守

添番
土岐美濃守

一万寿姫君様御深曾義御用相勤候二付

時服二

奥御右筆組頭
白井藤右衛門

銀五枚宛

奥御右筆
橋本嘉平太

伊藤百助

右之通今日拝領物有之候得共奥御右筆於奥向拝領物ハ廻状差
出申候付今日茂廻状差出申候

例

明和元年十一月八日

一若君様御髮置御用相勤候付

時服二

銀五枚ツ、

奥御右筆組頭

清須孫之丞

奥御右筆

橋本嘉平太

伊藤百助

右之通拜領物有之候得共廻状二出不申候事

明和二酉年十一月十日

当番 牧野越中守

一今日段之間本多下総守跡目相統酒井万之助江被仰付候付当番

出席候間講釈聴聞不致候旨大目付江被申達候事

同年十一月十七日

当番 戸田長門守

一今日碁将某之者上覽有之候二付右近将監殿出雲守江以堂阿弥

前方上覽之節当番高木主水被召出上意をも蒙り候之旨御覚候

由被仰聞候、当番ハ罷出不申心得尔罷在候、猶又相糺可申上段

及御答翌十八日長門守御同人江以常阿弥享保七年之趣口上二

而申上候処、御聞被置候旨御挨拶有之候事先例左之通

享保七寅年十一月十七日

当番 高木主水正

一碁将某上覽之席江拙者儀不存寄被召出御目見被仰付難有

仕合奉存候、乍序為御知申入候

一上覽有之年左之通

正徳元卯年十一月廿一日

一御黒書院江出御碁将某被遊上覽候

享保元申年十一月十七日

一御黒書院江出御碁将某被遊上覽候

同二酉年十一月十七日

一御黒書院江出御碁将某被遊上覽候

同四亥年十一月十七日

一御黒書院江出御碁将某被遊上覽候

番頭衆江之会积二而当番会积二者不及旨申候方も有之付土佐

殿江承合候処、一統江之会积之事二付当番茂会积いたし候様

被申聞候、為見合記置

明和六丑年八月五日

一八朔之御祝儀進上之帳今日主水殿持参同断西丸上帳越中殿持

参被出候、然処松平土佐守去月廿八日国元に到着之御札献上物

損有之不納候付以親類差様候儀被相伺候所故、国元承知之上

相同候様右近将監殿被仰聞候由、依之今日上帳之儀以御同朋

当番

池田丹波守

当番

松平宮内少輔

当番

高木主水正

当番

三浦壱岐守

頭主水殿被伺候処上帳差出候様被仰聞候付、土佐守名前書載候俣二而被差出候

例

宝曆元年十二月廿一日

当番 森川兵部少輔

歳暮之御祝儀時服献上相濟翌廿二日柳生備前守居屋敷出

火差様中二候得共上帳差出候

宝曆十二年十二月廿一日

当番 黒田大和守

歳暮之御祝儀時服献上相濟翌廿二日溝口主膳正居屋敷出

火二付差様伺中二候得共上帳差出候

明和六丑年九月二日

当番 増山対馬守

一今日重陽之御祝儀上り上帳差出候砌主殿頭殿去月十八日御老

中格侍従被仰付候付、宝曆十一巳年右京大夫殿御老中末江可

罷出旨被仰付候節之例を以豊後守殿次江桁明無之相認候段、

右近将監殿江以御同朋頭申達候処御承知之旨被仰聞候、依之

西丸当番丹波殿二も豊後守殿江右之趣御届被申達候事

一当御役儀御礼其外御礼之献上物伺書御指図御同朋頭を以御附

紙二而相濟候得者右為御請使者御用番江不及差出候、御同朋

頭江宜敷御挨拶請候様二相頼申候事、尤其節之御同朋頭江右之段申談可取計儀也

一人二被頼候而も名代之御礼杯二不罷出候、同役其外無扱節者

可為格別事

宝曆四戌年十二月五日

助番 阿部飛驒守

宝曆十三年十一月十七日

当番 土井大炊頭

一御黒書院江出御碁将碁被遊上覽候

但寺社奉行二付当番御黒書院上覽之席江罷出候事

明和二酉年十二月四日

当番 朽木土佐守

一今日日光江御名代高家衆御暇二付老衆五時登城、然処昨日廻

状二登城刻限之儀無之二付向後者差出候様土佐守申聞、依之

昨日当番出雲守江承り申候処昨日三阿弥五時登城之旨老衆被

仰聞候段申聞候得共是迄廻状出来り不申候付不指出由候得共、

今日より右之通相極り候事

明和二酉年十二月廿二日

当番 土岐美濃守

一廻り後於芙蓉之間有合之面々江伊予守御本丸勤被仰付但馬守

儀若君様江被為附候段御老中列座右近将監殿被仰渡候、去申

年五月朔日廻状二ハ周防守御本丸加判列被仰付伊予守加判列被仰付若君様江被為附候段有之二付、被仰渡候通廻状江可出哉古案之通可出哉哉之段土佐守江承合候処、古案之通差出候様申聞候付其通認差出候事

同年十二月廿六日

当番
牧野越中守

一 明廿七日三州鳳来寺御宮正遷宮有之候所被仰出無之故明日替儀之伺被致候旨当番越中守申聞候

但加役二而ハ存知候事故明日替儀之伺相成間敷旨何茂評議有之候事

明和三戌年正月九日

当番
増山对馬守

一 御目付室賀源七郎当番江在着之使者上杉大炊頭より以宿次鶴拝領之御礼使者罷出候、申上之儀御奏者番より申上候哉之段申来候、依之当番对馬殿美濃守江被尋候、其内遠江殿も被出候付及相談只今迄此方方使者罷出候儀申上候事ハ無之旨被及挨拶候

同年三月廿六日

朽木土佐守

一 水戸少将殿江昨以上使御遺領御相続之儀被仰遣候為御礼今

日少将殿御登城二付、当番土佐殿中之間二被罷在御同朋頭江も御案内之儀為知具候様無急度被申達置候、御案内之儀申来候と御目付ハ御部屋江被相越当番ハ溜りへ被出如例西湖之間江御案内被申候、夫方例席二被扣居候、御対顔相濟奥方御出之節当番如例御出退御違被申候、夫方当番羽目之間通芙蓉之間江被相越直二老衆廻り有之、於御白書院西御縁頼少将殿江老衆被懸御目候、当番老衆之跡方被相越御納戸構二而先江欠拔例之通御案内被致候

明和三戌年四月十八日

当番
牧野越中守

一 大納言様御元服御官位相濟今日御礼被為請候付、御奏者番惣名代御目見之儀八朔之名代ハ披露相兼候故御番近キ方方相勤候得共、今日ハ御番遠キ方方相勤可然旨越中殿被申聞对馬殿被相勤候

同年六月二日

当番
加納遠江守

一心院殿卒去二付殿中二三日鳴物遠慮被仰出候段大目付衆為心得口達之書付被相達候得共明日替儀之例伺有之候事、尤翌三日も例伺有之候

但右伺之儀御同朋頭迄無急度掛合被申候所伺可然旨申聞候
付右之通相濟候

同年六月四日

当番
西尾主水正

一 明日増上寺台徳院様御靈屋正遷座有之候所、本役江者被仰出
茂無之二付如先格明日替儀之例伺有之候

但加役当番二候ハ、例伺無之候

一年中明日替儀伺無之日左之通

一 元日二日御用番退出之節明日之登城刻限計相伺候事

一 正月三日御用番退出之節晚程之登城相伺候事

一 御謡初夜御用番退出候節明日之儀并登城刻限も不及伺候事

一 正月四日御用番退出之節明日之儀登城刻限不及伺候事

一 正月五日明日御用番登城刻限計伺候事

一 正月六日御用番退出之節七菜御祝儀茂有之哉且登城之刻限

相伺候事、若御礼有之由被仰聞候得者進物番之儀相伺候事

一 正月十日御用番退出掛明日登城之刻限相伺候事

一 正月晦日来二月之御用番明日登城之刻限相伺候事

一 二月廿七日明日之伺無之

※ 欄 外 朱 書

一 五月廿一日明日御誕生日二付退出之節御用番江明日弥御誕
生日御祝儀御座候哉と被相伺有之旨被仰聞候得者、登城刻
限も被伺候由采女殿被申候付重而之ため記置之

一 六月八日 但本理院様御祢月二付伺無之

一 六月十四日御用番退出之節明十五日例年之通月次之御礼無
之哉并登城刻限可伺候事

一 六月十五日明日如例年嘉祥之御祝儀有之候哉之段相伺有之
旨被仰聞候与進物番例年之通可差出哉之旨是又相伺其通可
致旨被仰聞候、尤何時登城之旨相伺候事

一 七月十二日十三日之当番八盆中二付例伺無之

但十二日十三日之当番者翌日之例伺無之事

一 七月十四日之当番明十五日例年之通月次之御礼無之候哉且
登城之刻限伺候事

一 七月十五日方例伺有之候

但前々伺ハ無之候所近例伺有之候

一 七月晦日当番明朔日例年之通八朔之御礼有之哉伺候事、尤
登城之刻限伺候事

但八月之御用番江相伺候事

一 九月十九日

但日光院様御祢月^(注)二付前日伺無之

一 十月三日

但澄明院様御祢月^(注)二付前日伺無之

一 十月廿四日八明廿五日若君様御誕生日二付明日替儀伺無之

※ 老衆登城刻限承候事、尤其旨廻状二出申候

欄 一 大晦日明日登城之刻限伺候事

外 一 但正月之御用番江伺候事

朱 一 御代々御精進日前日

書 一 御女中様方御年忌

一 廿五日明日之伺至心院様廿六日御日柄二付御当代二而者伺

不申候事

一 五節句前日茂明日御礼御座候哉と承り其上御用番登城之刻

限茂承り申候

一 三季献上并御内書渡等之前日御受取之御懸老衆退出之節、

明日端午重陽歳暮献上有之候哉又者御内書御渡被成候哉何

時登城之儀相伺候、御用番江も明日相替儀伺いたし候事

例

宝曆二申年十二月十四日

当番 土岐伊予守

一 明日琉球人登城伯耆守殿登城之刻限承候処五半時可有

御出旨以意阿弥隱岐守殿御断二付、春阿弥江明日隱岐

守殿御出之刻限承候処五半時御出之旨也、番頭衆躑躅

之間不被居候間部屋江呼遣、奏者番部屋口二而明日琉

球人御礼有之候其外相替儀無之候進物番入不申候段も

相達候

七月五日

一 明日相替之儀無之候哉と伺替儀無之旨被仰聞、明日七夕之

御祝儀在り候哉と伺并登城之刻限伺候事

※ 一 毎年十月廿四日明廿五日大納言様御誕生日御祝儀有之候、

明日替儀伺無之候、御用番登城之刻限以御同朋頭承り候事

但公方様御誕生日御祝儀前日ハ伺有之候所、大納言様之

節伺無之者西丸当番代り合頂戴有之候故之事二候哉

明和九辰年六月廿一日

一今日当番因幡殿退出之節伺之儀明日随意院宮御対顔二付
 登城之刻限計相同相替儀之伺之儀者無之旨被申候、同役衆
 も有之候得共大方御精進日二有之候故御精進日二無之候得
 者明日相替儀之伺も有之方之旨同役衆申談之上、今日因幡
 守明廿二日随意院宮御対顔其外相替儀無之哉被相同候処、
 相替候義無之段被仰聞候付何時御登城之段被相同候之処、
 例刻登城之段被仰聞候

一今日者中之間江廻り之節同役衆一同罷越御老中方御列座二
 付御法事相濟恐悦之旨当番申上之候

明和二酉年六月廿四日

当番
 牧野越中守

一御内書渡候前日弥明日渡候儀承合候上御掛御老中退出
 之節、明日御内書御渡被成候哉何時御登城被成候哉相
 同候、尤御用番江も例同度候、御用番非番共二退出之節
 八御順二不構明日之伺御用番江致引統御懸御老中江致
 同候

一玄猪御祝儀之節御用番今晚登城刻限相同候事
 一御成之儀被仰出候前日、明日之儀伺不申候事

但寛延二巳年十二月六日
 廻状申来候趣左之通

当番
 井上遠江守

一御鷹野御成被仰出候前日、御用番退出之節翌日替儀有無伺
 候儀向後無用可仕旨、堀田相模守殿順阿弥を以被仰聞候旨
 自今伺申間敷旨申来

一御能有之前日御用番登城刻限承り候
 一日光御門跡御登山并御帰寺之節御対顔前日御用番登城之刻
 限承之候

宝曆十四申年五月四日

当番
 牧野越中守

一今日吹上江被為成夫方宮内卿殿江御立寄被遊候処老衆御留守
 番茂無之候故当番も居残無之候事

但当时居残有之候例

明和四亥年十月十八日

当番
 戸田長門守

一今日吹上江被為成夫方宮内卿殿江御立寄
 但宮内卿殿江御立寄二付伊予守殿被成御代合候間当番
 代り合可申哉と御同人江以三阿弥相同候処、遠御成之
 節之通心得可申旨以同人被仰聞、依之居残順江申遣為

代合土佐殿被出候

一元服之御規式書相渡候節日限相知不申候ハ、同役衆江右御書

付写銘々廻状与一所封差遣候事

明和三戌年五月廿八日

当番
土井大炊頭

一井伊掃部頭松平肥後守於御黒書院溜長御上下半御上一具

ツ、大納言様御召下被下之旨御老中列座右近將監殿被仰渡之、

当番出席之儀以常阿弥被伺候所於奥拜領物之格二候間不及罷

出旨以同人被仰聞候付出席無之候事

明和三戌年七月十六日

当番
大岡兵庫頭

一今日御用番周防殿於御宅御申渡之儀有之、非番老衆茂御越二

付周防殿先江九半時前退出、大目付衆も退出二付当番も被致

退出候事

但周防殿歸宅之案内二而非番老衆者退出之由、右者井上鉄

之進家督申渡之由

一御手伝家来拜領物添順寺社奉行月番二ても申遣候事

例

宝曆十二年閏四月廿二日

当番
酒井飛彈守

一明廿三日三州矢作橋懸直御手伝阿部飛彈守家来拜領物有

之由三枝帶刀被申聞候、今日拙者御番替相勤候得共当り

前二付近例之通和泉守罷出候様申遣候

明和三戌年八月十四日

当番
松平能登守

一明日讚州勢州川之御手伝酒井修理大夫家来拜領物有之由

水野要人就被申聞候、大炊頭罷出候様申遣候

享保四亥年十一月十六日

当番
牧野因幡守

以手紙致啓上候、今日因幡守当番之処殿中替儀不被承候付廻

状不被致候、將又平岩七之助様長崎目付代可被遣之旨於御

右筆部屋縁類若年寄様方被仰渡候由御座候、為御心得各様迄

拙者共方申上候様二と被申付候、右之趣宜被仰上可被下候、以上

宝曆七丑年十二月二日

当番
水野肥前守

追而計二而廻状出候例

今日殿中替儀不承候、以上

十二月二日

追而

御徒目付組頭

山田幸右衛門

追而

小普請

川口能登守組

伴勘七郎組

並之通御足高被下之

蓮淨院殿

同

山瀬久太郎

御徒
稻葉左京組

広敷添番

同
松平頼母組

同組与頭

石原善次郎

山中勝之丞

増田徳兵衛組

並之通御足高被下之

一八時相模守就退出罷出候、已上

同

松平庄九郎組

当番

牧野越中守

同組与頭

皆川与左衛門

追而計二而廻状出候例

勝田兵大夫組

今日殿中替儀不承候、以上

並之通御足高被下之

十月六日

右被仰付之旨於躑躅之間若年寄衆列座松平宮内殿被申渡候由

追而

御徒目付

井野口善十郎

一八時前隱岐守殿就退出罷出候、已上

金十兩

宝曆八寅年十一月廿一日

当番
戸田采女正

右駿府御城内外御修復出来見分為御用被遣候付被下候旨於燒

追而計二而廻状候例

火之間松平撰津守被申渡候由

今日殿中替儀不承候、以上

一九半時過右京大夫殿就退出罷出候、已上

当番

大岡兵庫頭

十一月廿一日

明和三戌年八月十日

一今日林図書頭講釈有之候処廻り後右近将監殿於躑躅之間支配
勘定松山惣十郎大坂之御暇被仰渡、夫方講釈之席江御右筆部
屋中之間通御出席二付当番芙蓉之間江罷越講釈之席江致出席
候

但例者被仰渡事等御座候得者講釈之席江八大目付衆江断申
達不致出席候得共、今日者右近将監殿御出席二付当番致出
席候

明和三戌年九月朔日

一明日日光御門主就御対顔例伺之儀長門守采女殿江被聞合候処、
明日御門主御登城二付何時御登城二候哉其外相替儀無之哉之
由被申聞候

同年九月二日

一明日重陽之御祝儀上候哉何時御登城二候哉其外相替儀無御座
候哉伺候事

同年十月二日

一出雲殿家督後半年御暇二而玄猪之御祝儀頂戴無之加役後去年
八忌中二付当御代玄猪之御祝儀頂戴無之候、去年戸田長門殿

当御代初而二付翌日頂戴為御礼御用番江被相伺候、依之出雲
殿御代替初而頂戴二付明日為御礼御用番江被相越候由二候

明和三戌年十月十八日

当番
内藤大和守

一台徳院様於御靈屋明日御供之節有之二付右近将監江退出之節
明日相替儀無之哉之段相伺候

同年十月廿五日

当番
加納遠江守

一今日大納言様御誕生日之御祝儀於席々頂戴之
追而

一昨日遠江殿廻状之通長門殿御祝儀頂戴以後西丸江被相越当番
大和守与被代合同人御本丸江罷出御祝頂戴相濟西丸江罷越候、
内通り罷越候儀右近将監殿江以順阿弥長門殿被相伺候処外通
り相越候様被仰聞候付今日ハ外通り被相越候

明和三戌年十月廿七日

当番
戸田采女正

一九半打候ハ、何茂致退出候様右近将監殿被仰聞候段稻垣羽州
被申聞候、九半時打何茂被出候

一今日吹上御庭江御老中方不殘奥方直二御越候由御座候
同年同月廿九日
当番
内藤大和守

一右近將監殿廻り後於羽目之間上野執当江赦帳御渡被成候、当番出席無之大目付衆も不被出候、廻状江ハ左之通差出候事

上野執当
覚王院

右去ル末年有徳院様十三回御忌御法事相濟候付赦帳於羽目之間右近將監殿御渡候

同年十一月廿四日

当番
戸田長門守

一津田日向守江昨日御目付方御用有之候二付罷出候様達有之、

今日於奥久世長門守屋敷被下旨被仰渡候由、廻状江者差出不

申候事

同年十一月廿五日

一今日民部卿殿ハ京極宮姫君寿賀宮御縁組被仰出候二付何茂御祝儀申上候、殿中服紗小袖麻上下尤詰合計御祝儀申上候様御書付出候処、平日供二御奏者番者罷出候事二付采女正大和守牧遠江守登城二付、右近將監殿江以順阿弥無急度右三人罷出候付御祝儀可申上哉之段同候処、罷出可然旨被仰聞芙蓉之間月次無之節之通当番頭二三人罷出、老衆廻り之節例之通雁之間詰御祝儀相濟候而中之間江相廻り例之通老衆這入掛御祝儀

申上候

口上

民部卿殿縁組被仰出候御祝儀申上候旨

一詰衆者例之通り詰番外不被出候、高家衆も詰番之外不被出候、大沢相模守見習二出候よし、高家衆も例御機嫌同之通り障子之方附被居候、老衆例之通廻り之節詰衆御機嫌同相濟候後詰衆民部卿殿縁組御祝儀被申上候由、菊之間二而御役人下之方二並居廻り之節御祝儀被申上候由、当番無構

一大目付勘定奉行其外芙蓉之間御役人廻り之節芙蓉之間二罷在、廻り入かけ御奏者番御祝儀申上候節中之間江例之通被相廻候由、右ハ内藤大和殿二承候付爰二記ス

一御用日之処伊賀守御用有之登城尤平服御用相濟退出、御祝儀者不被申上候

明和三戌十二月朔日

当番
戸田采女正

一宗対馬守今日參勤御礼申上候処例上候人參不被指上候、廻状追々其段差出候事

明和三戌年十二月十二日

当番
土岐美濃守

一明十三日御煤払二付御用番江当番例伺之儀采女殿江承合候処、
宝曆十三年朽木土佐殿十二日当番之節明日例年之通御煤払有
之候哉之段相伺候由被申聞候、依之今日右之通可相伺候処八
打御断二付三阿弥迄明日御煤払有之哉之段承合候処有之旨申
聞候、依之例伺不致候旨同人江申達候

明和三戌年十二月十五日

当番 戸田長門守

一水戸殿御任官之御礼松平大学頭居残御礼於大廊下御老中御逢
候、当番桜之間御障子之方二出席

一於山吹之間中奥御小性五人被仰付候、当番出席無之

明和四亥年正月三日

当番 松平能登守

一非番之老衆退出候得共御用番右京大夫殿御初之習礼有之候付

大広間江御越美濃守当番代り相勤候間跡方附参候、右京大夫

殿者大広間初御縁頼通御越、当番大目付者柳之間通大広間四

之間拭板方相越三本目之御柱際二致着座候

明和三戌年二月十九日

当番 土岐美濃守

覚

串海鼠 一箱

松平信濃守

右以宿次御鷹之鶴拝領之為御礼從国元以使者差上之、以上

但信濃守以宿次御鷹之鶴初而拝領之使者二而候得共先格初

而與申儀認不申候付今日も初而與申字相除申候、尤使者口

上二初而與申候共相認不申候事

明和四亥年正月十四日

一民部卿殿御舍弟金次郎殿今日卒去之由、七才未滿二付表向構

無之

明和四亥年二月五日

当番 土岐美濃守

一今日土御門使者御暇二付御暇拝領物申渡候様右近將監殿被仰

聞候旨三阿弥申聞候間、於檢之間御目付水野要人出席申渡銀

台御闕際二差置時服前二差置、尤三度出頂戴相濟申候

明和四亥年二月十日

当番 久世出雲守

一講釈聽聞拙者儀御用有之其上被仰渡之席江罷出候付大目付衆

江其段申達不致聽聞候、当年初而二付聽聞之衆麻上下被致着

用候

明和四亥年二月十六日

当番 土岐美濃守

一今朝牧野遠江守殿方昨日西丸当番二付謁書等如例手紙を以被

差越候、但馬守殿江以常阿弥差出候後下手紙二而妾腹男子出

生二付右謁書等差出候而も可然哉宜取計くれ候様被申越候、

右二付御同人江以同人申上候処、最早御前江も差出候儀且伊

予殿二も前方右様之謁書前日二差越候事も有之段可被仰聞相

濟候旨常阿弥申聞候、依之帰宅後遠江殿江無滯渡進達候段申

遣候事

明和四亥年二月廿八日

助番
松平能登守

一今日美濃守当番之処於増上寺天英院様御法事有之為見廻相越

候間難勤助御番松平能登殿被勤候、右二付同人江御番割被出

候衆中江相達被呉候様以手紙頼遣候、然処御法事早相濟候付

外御用も有之旁登城いたし候事、且登城無之同役衆之分御番

割四冊被相返候付美濃守方を以手紙被差遣候

一今日者月次無之廿八日之所右之仕合二付登城之程難計候間今

朝断手紙差遣候事、尤右之通早登城致候付廻り之節例之通同

役衆一同罷在候

一今日於御白書院御黒書院公家衆御饗応之稽古老衆見分有之候、

御白書院江者当番罷出御黒書院江者廻り後二八候得共当番不

致出席相濟候迄之間二罷在候事

明和四丁亥六月十日

一御経揃前日伺無之茂有之候得共同有之可然旨采女殿被申聞候

事

明和四丁亥年六月七日

当番
土岐美濃守

一今日御作事奉行正木志摩守西丸御目付小菅猪右衛門千住大橋

掛直御普請御用相勤候二付御褒美被下候処、西丸江かゝり候

御用二而無之二付被仰渡候節西丸若年寄列座無之候事

明和四丁亥年六月七日

当番
土岐美濃守

一今日佐渡奉行御黒書院列座出、御作事奉行西丸御目付芙蓉之

間御褒美、其外於御右筆部屋御役御免御役替、御目付御勘定吟

味役帰府二付於新番所溜等御座候処、宝曆十四甲申年六月四

日御目付御使番帰府二付新番所前溜向メ之前江出し有之候間、

右之例を以今日も廻状差出申候事

明和四亥年六月廿九日

助番
土屋能登守

一老衆大目付御目付衆月並列座有之、御黒書院障有之二付竹之

間二而列座有之例之通菊之間江開夕、菊之間廻り未相濟候付

高家大目付芙蓉之間御役人も御縁類方二罷在候付、当番土能
登詰番美濃守申合菊之間老衆廻り候節者御縁類高家之次江開
ク

明和四亥六月十八日

当番
板倉美濃守

一於芙蓉之間久世出雲守伊奈備前守一同罷出惇信院様御法事御
用相勤候付拝領物被仰付候旨右近將監殿被仰渡候、拝領物ハ
壹人ツ、御礼一同二罷出候当番致取合

同日

一惇信院様御法事御用相勤候付奥御右筆東条平左衛門横山富五
郎銀五枚ツ、手代り近山六左衛門銀三枚於奥被下候、先格廻
状二ハ出来不申候、古キ留奥御右筆拝領物御右筆部屋縁類二
おゐて被下候節出申候事

明和四亥年七月二日

当番
加納遠江守

一佐渡守殿西丸御附被仰付候付但馬守被相勤候節之通相心得可
申哉と御同人江以常阿弥相同候処、其通可相心得旨同人を以
被仰聞候間為御心得申進候

明和四亥年七月廿二日

助番
土岐美濃守

一於御右筆部屋縁類周防守殿出席若年寄衆待座、小笠原権九郎
道奉行被仰付御役扶持被下置西郷出羽守召連罷出候処、先格
廻状二者御役扶持并召連之儀も無之二付今日茂先格之通御役
扶持召連之儀廻状二差出不申候事

寛延三年四月二日

当番
井上遠江守

一今朝年寄衆五半時過登城、拙者儀者已前罷出候処刻限早く詰
番之面々中之間二不詰合面々茂有之一役壹人ツ、不詰合候て
ハ御用も不相濟候、自今其旨可心得候由寄々可通置候様相模
守殿被仰聞候段能勢因州被申聞候、為御心得申進候

明和四亥年四月五日

当番
土岐美濃守

一但馬守殿痲積氣二而今日登城無之見廻等御断之由、西丸御用
向伊予守殿御心得候段常阿弥申聞候付右之段早速西丸当番土
能登守江以手紙申遣、其後大井勢州右之趣猶又被申聞候二付
廻状二者大井勢州被達候趣差出候事

明和四亥年八月廿八日

当番
土岐美濃守

一佐渡守殿從弟之忌中二付今日登城無之候、悔見廻等御断之由、
西丸御用向伊予守殿御心得候段盛阿弥申聞候付右之段早速西

丸当番加遠江殿江以手紙申遣候、其後筒井和州右之趣尚又被申聞候付廻状江者筒井和州被達候趣二差出候事

明和四亥年九月二日

当番 牧野越中守

一今日伊予守殿俸服有之、廻リ二者被出候得共御名代御祭礼奉行申渡之節者細廊下に扣出席無之、浅野備前守河野吉十郎清揚院様御靈屋御修復相濟候二付御褒美被下、右之節ハ伊予守殿出席被致候

一日光御門跡近々御登山二付今日御対顔、伊予守殿石見殿服有之候得共御門跡御饗応之席江も被出候、奥向御請二而者無之候事

明和四丁亥八月十五日

当番 土岐美濃守

一伊予守殿以順阿弥無急度御尋之由二而当番美濃守江同人申聞候者、明十六日水戸中将殿御前髪御執候二付御登城於御座間御対顔御座候、右二付今日御書付等二て出候哉覺罷在候哉之段順阿弥申聞候間、先格等覺不申候得共吟味いたし可申上旨及挨拶候処、同人申候ハ右之儀今日御沙汰無之候而ハ差支も可有之哉と申候間、縦今日御沙汰無之候とも御座之間之儀御

案内計二候二付若し着服等之儀二も可有之哉、何レ二も明日

相伺候而も不苦候事今日御沙汰無之とも差支無之旨申達候、

然処伊予守殿順阿弥江被仰聞候者明日水戸殿之儀二付今日者何も御沙汰無之候間伺候事も御座候ハ、明日相伺候様被仰聞候旨申聞候、依之退出之節例之通相伺候得者相替儀無之旨被仰聞候事

但前日御沙汰有無之例御三家之部二記之

明和四丁亥閏九月朔日

当番 土岐美濃守

一今日右近將監殿周防守殿不快二付西丸御老中佐渡守殿出御之節御黒書院御白書院江も出席被致候付、此段廻状江差出可申哉と土佐殿江申談候処、廻状二出二不及旨被申聞候付其通りいたし候事

但御老中四人之処兩人不快之例左之通

宝曆十三未十二月朔日

追而

一左衛門尉殿但馬守殿不快二付今日登城無之候
右之節も廻状江者御老中人少之訳不出候事

右之節も廻状江者御老中人少之詔不出候事

明和四亥閏九月十四日

当番
土岐美濃守

一進物番六七八例月次之通りと認候方宜敷旨土佐守申聞候、

其余者人数申候事

同十五日

当番
牧野越中守

一老衆芙蓉之間江御出阿部主計雁之間席被仰付旨被仰渡有之、

当番代り長門殿御柱際二出席

一右主計今日雁之間席被仰付候二付為願伊予守殿江相越候義先

格之通廻状江者不出候

但月次初而出仕之当朝席之儀被仰付候先格之由

同日

一松平丹後守進物箱肴御縁類上より一疊目侍従之疊目江出候二

付、入御相済当番越中殿順阿弥江進物疊目違候段申達、并番頭

松平市正江松平丹後守進物疊目違候段越中殿美濃守一同越中

殿被申達進物番差扣之儀相同候由、肝煎者無構

明和四丁亥閏九月廿八日

当番
久世出雲守

上州小幡江

松平撰津守

領地替

右於奥被仰付候由

追而

一松平撰津守殿領地替被仰付於御前重蒙上意難有由被申達候段

稻垣羽州被申聞候

但城主者所替と唱無城者領地替与申候事、尤領地替者御礼

不申上候事

明和四丁亥閏九月廿四日

当番
牧野越中守

一廻り之節右近將監殿於躑躅之間高木監物江拝領物被仰渡、被

仰渡之節二間程上江進候、但三度出被仰渡相済当番出席、監物

拝領物頂戴志さり候進物番拝領物引御礼、御闕之内壺疊目之

上江罷出候与当番取合いたす

明和四丁亥年十月七日

今日殿中替儀不承候、以上

十月七日

追而

一去四日御成之節騎馬勢子例年方宜候申合能故と被答候、此段

御使番御徒頭江於山吹之間水野壹岐殿被申渡候由

一周防守今日も登城無之候

一八打伊予守殿三阿弥を以御断ニ付罷出候、以上

但去月五日牧野越中守当番之節追而計ニ而廻状不被致下手

紙ニ而差越候得共、其後同月九日ニも追而計ニ而増山対馬

守殿廻状被指出御通、度々先例も有之候事

同日

一今日於新部屋前中奥御小性去四日御成之節騎馬勢子例年方宜

候申合能故と思召候段可申聞旨申渡有之由ニ候得共、先格之

通廻状差出不申候

明和四亥年十月廿四日

当番
加納遠江守

一於御黒書院溜井伊掃部頭居城之内櫓多門先達而就焼失拝借之

儀相願難成儀候得共、格別之儀ニ付金五千兩拝借被仰付候旨

御老中列座伊予守殿被仰渡候、廻り前二付当番出席無之夫よ

り老衆細廊下通菊之間江被相越右近将監殿右京大夫殿二者芙

蓉之間御縁類ニ立被居候、伊予守殿菊之間御縁類ニ而兩御番

衆進物番被仰付有之、若年寄衆侍座当番例席ニ可罷在候所老

衆被居候付御杉戸之方ニ罷在候、但御杉戸之方ニ老衆被居候

ハ、例席ニ罷在候心得之処御障子之方ニ附右之通相濟

同日

一於御右筆部屋縁類町奉行豊前守倅依田平次郎同越前守倅土屋

長三郎豊前守越前守病氣ニ付出火之節為名代火事場江可罷出

旨伊予守殿被仰渡有之、廻状江も出シ申候事

宝曆六子年六月十一日

当番
永井伊賀守

御座之間

若年寄

小堀和泉守

右於御前被仰付之

一小堀和泉守若年寄被仰付候段於芙蓉之間在合之面々江御老

中列座、伯耆守殿被仰渡之若年寄衆侍座

追而

一御礼過有合之面々芙蓉之間江寄候様ニ御目付衆被申聞候付

若年寄衆被仰付候節、右被仰渡候時者前々方当番者不罷出

段申達候処、其後伯耆守殿伊丹兵庫江被仰聞候由御用之趣

も不相知事候得者同席江寄候様可致旨同人申聞候付罷出候

処、和泉守若年寄被仰付候旨被仰渡候、此段為御心得申進候

同八寅年三月廿八日

御座之間

当番
鳥居伊賀守

御座之間

若年寄

酒井石見守

西丸

西丸
若年寄

本多長門守

右於御前被仰付之

一酒井石見守若年寄被仰付候段於芙蓉之間有合之面々江御老

中列座、河内守申渡之若年寄衆侍座

同十二年十二月九日

御座之間

当番
久世出雲守

同年九月廿八日

御座之間

当番
青山因幡守

若君様附

鳥居伊賀守

西丸
若年寄

御役替
水野壹岐守

若年寄

右於御前被仰付之

同十辰年三月廿二日

御座之間

当番
阿部伊予守

右於御前被仰付之

一於芙蓉之間有合之面々江鳥居伊賀守若君様附若年寄被仰付

候段列座同前、左衛門尉殿被仰渡若年寄衆侍座

当番
朽木土佐守

右於御前被仰付之

一鳥居伊賀守若年寄被仰付候段於芙蓉之間有合之面々江御老

中列座、相模守申渡之侍座同前

若君様附

御役替
酒井飛驒守

同十一巳年八月十五日

当番
土井大炊頭

右於御前被仰付之

若年寄

明和四亥年十月廿六日

当番
土岐美濃守

御座之間

若年寄

加納遠江守

右於御前被仰付之

一加納遠江守若年寄被仰付候段於芙蓉之間有合之面々江御老

中列座、伊予守殿被仰渡候若年寄衆侍座

一御目付江若年寄支配之分芙蓉之間江寄七候様三阿弥申候

由、依之大目付衆江前々ハ若年寄被仰渡之節ハ若年寄支

配計芙蓉之間本間ニ罷在当番御縁頼柱際罷在候間大目付

衆とも申合と而も其通可致之旨申談候処、又々御目付方

も前々ハ若年寄支配計ニ候近年ハ詰合不殘罷出候由、御

目付衆方尚又伺も有之候処致進格候様伊予守殿被仰聞候

由ニ付詰合之面々も罷出候、美濃守も高家衆之頭江罷在

候処老衆列座若年寄侍座、撰津守老岐守石見守之通遠江

守も相勤候様被仰付候間其旨相心得候様伊予守殿被仰渡

候事

明和四亥年十一月九日

当番
松平丹波守

一加納遠江殿今日拝領屋敷被引移候段土井勢州被申聞候、右二

付廻状追而二差出可申哉与先格致吟味候処、宝曆十辰年三月

廿二日鳥居伊賀殿若年寄被仰付候砌拝領屋敷江被引移候迄諸

御礼事ニ付罷越候儀断之由大目付衆達有之、引移候節之儀廻

状無之且当七月十八日水野老岐殿蠟蝋殻町屋敷江被引移西丸下

拝領屋敷江被引移候迄御礼勤其外諸事断之由大目付衆被申聞

候段廻状ニ出候得共、其後拝領屋敷江被引移候儀廻状ニ無之、

尤当月朔日加納遠江殿拝領屋敷江被引移候迄ハ御礼勤諸事断

之由大目付衆被達候段廻状ニ出候得共、其後拝領屋敷江被引

移候儀廻状ニ無之、尤当月朔日加納遠江殿拝領屋敷江被引移

候迄ハ御礼勤諸事断之由大目付衆達有之段回状ニ出候得共、

先格延享五辰七月朔日小出信濃殿若年寄被仰付同年閏十月朔

日松平撰津守殿同断、寛延二巳年七月六日酒井石見殿同断、宝

曆八寅年九月廿八日水野老岐殿同断、明和二酉年八月廿一日

酒井飛彈殿同断之節者御礼勤断之儀共二一向回状ニ相見不申

候二付、今日加納遠江殿拝領屋敷江被引移候儀回状差出不被

申候様丹波殿江申遣候事

明和四亥年十一月三日

一 御拳之雁御三家溜詰越前守江被下候御使於中之間右京大夫殿被仰渡、御拳之雁二付御同朋頭奥方持出被仰渡之席江持出候事、当番無構

明和四亥年十一月十五日

一 宮内卿殿婚姻之翌日出仕之節着服之儀大目付衆江茂被聞合候処、熨斗目腰明キニても不苦候段被申聞候旨越中殿留ニ有之段被申越候

明和四亥年十二月朔日

当番 牧野越中守

一 紀伊殿今日於御座之間被任中納言候付西湖之間御案内之段御同朋頭申聞候付例之通当番相勤、夫方主水殿西湖之間御縁類ニ罷在当番ハ羽目之間当番座ニ罷在御錠之口ニ而西湖之間御縁類ニおゐて紀伊殿前日致中座、夫方竹之御廊下水戸殿尾張中将殿御案内申候、紀伊殿御錠口より御出ニ付主水正松之間ニて御案内、夫方紀伊殿御跡方竹之御廊下通被越候

但松溜御障子之方ニ水戸殿尾張中将殿御着座ニ付中礼いたし溜詰之方江開候

明和四亥年十月廿五日

西丸当番 松平丹波守

一 今日御誕生日御祝儀、御祝頂戴例年之通西丸当番も代合頂戴之儀ニ付丹波殿西丸当番ニ付御用番御宅江被相越御届等も被致候儀ニ御座候哉、去年越中殿西丸当番ニ付以手紙承合候処附紙ニ而左之通被申候

附紙

御用番江御届不相越候

一 丹波殿代合ニ而御本丸江被出候節御用番江御届入可申哉、亦御祝頂戴相濟西丸江被出候節も西丸ニ佐渡守殿被出居候ハ、是又御届入可申哉之段承合候処附紙左之通

附紙

御本丸江相越候節從御本丸罷帰候節共、佐渡守殿西丸ニ御出之内ニ候得者右両様共ニ御同朋頭江申達置候
一 佐渡守殿見廻無之御本丸ニ御出之内ニ候得者御本丸江被出候儀并西丸江罷帰候儀共ニ御届不申候、御用番江も前日御届相濟候事故御届等ハ入不申候

宝曆十三未年十月廿四日

当番 牧野越中守

一明日西丸当番御祝頂戴之儀当春御色直之節之通代り合御本丸
江罷出頂戴可仕哉与右近将監殿以良阿弥相伺候処、可致其通
旨被仰聞候付代り合候儀明日同役衆申談候上相極り可然与存
候

同廿五日

西丸当番
戸田采女正

一今日当番御祝儀為頂戴御本丸江相越候付為代土佐殿被出候付
周防守殿江以盛阿弥同人被申達候

明和元年十月廿四日

当番
加納遠江守

一明日西丸当番御祝頂戴之儀去年之通代り合御本丸江被出御頂
戴可成と存候、尤右之段無急度守周防殿江以常阿弥申達候就

右代り合候儀申談候通助順二而被仰合御越可被成と存候

同廿五日

西丸当番
仙石越前守

一今日当番御祝儀為頂戴御本丸江相越候付為代加遠江殿被出候
段伊予守殿江盛阿弥を以同人被申達候

明和二年十月廿四日

当番
加納遠江守

一明日西丸当番御祝頂戴之儀去年之通代り合御本丸江御出御頂
戴可成与存候、尤右之段無急度伊予守殿江以常阿弥申達候、右

二付代り合之儀申談候通助順二而被仰合御越可被成と存候

同廿五日

西丸当番
牧野越中守

一今日当番御祝儀為頂戴御本丸江相越候付代り合之儀昨日伊予
守殿江遠江殿被申達相濟候事二付、土佐守右今日別段二八不
申達候旨同人申聞候

明和三年十月廿四日

当番
牧野越中守

一明日西丸当番御祝頂戴之儀去年之通代り合御本丸江被出御頂
戴可被成与存候、尤右之段無急度右近将監殿江以三阿弥申達

候、右二付代り合之儀申談候通助順二而被仰合御越可被成と

存候

同廿五日

西丸当番
内藤大和守

一今日当番御祝儀為頂戴御本丸江相越候付為代長門殿被出候段
但馬守殿江以盛阿弥同人被申達候

明和四亥年十二月四日

当番
戸田長門守

一今日佐渡守殿西丸江御出有之旨盛阿弥申聞候二付当番長門殿
右西丸当番越中殿江例之通手紙被差越候処、其後八打佐渡守
殿御出八有之候得共御断之由盛阿弥申聞候付、早速下手紙二

而右之段西丸当番江被申越候事

明和四亥年十二月十二日廿三日

銀十枚

当番
牧野越中守

觀世新九郎

名代
觀世權九郎

右年久敷相勤候付為御褒美被下候間於燒火之間加納遠江殿被

申渡候由

右廻状二差出候事

明和五子年正月廿日

一右近將監殿宅江御老中方今日寄合二付右近將監殿非番御老中

方先江御退出、非番之御老中方御居殘二候得者如先格当番并

詰番共致退出候

明和五子年二月五日

当番
土岐美濃守

一土御門使者白井左京御暇拝領物申渡候様伊予守殿以順阿弥就

御差図於桧之間申渡、拝領物頂戴之奉書相渡候間御納戸裏江

被廻置候様御目付衆江申達、其段伊予守殿江以順阿弥申達候

明和五子年三月八日

当番
松平伊賀守

一板倉佐渡守殿居屋敷手狭二付中屋敷可被下候間場所見立可相

願旨被仰渡候、右廻状江出申候

明和五子年三月十二日

当番
松平丹波守

御使者
渡辺久蔵

御小性組高井土佐守組
稻垣求馬

右山形江近々就発足御黒書院溜御老中烈列座江罷出右京殿御

黒印等被相渡候

但例御黒印御下知状等相渡候得共此度者御番城引渡二付御

下知状ハ相渡不申候、依之今日承糺候上右之通廻状差出申

候事

明和五子年三月廿六日

一近々大納言様御城外江被為成候二付西丸当番居殘之儀佐渡守

殿江相伺候様御同人御内意被仰聞候由盛阿弥申聞候

但別段二盛阿弥申聞候者、委細桜井七左衛門江懸合候様申

聞候二付前々ハ御右筆江御奏者番伺之儀掛合候儀も有之候

得共、當時之御右筆江御奏者番懸合候儀者無之旨申聞候所、

盛阿弥申聞候者右同方之儀委細七左衛門江懸合候様同人申

聞候旨盛阿弥申候二付、左候ハ、何レニも美濃守七左衛門

聞候旨盛阿弥申候二付、左候ハ、何レニも美濃守七左衛門江懸合候様申達候

但大目付筒井大和守江も右之段盛阿弥申達候

一桜井七左衛門江美濃守逢先刻佐渡守殿以盛阿弥近々大納言様御城外江被為成候節居残之儀相伺候様御内意被仰聞候、盛阿弥申聞候者右同方之儀其許江懸合候様申聞候段申達候処、同人申聞候者先達而大目付衆方先例書も上り土佐殿方出候先例書を以佐渡守殿方居残之事被仰渡候様二今日御評儀茂有之候処、何レニ茂御奏者番大目付方伺出候様御評議相濟伺二相成候間、御伺之儀近々大納言様御城外江被為成候二付西丸当番居残還御承り退出可仕哉之趣極候而相伺例書茂相添差出可然旨申聞候間、何レニ茂兩様之下附ケいたし為見可申候間内覽之儀頼申候、いつ頃伺候而可然哉之段是又同人江懸合候処、明日差出候様申聞候間左候ハ、明日之当番方以御同朋頭佐渡守殿江差上ケ可申哉之段及対談候処其通致候様申聞候、猶又同人江承り付候哉之段懸合候処承り付候而申聞候

一於部屋別紙之通下書認七左衛門江懸合候処右之通二而明日差

出候様申聞候、例書之儀者相添一所二可差出旨是又同人申聞候、右西丸居残伺之儀何レ共御差図相濟候ハ、御本丸御用番江御届入可申哉之段七左衛門江懸合候所其通り致候様申聞候間、尤御本丸御用番江者佐渡守殿江承返上之節以御同朋頭其日之当番方口上二而御指図之趣申上候旨懸合候処、是又左様二致候様申聞候

一七左衛門江別紙之通延享之度者御本丸当番居残之儀相伺候、此度者振合も違候間如何可致哉之段同人江及内談候処、先刻御評議も相濟佐渡守殿江御伺之方二相成申候間御本丸居残之儀者及伺申間敷旨申聞候間、左様候ハ、同役共江も其許江懸合此度者御本丸当番居残之儀者相伺不申旨可申達旨申候所左様二取計可然旨申聞候

一大目付筒井大和守も右同様之趣七左衛門江被懸合候二付七左衛門申聞候者、右伺書等御奏者番大目付同様二出可然旨申聞候付、大和守此方伺書例書等見被申度段被申聞候付則拜見申候、尤佐渡守殿江伺相濟御本丸御用番江御届并御本丸当番二て者居残之儀伺不申儀も大和守江懸合候処、大目付方二而も

御奏者番

近々大納言様御城外江被為成候ハ、西丸当番居残還御承退
出可仕哉此段奉伺候

三月

例書

御奏者番

寛保三癸亥年四月十一日

一大納言様田安御門外飯田町辺江被為成候節西丸当番居残之
儀得与相知不申候

延享四丁卯年十二月五日

一大納言様浅草筋江被為成候節西丸当番居残申候

三月

明和五戊子年三月廿八日

当番
土岐美濃守

一佐渡守殿三阿弥を以唯今越中守方被差出候伺書御附札を以被
仰渡候付、土佐守江も懸相談御用番右京大夫殿江三阿弥を以
御附札之趣口上二而御届申上候処御承知被成候旨同人申聞候、
且大目付衆江者伺書承附二相成候旨稻垣羽州被致拝領候、御
附札且廻状面左之通

追而

一昨日越中守佐渡守殿江以常阿弥差出候伺書二被成御附札御
同人以三阿弥御下ケ被成候付御附札之写進申候、尤越中守
差出候伺書者昨日為御扣相廻り候付今日進不申候、且右御
附札之趣を以右京大夫殿江以同人御届申達候処御承知之旨
以同人被仰聞候

御附札之写

可為伺之通候、向後書面
之通可被心得候

例

宝曆十一巳年八月九日

当番
毛利讚岐守

一昨日飛驒殿左衛門尉殿江被差出候書付江御附札被成御同
人以良阿弥御下ケ被成候付御附札之写進申候、尤飛驒殿
被差出候書付者昨日御扣として相廻り候付今日進不申候
御附札写

可為勝手次第候

明和五戊子年四月十六日

当番
土岐美濃守

一 土佐守越中守伊賀守美濃守相談之上当番二付美濃守右近將監殿江以順阿弥万寿姫君様御結納之節着服之儀先達而被仰出者有之候得共、御奏者番勤方二寄無地熨斗目カチン上下着用可致哉之段用意等も有之候間無急度伺候処、先ハ着用無之候得共着用可致儀有之候ハ、追而あなたより可被仰聞段順阿弥を以被仰聞候、右之段廻状江者不差出同役衆江者時々申達候事二も可有之与美濃守者後候段土佐守伊賀守江も申談候処、何レとも廻状追而江出申候間可然旨何も被申候二付、古役之仁被申候事二付任其意左之通廻状江差出申候

追而

一 御結納御当日同役共着用之儀加珍上下着用可仕哉先達而御書付ハ出候得共、勤方之程も相知不申候付右近將監殿江順阿弥を以相伺候処、着用之儀二も候ハ、追而可被仰聞候由御存候、此段為御心得申進候

明和五子年四月廿四日

当番 遠藤備前守

一 明廿五日万寿姫君様御結納相濟候二付惣出仕之処右二付尾張殿招請相伴二被參候、同役西丸江ハ朝之内登城恐悦申上廻勤

之儀者先格も有之二付翌廿六日ハ御日柄之事翌々廿七日廻勤可致旨聞合有之候ハ、其通り可達哉之旨以順阿弥稻垣羽州江被相尋候処其通いたし候様被申聞候事

明和五子年四月廿五日

当番 土屋能登守

一 今日万寿姫君様御結納相濟候二付惣出仕二付同役申合何も無程熨斗目花色上下致着用候、熨斗目カチンも被致着候仁有之候、尤御書付二者腰明熨斗目二而も勝手次第之旨候得共右之通申談候事

明和五子年四月晦日

当番 久世出雲守

一 去ル廿五日万寿姫君様御結納之御祝儀献上之上帳御本丸当番能登殿順阿弥江懸合被置候処今日不快二而登城無之候、御本丸二てハ明日上帳之儀伺者無之事之由順阿弥申聞候段土佐殿被申聞候、西丸二而者土佐殿以盛阿弥佐渡守殿江被伺候処西丸二而差出候様被仰聞候

明和五子年五月十六日

当番 遠藤備前守

一 於新番所前溜大沢相模守願之通居屋敷引替被仰付候処、先年由良播磨守居屋敷引替願之通被仰付候節も廻状出不申候二付、

土佐殿江備前殿被及相談候処廻状出候二及申間敷旨被申聞候由、依之今日廻状二出不申候得共於新番所前溜下屋敷被下候、其外居屋敷引替被下候義廻状出候例も有之候二付、重而八尚又評議之上廻状差出可然事

例

宝曆四戌年

七月廿日

駿河台

荒木十之丞

上ヶ地六百五十坪

右願之通屋敷引替被下候、只今迄之屋敷可差上旨於新番所前溜小出信濃殿被申渡候由

宝曆七丑年

五月廿五日

本所法恩寺前

御徒上ヶ地之内

千五百坪

右願之通下屋敷被下候旨於新番所前溜右近將監殿被仰渡之

明和五戌子年六月朔日

当番
松平丹波守

一大納言様今日御白書院江出御二付前々奥ノリ之節者当番大廊下二罷在其外同役衆者帝鑑之間二而御目見仕候、去々戌年五月五日大納言様江御目見之節者帝鑑之間惣名代忝人罷越其外同役ハ溜り二罷在候夫方大広間江罷越候、今日ハ五月五日之廻り二可相心得哉之段相伺被具候様一同被仰渡相濟候後当番丹波殿方伊予守殿江以順阿弥被相伺候処、公方様出御之節之通り溜二罷在名代忝人帝鑑之間二者罷在候様被仰聞候其通り相濟申候、其後土佐殿能登殿被申談於御黒書院加賀守御目見之節当番者月次御礼之通り竹之御廊下罷在御目見初り候与溜江相廻候様申談、依之順阿弥迄先格無之二付若御沙汰も有之候節之事如右之趣美濃守咄置候事

一今日大納言様江備前殿初而御目見被申上候二付御礼之儀大目付衆江承合候処、西丸江罷出夫方御老中方田沼主殿殿迄被相廻候様被申聞候

明和五子年六月廿二日

当番
松平能登守

明和五子年六月廿二日

当番
松平能登守

一堀直一郎今日被為召候処幼年二付名代堀圖書罷出候、直一郎亡父大膳亮元席菊之間二付於芙蓉之間被仰渡可有之処、名代之席柳之間二付浪之間二而被仰渡候

但前々ハ当人之席二而被仰渡候処近来名代之席二而被仰渡候由

明和五子年七月十一日

初当番
太田備後守
添番
内藤大和守

一今日尾州濃州勢州川々御手伝之衆家来拝領物就有之候、昨日貴様御廻状之通土能登殿可被出候処、此間中疝積氣其上腹痛疝瀉之気味有之今以睨と無之候付難被相勤次順段々相障松能登守罷出候

但右段々相障与申文談宝曆三酉年六月十六日黒大和殿廻状之申合之趣とも相違二付内藤大和殿江も右之趣掛合候処、土能登殿方之手紙之趣段々相障松能登殿持参二付手紙通二廻状被認候由被申聞候得共、以来被用例二ハ相成間敷事
右申合古格左之通

宝曆三酉年六月十六日

当番
黒田大和守

一昨十五日松平阿波守家来拝領物之御沙汰有之由、森兵部殿承知付先達而土佐殿被相廻候書付之趣も有之間拙者翌日之就御番可致出席旨被申越罷出相濟申候、然処若御使先与落合候節者如何二付前日御番之者ハ右之御沙汰も可承事二候間、向後前日御番之者罷出可然と今日被出候同役衆申談候、併前日御番之者助番或ハ御番替等二候ハ、誰二ても頼合被出候様二可致候、若助御番等遅申来候歟故障之儀も候而御間二合不申候ハ、詰合之加役衆之内御用無之衆可被致出席旨被申候、万一加役衆も差懸御用有之不被致出席頼合候衆中茂相障り御間二合急候ハ、其段御出席之御老中方江当番之もの申達候様可致旨是又申合候、為御承知申進候
右追廻状二而申来

宝曆六子年五月四日

当番
井上河内守

一小笠原伊予守家来拝領物二付昨日下午殿廻状候通同人可被出候処頼二付兵部少輔罷出候、尤拝領物兩人宛罷出候段稻生下野守被申聞兩人出席相濟申候

一 酒井修理大夫家来就拜領物昨日松能登殿廻状之通大炊殿可
被出之処御用日有之難被相勤加遠江殿被出候、尤拜領物山
田甚五左衛門外兩人宛罷出候段松平縫殿被申聞兩人出席相
濟申候
右御番割左之通

朔日

||||

||||

七日

加遠江

||||

十三日

越前

十四日

大炊

十五日

美濃

明和五子年七月十日

当番
土岐美濃守

一 明十一日尾州讚州勢州川々御手伝之衆家来拜領物有之由水

野要人被申聞候付拙者可罷出処、御用日二付土能登殿罷出

候様申遣候

右御番割左之通

七日 土能登
八日 越前
九日 出雲
十日 美濃
十一日 備後
越前

十一日

備後

越前

明和五子年七月十九日

助番
土屋能登守

一 紀伊殿御国許御使帰酒井備中守病氣二付名代水野山城守罷出

廻り御這入懸右京大夫殿於羽目之間御逢御請被申上候、廻り

後二付当番并大目付致出席候、右京大夫殿御這入候与佐渡守

殿羽目之間江御越水野山城守罷出大納言様江之御請被申上候、

当番并大目付衆被致出席候

明和五子年八月十五日

当番
牧野遠江守

一 今日西丸進物番之儀者当番より伺有之候哉之旨盛阿弥申聞候

処、大和守及挨拶候者西丸進物番之儀者御沙汰有之候得者当

番方両番頭江申達候、此方者伺不申候段被申達候処、其後御

沙汰無之若年寄衆方番頭衆江御沙汰も有之候由二候

明和五子年八月廿日

当番
仙石越前守

御目見医師

小川丹治

右小石川養生所御用情出相勤候付一生之内二十人扶持被下候

旨於御右筆部屋縁類列座同前御同人被仰渡之若年寄衆侍座

右為御礼西丸江茂罷出候例

明和二酉年十二月十四日

当番
西尾主水正

御目見医師

小川丹治

右小石川養生所御用数年相勤二付於御本丸拜領物仕候為御

礼罷出候

明和五戊子年五月九日

当番
土岐美濃守

一今日幸若御暇被下候得共先格之通廻状江不出候事

明和五戊子年九月廿日

当番
土岐美濃守

一今日吹上二而大的上覽奥向之衆被相勤即日右御場所二而御褒

美被下候由候得共廻状二者出シ不申候

例

明和二酉年十月廿六日

当番
土岐美濃守

明和三戌年九月廿七日

当番
土井大炊頭

明和四亥年閏九月十四日

当番
土岐美濃守

延享三寅年十月廿五日

助番
青山伯耆守

追而

一九半時過隱岐守殿退出二而御座候、拙者儀御鷹之雁拜領之

面々江謁候付居残候処出仕之刻限二相成候間直二助御番相勤

申候

一例今日兩度二廻状致候得共居残候而罷在候付廻状忝度二差出

候

同日

西丸当番
牧野因幡守

一今日御鷹之雁被下候面々有之旨御本丸助御番伯耆守方申越候

付居残謁相濟七時致退出、今晚就玄猪直二御本丸江罷出候

明和五子年十一月三日

当番
土岐美濃守

一明四日遠御成被仰出候得共右即前八打御改二付中之間江罷出

明日相替儀無之哉之段順阿弥を以相伺候処、相替儀無之段被

仰聞其後筒井和州御成之儀被申聞候事

明和五子十二月廿二日

当番
本多豊後守

一御部屋様方水戸殿江歳暮之御祝儀被遣候御礼且公方様大納言

様御台様方俊詳院殿江同断被遣候為御礼被差上使者、右使者八時前罷出候、御目付衆申上候儀有之八打周防殿以三阿弥御用無之者致退出候様被仰聞候二付、右使者御逢之儀残り候間当番并大目付申合之間扣罷在候、周防守殿八半時前退出かけ於躑躅之間御逢候付当番如例致出席候、明日之伺且堀田相模守以上使御鷹之雁被下候御礼登城候ハ、謁之儀於御納戸前廊下被相伺候

但改後御老中御逢之先格睨与無之二付廻状二者左之通出ス

追而

一八打周防守殿以三阿弥御用無之面々者罷出候様御改二而

御座候、拙者儀謁相濟八半時過罷出候、已上

明和六丑年正月十六日

当番 土岐美濃守

一明十七日紅葉山御宮江公方様御参詣還御已後大納言様被遊御参詣候旨大井勢州被申聞候、其後大納言様二者御延引被仰出候

一大納言様御参詣被仰出候付被出候同役衆申談佐渡守殿江以盛阿弥明日御参詣被仰出候付御進献御太刀渡之者罷出不申

候段御届申達候処御承知之段同人申聞候、其後御延引被仰出候

一明日大納言様御参詣御延引被仰出候付御名代若佐渡守殿御勤候ハ、御進献御太刀渡入候間御鏡餅御用代り之者相勤候様御同人以順阿弥被仰聞候付、御鏡餅御用代り兵庫頭江以表手紙申遣候

但若御名代御勤候ハ、与申所順阿弥江懸合候処、天氣相

二而公方様御参詣明日御延引被仰出候得者大納言様御名代者無之、公方様御参詣有之候得者御名代有之趣之由同人申聞候事

一今日雪二付御三家方御城附謁候書付并静吉田三社之御被従水戸殿被差上候、謁書阿部飛彈守京着之御礼使者之目錄未従西丸丸当番不差越候、早ク差出候様盛阿弥申聞候二付西丸二而九打見合謁之儀二付未参候段申達候、其後右謁書目錄等従西丸当番長門守差越候間佐渡守殿江以盛阿弥差出申候

但明日者御参詣被仰出候儀二付右謁書等今日間二合不申候而者明日不相成候二付、御急キ之趣二候重而ハ右様之節者

心得可有之候事

明和六丑年正月廿六日

当番
松平能登守

一今日御勘定支配勘定被仰付候面々有之候得共大勢衆名前不分

明二付不申進候

明和六丑年二月十日

当番
太田備後守

一今日講釈有之、当番出席之節講釈終り老衆会釈有之候節当番

茂致時宜候段先達而美濃守当番之節之留書二有之候、然処老

衆会釈者番頭衆江之会釈二付当番時宜請不申候而も宜旨同役

衆之内被申候仁茂有之二付土佐殿江承合遣候処、番頭衆江之

会釈二而八有之間敷当番会釈請候而宜旨師伝二候段返書二被

申越候、備後殿方右否之儀被問合候付承札候上則留書之内左

之通書抜別紙二認遣候、重而為見合記之

宝曆十四申年四月十二日

当番
土岐美濃守

一老衆揃後当番芙蓉之間二罷在今日講釈有之、詰合之御役

人雁之間二罷在候

一老衆廻り之節詰衆伺御機嫌於御縁類相濟奥江御入候、老

衆山吹之間二着座、高家詰衆八廻り相濟候者直二聽聞之

席江被相越、当番者例席二扣罷在、大学頭罷出見台中奥御

番扨出候与詰衆与次二当番出席、講釈初り畢而老衆会釈

之時致時宜大学頭引候而当番退

延享四卯年九月十九日

当番
酒井修理大夫

縮緬二十卷

上使松平右近将監
尾張中将殿

右御移徙付為御祝儀被遣之

一右為御礼中将殿御登城候ハ、懸御目可申哉と雅樂頭江相同

申候処例之通可致旨申聞候付居残可申候処、拙者儀月番二

付御用有之致退出候故幸伊勢殿被居合候之条申合伊勢殿被

居残、中将殿御登城今日御移徙二付從三御所様以上使御祝

儀物被遣候御礼被仰上之、於御白書院御縁類伊勢殿被懸御

目巨勢大和守江被申達候由

追而

一八時前雅樂頭退出候、拙者儀御用有之候付即刻罷出候、以上

明和六丑年二月廿七日

当番
土屋能登守

一万寿姫君様御紐解御祝儀有之候二付昨日御書付之通詰合之

面々御祝儀申上之

一 今日御紐解御祝儀二付御用被相延加役何茂登城備後守豊前
守豊後守も被出居候、揃後伊予守殿江順阿弥を以本役非番
之者致登城之者も有之候、今日有合之面々御祝儀申上候節
可罷出哉之段被相同候処、有合候事二付罷出御祝儀申上候
様同人を以被仰聞候

一 廻り之様子二付月次無之御礼之通当番上座二而加役一同高
順二罷在、但シ加役者有合之者御祝儀申上候儀御届不申上
候、年寄衆廻り之節於雁之間高家衆詰衆御祝儀被申上、夫よ
り於菊之間布衣以上之面々御祝儀被申上山吹之間通奥江御
入候、御奏者番者中之間江先達而相廻り老衆引懸当番上座
二而万寿姫君様御紐解御祝儀申上候段申上候

一 佐渡守殿見廻り其儀当番承候処、初ハ見廻り有之候様二盛
阿弥申聞候処今日者見廻無之段又候申聞候、依之西丸当番
御祝儀申上候儀佐渡守殿見廻り無之外謁も無之候間、今日
御祝儀者不申上候

但今日佐渡守殿見廻り相止候ハ、右御祝儀申上候事二付
而之由依之何分当番之者御祝儀不申上方評議研究り候為

見合記置

明和六丑年四月五日

当番
牧野豊前守

一 呉服師御暇拜領物於御納戸前若年寄衆被申渡廻状差出不申候
事

明和六丑年四月十八日

当番
牧野豊前守

一日光御社参来辰四月被仰出候付御三家方御出仕、今日者紀伊
殿水戸殿尾張中将殿御座之間相济於松溜老衆被懸御目候付御
城附方以坊主当番迄申聞候、依之当番豊前殿方順阿弥江被申
聞候者、右之通御城附申聞候直御座之間江御通候哉御座之間
相济松溜江御案内可致哉、尤御三家方御床之方二御着座候哉
又ハ御障子之方二御着座候哉之段、周防殿江相同候段順阿弥
迄被懸合候処、御床之方二御着座之段可致旨被仰聞候、御三家
方奥江御通御対顔相济御出二付松溜江当番豊前殿被致御案内
候事

明和六丑年四月廿一日

当番
牧野遠江守

一 松平肥後守酒井雅樂頭老衆揃後辰年四月御社参之節御留守中
大納言様為伺御機嫌西丸江可致登城御本丸江も二三度程可有

登城旨肥後守江被仰渡、雅樂頭江者御供押被仰付旨於御黒書院溜御老中列座右近將監殿被仰渡之、当番羽目之間江致出席候事

宝曆十四申年六月十一日

御黒書院

当番
土岐美濃守

日光御靈屋御修復
御手伝仕廻候付
煩

松平出雲守

一土佐殿右京大夫殿江松平出雲守病氣二付名代出居申候先格之通名代者御前江不差出候段常阿弥を以被申上候処、御承知之段同人申之其節中之間江罷越承知之段我等承り部屋江罷越、此儀者廻状二差出候二不及候由土佐殿被申其通相濟

一日光御名代并伊勢御名代御暇帰府御目見之節共御請候事

明和六丑年七月廿六日

当番
土岐美濃守

一御勘定組頭栗林平五郎名代佐久間忠兵衛病氣二付願之通御役御免小普請入与被仰付右近將監殿被仰渡之、大小普請入被仰付与申儀者先格廻状江者認不申候付先文之通相除申候事

明和六丑年八月十九日

当番
土岐美濃守

一豊後守殿江以常阿弥御同人西丸御附被仰付候付佐渡守殿御勤候節之通相心得可申哉与豊後守殿江相伺候処、今日者其通可心得旨御同人以同人被申聞候、且豊後守殿西丸江御見廻り之儀自今日々御見廻り有之旨御同人以同人被仰聞候

但大目付衆も伺不申旨被仰聞候問池田筑州も一所二相伺候

右之趣西丸当番長門殿江茂表手紙二而申遣候

一廻り之節主殿頭殿二も被出候、尤奥御用有之節者不被出候由御用部屋御詰合之節者廻り二被出候旨、尤諸席出座之節も同断

翌廿日

当番
牧野越中守

一昨日貴様御廻状之趣二付猶又今日豊後守殿江以常阿弥相伺候処、周防守殿西丸御勤之節御本丸御兼已前之通可御心得旨被仰聞候、此段為御心得申進候

明和六丑年九月朔日

当番
西尾主水正

一禁裏附松平舍人今日御暇拜領物御礼之節侍座無之二付当番罷在

明和六丑年九月七日

当番
土岐美濃守

一 明日日光御名代御祭礼奉行御暇之御沙汰二御座候処、外替儀無之二付無廻状二付下手紙江右之趣書加へ差出候事

明和六丑年九月十五日

当番 遠藤備前守

一 阿部備中守今日家督之御礼申上御礼前如前々御座之間江罷出、宝曆十辰年五月六日西尾主水正家督御礼申上候節者御礼過居残於芙蓉之間御礼申上、備中守ハ詰衆故於雁之間老衆引懸ケ細廊下被通候節家督之御礼申上候、御礼且召出之御礼も申上候、主水正者帝鑑之間二付於芙蓉之間右御礼申上候事

但主水正節も於芙蓉之間御礼之儀者廻状江者出不申候得共重而ハ評議可有之事

明和六丑年九月廿四日

当番 土岐美濃守

一 今日久世出雲守大坂御城代被仰付西丸当番謁之儀豊後守殿御詰合無之候ハ、前々之通謁可申哉之段御本丸当番方豊後守殿江相伺候儀先例相糺候処、当時豊後守殿日々西丸江御見廻り有之候事右御同人直西丸江登城、夫方御本丸江御越候節者於御本丸不及伺西丸当番二而相伺候事二付今日豊後守殿直二御本丸江登城、夫方西丸江御越候付右謁之儀伺不申西丸当番方

伺御同人退出後出雲守謁候事

御鷹野御成之節御三家御礼事二而御登城候得者御用番退出之節左之通伺

誰殿為御礼御登城候ハ、居残御番之者猶又御居残誰殿江相伺可申哉之段申達其通可致旨被仰聞候、御登城之節右之段相伺御老中被懸御目候得者如例致御案内候、御差凶二而當番懸御目候得者御居残之御老中江以御同朋頭申達候事

一大広間之衆并其外以上使御鷹之鳥且増上寺方丈御礼事二而登城之節者、御用番退出之節居残御番之者謁可申哉与相伺其通可致旨被仰聞候得者、如例謁御居残御老中江其段申達候

一 溜詰右同断、名代登城之節子息二候得者於羽目之間謁子息二而無之名代者帝鑑之間固持衆之席二而謁申候

宝曆九卯年六月十二日

当番 酒井飛驒守

一 今日同役衆之内御暇被仰出本役兩人二罷成候二付是迄者加役方両当番突合相除候得共、御人少之内者両当番突合無構相勤可申候段何レ茂申談左衛門尉殿江加役衆方被申達候、此段為御心得申進候

明和六丑年十月十日

助番
増山対馬守

一此節同役衆病人多二而本役兩人二罷成候二付是迄者御加役方

兩御当番御突合相除候得共、御人少之内者兩御当番御突合無

構御勤可被成段何連茂被仰談右近將監殿江御加役方被仰達

候段何レ茂被申遣候、此段為御心得申進候

明和六丑年十月廿六日

助番
松平丹波守

一寺社奉行御黒書院溜列座江罷出候廻り後二付当番羽目之間二

罷在候事

一新庄織部被申聞候者十一月朔日西丸御安鎮御祈禱於大広間有

之付朔日西丸江出仕之向々於殿上之間謁有之候、依之御普請

中於殿上之間謁之節者御奏者番着座之儀見度由被申聞繪図被

相渡候、依之寺社奉行四人江丹波守相談有之、右繪図致一覽候

処虎之間方出候様有之候、左様候得者御普請中共御礼衆出方

茂違候、此度右繪図二最初之御普請中繪図遣候而者御目付方

伺相濟候様二相成候二付左様有之候而者如何二付、今日者申

談之上最初之繪図ハ難遣何レ二茂伺之上及挨拶可申旨織部江

丹波守被申達候処、左様有之候ハ、先織部江差越候繪図相返

候様被申聞候付則右繪図丹波守被相返候、依之右繪図一兩日

中二も被指越候様猶又織部江被申達候、其上二而伺候様可致

旨被申達候事

宝曆四戌年四月三日

助番
井上河内守

一別紙書付之趣万石以上江大目付衆方被申達候由、此後名改之

届有之候節者当番江為心得可相達旨石河土州被申聞候、將又

退出已前届有之候得者早速当番江被相達退出以後二候ハ、翌

日当番出仕之節被達候様同人江申談置候御心得申進候

右別紙書付左之通り

只今迄名改之節大目付江不相届面々茂有之候、向後者嫡子

方共二名改之節早々向寄之大目付江被相届候様可相達旨西

尾隠岐守殿被仰聞候、以上

四月三日

大目付

宝曆四甲戌年四月八日

当番
阿部飛驒守

一名改之儀大目付衆被申聞候ハ、廻状追而二差出可申候、尤三

四人も有之候節者別紙致書付可進段何茂申合候

一上野増上寺御参詣門前通御二候得者当番二而茂致在宿候助番

之方江申遣候事

寛保二戌年五月朔日

当番
松平紀伊守

御成之節門前通御二八只今迄致在宿候得共、御規式御成之外御鷹野御成二者向後不及在宿候旨左近將監殿備中殿江被仰聞候、依之御同人退出之節猶又相伺候処右之通一統相心得候様二と被仰聞候

一 参勤御礼願者御用番对客之節罷出申上候事同役申合如此也、尤对客罷出候節御機嫌相伺候上参勤御礼願之儀申上候事

但病氣滯府并相願候而時節早出府右兩様之節、快出勤候得者先御老中若年寄中江相廻り其後御用番对客有之時改而罷越参勤御礼願申上候例格之由、青山因幡殿方為心得被申聞候事

一 在所江御暇被下置候御礼御用番对客罷出候、尤此節者御機嫌

相伺候儀者不申候事

并飯養子願書
对客之節持参候事

一 御老中被仰付且又御老中御加増所替等二而早夕御悅申入事ハ從御城即刻同役中江為知申遣候、廻状ハ例之通委細追而書二申遣候

但御老中御免之節も右同断

明和七寅年正月七日

当番
土岐美濃守

一 紅葉山御参詣二付御目付柘植三藏江還御已後伺御機嫌御門番衆被出候哉之段懸合候処、井上河内守二八御鏡餅御用二付不被出候、其外何茂病氣二付不罷出候段申聞候間、三阿弥江今日者御目付衆御門番不罷出候旨被申聞候間、謁之儀伺不申候段申達候

例

宝曆四戌年正月十七日

当番
土岐伊予守

一 還御以後為伺御機嫌大手内桜田西丸大手御門番衆不残病氣二付不被出候段御目付衆被申聞候、依之謁之儀相伺不申段伯耆守殿江申達候

明和七寅年正月十七日

当番
土岐美濃守

一 今日伊豆殿御鏡餅御用被相勤候付御本丸江被出候処、伊豆殿上野御宮江被致参詣候旨美濃守江被申聞候間、行列被勤候方大納言様還御已後紅葉山御宮江参詣等相越候付池田筑後守江美濃守前々御鏡餅御用相勤候者紅葉山御宮江参詣之処、今日

者大納言様御参詣茂有之右京大夫殿江御届も有之二付伊豆守
罷出候所、未行列之衆も参詣無之二付一所二参詣有之可然哉
之旨懸合候処、苦ケ間敷旨被申候間猶又稲垣出羽守江美濃
守逢右之段申談、出羽守二参詣被相越候ハ、部屋迄為知被具
候様申達置、伊豆殿江其段申之御届之節半袴二而候間、又大紋
被着替部屋二扣被罷在出羽守ハ案内有之内通紅葉山江被相越
候

明和五子年十二月十五日

当番

仙石越前守

一今日西丸当番添番共代り合御拳之鶴御料理致頂戴候様周防守
殿以順阿弥被仰聞候、右二付申談助順加役衆御用有之其頃
段々相障松能登守備前殿代り合内通西丸江被相越、西丸当番
遠江守添番長門殿是又内通御本丸江被出頂戴相濟又々内通西
丸江被出候

但

一延享元子年十一月六日御拳之鶴御料理頂戴之節西丸当番者

頂戴無之

一宝曆十未年十一月廿五日右同断

明和六丑年十二月十五日

当番

増山对馬守

一今日拙者御料理頂戴之内当番代り同役衆申談助順二而伊賀守
候得共、倅御目見之御礼申上候付難勤次順越中守候得共、是又
頂戴二付難勤次之御順貴様当番代り御勤候段何茂被申遣候
一今日西丸当番伊勢守未御料理不致頂戴候付代り合頂戴可仕哉
之旨周防守江以三阿弥相伺候処、代り合致頂戴候様以同人申
聞候付何茂申談助御番越中守貴様候得共、前文之通二付次順
主水正丹波殿候得共是又御料理頂戴二付次之順又代り合長門
殿内通西丸江被相越候、西丸当番同人内通御本丸江罷出頂戴
相濟又々内通西丸江罷出候、尤内通被相越候義同人以同人相
伺候処其通可致旨以同人申聞候

但御拳之鶴御料理頂戴

宝曆八寅年六月十六日

当番

水野壹岐守

一右用入二付高家衆詰衆同役衆居残御機嫌被相伺候、西丸江茂
例年之通被出候、拙者儀も退出方罷越候

但嘉定御祝儀同日

明和六丑年六月十六日

当番

土岐美濃守

一今日御祝儀頂戴相濟無間茂中之間江罷越候付何茂長袴之俣御
機嫌相伺申候、尤西丸江者平服二而罷越候

但嘉定御祝儀同日

明和七寅年二月十五日

当番
土屋能登守

一今日西丸江被為成候付御跡方御老中方不殘西詰橋方西丸江御
越候間御用茂無之候ハ、御本丸江御出有之間敷候間、西丸方
退出之儀承候ハ、何茂致退出候様右近殿被申聞候旨稻垣羽州
被申聞候、然処九時右近殿西丸方直二退出相濟候段羽州被申
聞候間申合罷出候、且明日相遣儀無之段可申達旨右近殿被申
聞候由三阿弥申聞候付例之通番頭衆江申達候、以上

明和七寅年二月廿五日

当番
西尾主水正

追而

一右近殿以三阿弥来月二日御本丸当番被相尋候二付、二日当番
備前殿候得とも対馬守就御番替二日当番対馬守与相認同人を
以同人差出候

但来月御番割未出不申候得共兼而申合相濟有之候事二付右
之通廻状追而被差出候事

一御用日候得共美濃守罷出候段何茂被申遣候

但美濃守加役月番二付御用有之罷出候、尤肝煎もいたし候
得とも右之訳廻状二者出不申候

但今日公家衆御対顔有之

一急成事二而御城方廻状差出候節も常之通格通二而其事計認可
成程者使数多仕立早々可指出候事、尤例之廻状者退出後可差
出候事

一老衆病氣二而御引込候節廻状追而二相認候、出勤之節迄日々
今日茂不被出候旨相認候、差合之節者被引込候日々其段相認
差出出勤之節今日方出勤之旨認差出候

一若年寄ハ病氣差合共二被引込候日与出勤之日二ハ其段廻状追
而被差出候

宝曆四戌年十二月十一日

当番
松平紀伊守

一今日日光帰之高家衆御目見有之御老中方早登城之段今朝承候
付急二罷出候処最早御老中方御揃二而御座候、右之趣昨日承
不申候付右近將監殿登城之刻限等相同不申候、右二付退出後
ケ様之儀御座候ハ、為知請候様大目付衆江茂申談候而御目付

稻生下野江申遣、当日之番江被申越候得ハ翌日之翌日之当番

戸田土佐守

江致通達候間為知請候様相頼置候、此段為御心得申進候

宝曆十辰年五月廿五日

当番
土屋能登守

追而

右近々日光江就発足罷出於芙蓉之間豊後守奉書相渡候

一右近將監殿退出之節明日之伺之儀御日柄二付相伺不申候心得
二罷在候段以春阿弥無急度申達候処、向後不及伺候旨被仰聞
候段同人申聞候、此段為御心得申進候

同七月廿三日於部屋酒井飛驒殿被相達候書付

一御祥月之外者八日二九日之儀御用番退出二相伺可申旨申合候

七月

酒井飛驒守

宝曆九卯年四月十三日

西丸当番
太田播磨守

由良播磨守

右日光江就発足罷出於芙蓉之間但馬守殿奉書御渡候

追而

一今日由良播磨守江奉書御渡候由承候付拙者儀此節服有之候

間、但馬守殿登城之節中之間江不罷出奉書御渡候節も不致

出席候段御同人江以常阿弥申達候

明和七寅年四月十一日

西丸備前守御番替二付
小出伊勢守

一今日戸田土佐守江奉書相渡候由承候付拙者儀此節服有之候間、
豊後守登城之節中之間江不罷出奉書相渡候節も不致出席候段
同人江以盛阿弥申達候

但右之節豊後守殿先格御尋二付宝曆九卯年四月十三日之例

伊勢殿被申上候由、且越中殿被申聞候ハ宝曆九年以後同役

申談西丸二而御名代奉書渡之儀ハ大概日限茂定り有之二付、

服有之候ハ、致御番替御名代等奉書渡之節者不被出候事之

旨被申聞候

一家督御礼之節御刀差上候者之内幼少二而以名代御礼申上候節

前々者御刀御前江出候得共、有徳院様御代方以名代御礼申上

候節ハ御刀御前江出シ不申候事

享保九辰年五月廿八日

当番
松平相模守

御白書院

御太刀

黄金五枚

家督之御札

沙綾二十卷

松平千次郎河内

御馬二疋

松平志摩守名代

御刀 雲次

代金十五枚

附札

千次郎名代和泉守殿江伺之上侍従之格御太刀并進
物差置候、御刀者名代殿御前江出不申候由被仰聞
志摩守一度御前江罷出候

明和七寅年五月六日

御書院番頭

御目付

中奥御番

西郷筑前守

河野吉十郎

佐久間小膳名代

渋谷隠岐守

山村十郎右衛門

小野次郎右衛門名代

土屋丹後守

村上三十郎

石谷十藏

土岐淡路守

土屋長三郎

鷺津式部

御小性組番頭

御使番

弘方御納戸組頭

斎藤伊豆守

山崎四郎左衛門

金野十五郎

永井美濃守

中山主馬

御鉄炮御单筒奉行

蒔田伊勢守

中西主水

長谷川庄五郎

大久保淡路守名代

青山喜太郎

佐々新十郎

太田駿河守

嶋田弾正

御弓矢鍵奉行

大目付

筑柴宇兵衛名代

坂本新左衛門

正木志摩守

小笠原兵庫

森川七郎右衛門

御簾奉行

岡野外記

御具足奉行

駒井能登守

菅沼新三郎

横山源五郎

山田大隅守

久世平九郎

御幕奉行

百人組之頭

奥津左京名代

田中弥吾八

岡田将監

植村五郎八

大柳八左衛門

松平多膳

御書院番組頭

御書物奉行

花房外記

諏訪五郎左衛門

徳力藤八郎

室賀兵庫

宮崎三郎左衛門

御馬預

御鍵奉行

宇都野金右衛門

諏訪部文九郎

山名伊豆守

平岡与右衛門

諏訪部三之助名代

加藤讚岐守

御小性組之頭

御賄頭

新御番頭

天野伝四郎

和多田次郎左衛門

小笠原縫殿助	植村隼人	御馬預	名代 戸田但馬守	中山伊勢守	柿沢宗長
水野勝五郎	名代 佐野宇右衛門	諏訪部三之助	儒者	菅沼上総介	寄合医師
京極兵部	大久保弥三郎	曲木又次郎	林大学頭	松田善左衛門	岡本玄治
名代 牧野伝蔵	松平仁右衛門	名代 曲木覚之助	御先手	小十人頭	村田吉庵
御持頭	名代 小倉忠右衛門	諏訪部八十郎	堀甚五兵衛	川村主計	細川桃庵
鈴木肥後守	御鉄炮方	名代 鶴見忠兵衛	奥山山城守	赤井越前守	御番医師
田付筑後守	田附四郎兵衛	鶴見忠兵衛	長谷川太郎兵衛	山中平吉	千田玄知
長谷川久三郎	御徒頭	御細工頭	遠山源兵衛	小笠原平兵衛	寄合外科
久永修理	依田平次郎	向山源大夫	長谷川平蔵	中野監物	村山元格
仙石監物	美濃部八郎右衛門	御膳所御台所頭	諏訪左源太	名代 山中平吉	名代 増山節甫
火消役	京極左門	喜多川伝之丞	名代 市岡左兵衛	杉浦長門守	御番外科
大久保吉十郎	柴田三右衛門	松尾弥兵衛	浅井小右衛門	弘方御納戸頭	栗崎道有
鍋嶋帶刀	浦上近江守	馬医	遠藤源五郎	依田十郎兵衛	名代 岡田養仙
中奥御小性	田屋仙右衛門	桑嶋新左衛門	石野藤七郎	新小番組頭	寄合針醫師
富田能登守	松波平右衛門	御同朋頭	徳山甲斐守	横地半助	佐田玉川
小堀河内守	酒井大炊頭	原田順阿弥	仁賀保兵庫	青田長兵衛	
朽木信濃守	篠山吉之助	御数寄屋頭	石尾七兵衛	安西六郎右衛門	

永井采女

御膳奉行

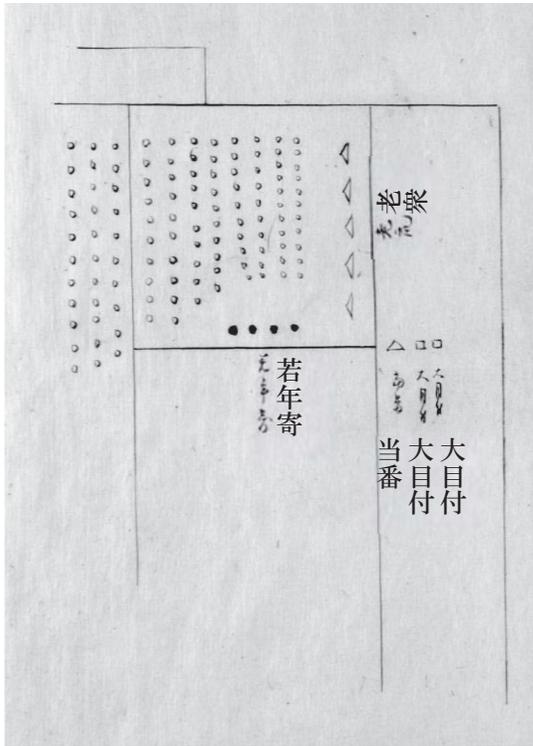
鳥居権之助

神谷彦左衛門

竹屋喜左衛門

坂部三十郎

右来ル辰年日光山御社参之節御供被仰付候旨山吹之間方雁之間菊之間江かけ一同並居列座、同前右近将監殿被仰渡之若年寄衆待座当番如图出席



明和七寅年六月廿四日

一今日伊賀殿被申聞候ハ只今迄御披露染帷子ニ而罷出候、半襦褌披露之者者ち、ミ帷子着用可致哉之段内々右近将監殿江被承合候処不苦候旨、尤長袴披露之者者染帷子着用いたし候様可相心得被仰聞候由、勿論同役一同可申合哉之段も被申達候処致其通候様被仰聞候由二候

明和七寅年七月十四日

助番

松平能登守

高家衆

詰衆

御奏者番

右民部卿殿御簾中就逝去為伺御機嫌罷出拙者謁申候

追而

一昨日御書付之内高家衆出仕之儀者無之候得共被出候付、豊後守江以盛阿弥相同候処謁候様申聞候付謁申候

二月廿七日

天英院様御祥月前日二付例伺無之都而御女中様方江御老中若年寄御名代有之候ハ、前日例伺無之と御心得可然事

八月十四日

紅葉山

一伊勢殿被申聞候者昨日同人西丸当番候処、西丸小十人松平

一右近將監殿撰津守殿還御以後登城

但馬守組三宅五兵衛大藏卿殿近習番被仰付候為御礼罷出謁

明和五子年四月十七日

被申右謁書今日西丸当番大和殿江被差越候処、同人方被申

同

越候者右御礼之儀奥江出候義二者無之候哉先格茂難相知二

一右近將監殿還御以後登城

付、今日於御本丸評議之上申越候様被申越候間今日被出候

同年十二月十七日

同役衆評議有之、於御右筆部屋縁頬被仰渡之儀其上最初小

同

十人之儀二候得者御目見以上二付謁書上ケ候方、其上最初

一還御以後右近將監殿水野豊後殿登城

小十人之儀二候得者申遣謁書差出相濟候事

明和六丑年四月十七日

但序有之美濃守御三卿家老江近習番之儀承候処、小十人

同

并小普請方被仰付候得者元御目見以上之事故御目見以上

一公方様還御以後大納言様御参詣有之、大納言様還御以後右

を相持罷在候、御抱入之者御差立二而近習番二相成候得

近將監殿右京大夫殿伊予守殿熨斗目半袴二而登城

者御目見以下之由申聞候

明和七寅年九月十七日

一紅葉山御参詣還御以後御先詰之老衆登城有之候而茂廻状二

同

者出シ不申候事

一還御以後右京大夫殿周防守殿佐渡守殿登城

例

明和七寅年九月廿四日

明和四亥年十二月十七日

一豊後守助番大和守江一兩日中田沼大和守為伺御機嫌西丸江罷

出候、其節御同人御逢被成候間其心得二可罷在旨、尤右御達候

儀廻状江ハ差出申間敷旨被仰聞候間大和殿被申聞候

同年十月六日

内藤大和守

御三家方江豊後守殿被懸御目候節、前々之通御白書院後御廊
下江御同朋頭出候を見懸候而桜之間江御案内二罷出候様可仕
旨、昨五日拙者西丸当番之節御同人以盛阿弥無急度被仰聞候
付、為御心得得御意候、以上

十月六日

内藤大和守

明和八卯年三月廿九日

助番
太田備後守

一御觀式書右近將監伊勢守江相渡候、明日之当番遠江守江同人
方差遣候、且又進物番例年之通被差出候様番頭衆江是又同人
申達候

追而

一御觀式書相渡候候節拙者儀服中二付伊勢守江相頼同人請取

申候、尤右之段無急度右近將監江以宗阿弥申達候

一今日御同朋頭詰合無之付西丸方同人相越候

同年三月廿八日

火事場見廻

寄合
戸田内蔵助

中川御番

同
安藤彦四郎

右之通昨日被仰付有御礼、西丸江罷出助御番伊勢殿被謁右謁
書今日美濃守西丸当番二付豊後守殿江差出候様被申越候付右
順之儀服部市太郎江懸合候処、中川御番ハ御老中被仰渡火事
場見廻りハ若年寄衆被申渡之事二付、中川御番火事場見廻与
順認候方可然旨申聞候付其通認直し被差越候様伊勢殿江申遣、
則謁書日記方書付共認直し来候事

寛保元酉年八月十五日

当番
松平備中守

御黒書院御勝手御通懸

菅沼藤三郎
備後

駿府御目付

御暇

時服二

右披露相濟御取合有之

上意

廻状追而

一菅沼藤三郎御目見之節今日者御黒書院御勝手御敷居際二而

ハ上り過候間御敷居外少下り候而罷在、披露者例之所二罷
在候様二と右近將監殿被仰聞其通相濟候、為御心得申進候

明和八卯年十月十八日

当番
井伊兵部少輔

出御之節御黒書院御嫡子御通りかけ

御暇

明和八卯年六月廿一日

候

金五枚

禁書附

初而

高力式部豊前

一老衆御入懸御着座候与当番御法事相濟候二付恐悦之旨申上候、

時服三

披露大紋之俣

大廊下帝鑑之間御法事相濟何茂罷出候旨当番致取合候

羽織

其身服紗小袖

安永三年十二月十二日

当番
土岐美濃守

半袴

一三阿弥申聞候、明日右近將監殿六時過登城一端退出二而例刻

右御錠之口明キ候与於西湖之間御縁類右京大夫殿御暇拝領物
被仰渡相濟例視披露方少下り披露、豊前守罷出着座其次江式

部罷出披露人方少下り罷在但御障子之方
より尅暈目 從御上段出御高力式

登城之旨申聞候間猶又大目付江承候処、大目付衆も明日例刻
登城いたし候旨被申聞候二付明日当番牧野越中守江為心得直

部与披露、御取合上意又御取合有之

書二而申遣候、廻状二者不出候

二度目当番
井上河内守

廻状追而

一高力式部御目見之節披露之儀、寛保元酉年八月十五日之通

一今日佐渡守殿退出之節添備後守江可被成御逢旨申来候由、依

御黒書院御敷居外二少下り罷在候様相心得可申哉と昨日周

之中之間迄罷出候処大目付池田筑州一同溜二而御同人被仰聞

添
太田備後守

候者、明日松平左京大夫被為召御座之間江罷出候、右者紀州家

御相統可被仰付哉二候、左候ハ、御錠口より御退散之節ハ御

三家通り心得可申旨、尤急度被仰聞候二者無之心得二御内意

被仰聞候間可申談旨被仰聞候

右之通御内意故廻状面江者出不申候

一 当尾張中将殿御嫡子被仰出候節者右之趣前日被仰聞着服并当

番外壺兩人可罷出哉之伺茂以御同朋頭伺有之候得共、昨日茂

御三家方御出仕茂無之殊二御内々二而佐渡守殿被仰聞候間、

以御同朋頭伺茂以か、二付内々御同人江備後守直二被承候処、

やはり平服二而其外表向替儀無之旨被仰聞候

一 昨日登城之刻限備後守承り被申候処例刻之由順阿弥申聞候由、

尤例刻故旁廻状江者不被出候由

右為見合記置候

御番之部

一 一通り之御番替ハ仕三方替ハ不仕事

一 御本丸ト西丸ト御番替不仕事、助替茂同断

一 今日当番之者之外二御用有之節ハ明日之当番之者相勤候事

一 当番日御用二而被為召候節ハ助二成候事

一 当病二而外江御番替頼遣候処段々指合有之時ハ急二介番二成候事

候事

一 俄二忌二相成候時急助申遣候事

一 差合之節忌御番江二ツ懸候時ハ初一ツハ助二而二度目ハ御

番繰詰二可致事

享保二西六月十八日

当番之節申合

一 忌御番二一ツ懸り候ハ、直二助二而相濟御番割直スに不及事、申四月朔日同役何茂申合候得共弥向後右之通可致候、今

日同役申合候事

一 御目通り差扣被仰付候節も御番ハ其俣相勤添番壺人罷出候

一新同役初御番二度目之御番両度添番壺人罷出候

松平備前守

一 寛保二戌年九月五日本多紀伊守久能見分相仕廻歸府二付出番之儀、御目見相濟当日方御番一順廻り御番被相勤可然与何茂申談置候故、右之通御番割認松平豊後殿方被差出候事

一 当番日ハ退出後二ても遠方江不罷出候、無抛事二而罷越候得ハ助番之方江頼置罷越候先格之事

一 延享二丑年七月朔日松平備中守江御用有之候処病氣二而不被出会同役壺人罷出候様二と左近将監殿被仰、助番三浦志摩守名代二被出候処屋敷被下候儀以御書付被仰渡、依之退出方備中殿宅江志摩殿被罷越候由

一 参府御礼相濟初而御本丸当番相勤廻状差出候節同役中より返事被差越候事

一 五節句并朔日其外惣而西丸江出仕有之節御本丸当番退出後方罷出候事候得共、居残等二而退出七時過二候得ハ不罷出候、晚景二及候付西丸江不罷出尤御用番江不及御届二茂候

一新役被仰付候而誓詞相濟御番一順廻り候得ハ初御番相勤候近例二候処、寛延四未年八月十一日酒井信濃守被仰付御番一順十八日迄二相濟候得共誓詞相濟不申候故誓詞前初御番之儀い

か、可有哉与何茂申談候処、古格ハ被仰付候日方十一日目初御番相勤候例二而御番一順与申儀も近年之事二候間、誓詞相濟不申候共古格之通十一日目初御番二割候而可然旨朽木土佐殿被申、例とも認同役中江被指越候付其通御番割本多長門殿方出候事

例

享保七壬寅年十一月廿八日

一 仙石信濃殿土井甲斐殿御奏者番被仰付、御礼同十二月朔

日相濟同朔日方十一日目初御番被相勤候

同八癸卯年三月廿五日

一 黒田豊前殿其外四人御奏者被仰付、右被仰付候日方十一

日目二初御番被相務

一 仙石信濃殿土井甲斐殿二ハ御役儀之御礼相濟候日より十

一日目二初御番被相勤候得共、古例ハ被仰付候日方十一

日目初御番相勤候事之由主水殿被申聞候事

卯四月

一 享保十五戌年十一月廿三日今日西丸江伺御機嫌之儀、先年御

庖瘡之節御用番江大目付衆被相同御本丸当番先西丸江罷出候
付今日も右之格二拙者西丸江先罷出候処、当番八重キ儀二候
間向後ハ御本丸江罷出退出之節西丸江罷出候様同役中可申合
旨左近将監殿黒田豊前殿江被仰聞候事

一 遠国上使被仰付帰府之御礼申上其日ハ一廻り御番相濟候而御
番務之

例 先格も有之左之通御番入

元文二丁巳年八月清湊院様三十三回御忌二付紀州江松平伊
賀守御名代被仰付廿三日帰府、同廿四日御目見相濟九月七
日ハ御番務之

但一順廻り候てなり

一日光御名代上使帰者御目見相濟候日ハ三日目御番勤之

一 参勤御礼後初御番二而御番替

例

寛保二戌年六月廿一日

一 参勤御礼

但御役後初而之参勤之年候由

堀田相模守

六月廿五日

当番
朽木土佐守

右西丸相模殿就御番替

六月廿七日

当番
堀田相模守

右西丸備中殿就御番替

寛延二巳年六月十一日

一 参勤御礼

金森兵部少輔

但御役後初而之参勤之年之由

六月十五日

当番
金森兵部少輔

右西丸土佐殿就御番替

六月十六日

当番
朽木土佐守

右西丸兵部殿与致御番替

宝曆三酉年六月十六日当番黒田大和守廻状追而左之通

一 昨十五日松平阿波守家来拝領物御沙汰有之由森兵部殿承知二
付、先達而土佐殿被相廻候書付之趣茂有之間拙者翌日之就御
番可致出席旨被申越罷出相濟申候、然処若御使先与落合候節
者いかゞ二付前日御番之ものハ右之沙汰尔ても可承事二も候
間、向後前日御番之もの罷出可然与今日被出候同役衆申談候、

併前日御番之者助御番或ハ御番替等二候ハ、誰ニても頼合被
出候様ニ可致候、若助御番等遅ク申来候歟故障之儀も候而御
間ニ合不申候者詰合之加役衆之内御用無之衆可被致出席旨被
申候、万一差懸御用有之不被致出席頼合候衆中も相障御間ニ
合兼候ハ、其段御出席之御老中方江当番之もの申達候様可
致旨是又申合候、為御承知申進候

一新役当番之節西丸添順二候とも新役ハ突合候故不相成候事

例

宝曆十四申五月十四日当番板倉美濃殿廻状追而左之通

一 明日西丸添順和泉殿飛驒殿候得共御用有之旨被申聞次順土
佐殿ニハ御本丸当番其次出雲殿被出候様申遣候、且又同人
難被相勤節者次之順拙者候之間西丸当番美濃殿月次初而之
御番ニ付新役突合候段次順江被申越可然与今日被出候、同
役衆申談之上添流し被申候ハ、拙者相除次之順江被申越候

様是又出雲殿江申遣候

井上遠江守留

一 寛延二巳年十二月六日土佐殿方到来之紙面左ニ記

一 両御丸当番退出方外勤無之直ニ在宿
一 助口御曲輪内之外ハ一切不致他行事
一 御使先者昼年寄衆退出頃迄在宿

但御曲輪内ハ不苦

右之通前々より之古法ニ而今以其段相心得罷在先達而御伝
申候、近年ハ当番退出方頼合外勤被致候方も有之、助口御使
先之節も頼合無之他出之衆も間々有之様尔いつとなく罷成
候歟と存候、無抛用事之節ハ頼合申候而他出仕候之様子
前々方致来り候間何卒古法之通りに仕度儀に御座候、何れ
尔も近日何れ義江も咄可申談と存候、外之衆ハ兎も角も私
御師範申候間弥古法之通御心得被成被下候様尔仕度候、先
頃相模守殿被仰聞候之趣も有之候得ハ旁以此段得御意候、
以上

十二月

一 西丸当番加役美濃守候処助ニ相成候付加役飛驒守御本丸返番
相勤候例

明和元甲申年閏十二月十四日当番酒井飛驒守廻状追而二左之

通

一今日西丸御番貴様候得共助二相成出雲守相務候段承之土能
登守江返番相勤申候

同年同月十五日当番土岐美濃守廻状追而之内

一昨日飛驒殿廻状之通今日西丸添土大炊殿可被出候処御用有
之、御本丸江被出候付難被相勤次順拙者方江被申越候得共
同様二付難相勤添之儀者次之順江申遣候、然処兼而出雲守
与御番替致置候付迎茂御本丸江罷出候間直二御番相勤申候
一加役二而御本丸致御番替可勤積之所江御使先心得頼申し来
候ハ、御用有之旨二而戻し御番相勤不苦之旨飛驒殿被申
候

一加役同士月番之仁与御番替いたし候節出火有之致出馬候得
者月番之加役江御番戻候事、非番月同士にて御番替いたし
候節ハ助二相立候事、本役与加役と御番替いたし候節ハ本
役之方江御番戻候事

一本役火之番之衆与加役与御番替いたし候節出火有之上野増
上寺辺相詰候得者御番戻候、若御曲輪内出火候得者助二相

立候事

右之趣難相分候二付明和二酉年十二月九日土佐守江承合候
処書面之通被申聞候事

明和四亥年十一月朔日

一伊賀殿湯治帰御礼相済老衆這入かけ御礼被申上候
但寺社奉行二而者御法会之節三御側江も帰府御目見御礼
申候得共、今日者本役之方二付候事二付其儀無之

明和四亥年十一月三日

一伊賀殿初御番二付御用有之被為召候節者退出より当番相
返候先格之处、加役二而ハ日々御用有之罷出候事二付相返
ス二不及旨伊賀殿被申、今日者其儀無之由猶重而ハ評儀可
有之事

一御番替等致候ハ、其前日弥致御番替明日御番御勤被下候様
押合手紙二而先方江申遣候事

一両御丸当番日八年寄衆登城前杯二決而不参候事

一類焼二付御番一ツハ助二ツ目より御番替二成候事

一御本丸与西丸与御番替有之候例

享保十三年正月二日内藤丹波守黒田豊前守御番替之由廻

状二有之候得共、當時者御本丸与西丸者御番替者不致候

事

一当番之節屋敷近所火事之節助順江申遣退出候事

助番之部

一本助一、西助二、本中之間助三、西朝助四、添五、御使先六

但御使先御名代杯之節誰相勤候段達も有之候ハ、格別也

一助番前之節者八時頃迄ハ先ハ在宿、遠方江無抛儀ニ而罷越候

節ハ次助番之者江可申談候事

旧格ハ当番と次助番江手紙ニ而申遣候得共、近例ハ次助番

江申談候事

一御用日ニ而茂御奏者方不残差合急助入候得者、寺社奉行月番

之外之衆者御老中江伺不及助被勤候様可申談旨宝永五子年九

月大久保加賀守殿被仰聞候事

但近例ハ寺社奉行衆月番ハ除之其外ハ助順ニ立置候

一三季献上之日西丸献上物御本丸江上リ候付、西丸当番御本丸

江出柳之間江御老中御出座相濟而西丸江罷出当番勤申候、朝

之内助先之者西丸江罷出当番罷出候迄助番相勤候

享保五子年正月十二日

当番
朽木民部少輔

一对馬守忌中二付助御番拙者相勤申候、助之順式部少輔二候得

共惣而居屋敷方角ニ為御鷹野御成之節ハ御先方何方江被為成

還御之刻御通道筋二可罷成茂難計儀二候故、向後も面々之居屋敷方角江御鷹野等二而被為成候節ハ本番二候ハ、御番替助先二候ハ、次之順より助相勤可然与何も申談、今日拙者右之通相勤候

享保六丑年三月十九日

当番
内藤丹波守

一 三月三日火事之節松平伊豆守松平对馬守居屋敷類焼致候付翌四日我等当番之節牧野因幡守被申聞候者、明五日对馬守御番之処居屋敷類焼其不快二も有之二付明日之御番因幡守差替被勤候、先年松平備前守屋敷類焼之節助二成候様二被覺候由被申候間扣を見候得而可申越由致挨拶罷帰度吟味候処、享保二酉年正月廿二日備前守居屋敷類焼之節御番一ツ助二成候、石川近江守二も正徳五未年二月晦日屋敷類焼之節御番壹ツ助二成候、其段因幡守江申越对馬守御番も被致助可然段申越候、依之五日对馬守御番丹羽式部少輔助番被勤候、松平伊豆守同九日之御番も助二成松平能登守被勤何茂御番壹宛助二成候事

享保八卯年四月廿八日

当番
内藤丹波守

一 享保八卯年三月土屋但馬守太田備中守土岐丹後守増山河内守

御役被仰付助御番被相勤候儀、正徳四年九月松平伊豆守牧野因幡守御役被仰付候節御番二ツ添相勤助之儀者一通り廻り候以後被勤候、其已後享保四亥年正月内藤丹波守松平能登守丹羽式部少輔御役被仰付候節も右之通被相勤候、同七寅年十一月仙石信濃守土井甲斐守御役被仰付候節ハ二ツ添相濟早番助番被相勤候、然共今度ハ同役中寺社奉行中江茂申談先格之通助被勤候

一 助番を相對替之事決而不仕古格二候、然共至テ無拋訳有之同役衆何茂相談之上相對替之事も有之候

例

享保十巳年正月十八日

助番
高木主水正

一 松平相模守当番之処今日内寄合二付助番之儀順之通内藤丹波守二候得共、息女結納被請候付兼而助替之儀主水正江頼置かれ候由二而今日助御番主水正被相勤候、同廿二日本多伊予殿二度目之御番之添を丹波殿被勤候、右相對替之儀兼而同役衆相談之上何茂一統承知之上助替有之候事

享保十六亥年三月十八日

当番
本多豊前守

一昨日備中殿二而為返番黒豊前殿御本丸御番相勤候処退出後

大火二付増上寺江相詰候由、依之急助之儀拙者方江申越候

処火茂募候付即刻致登城候、暮六時過伊豆殿退出二付罷出

候、右二付河内殿被出候間申談候処先例も有之候故助番二

いたし可然旨被申候、弥其趣二御心得可被下候

延享元子年十一月廿九日

当番 戸田越前守

一御鷹之雁被下候付一同二被為召候処西丸当番右近殿二も被為

召候得共、同役一同二而助二罷出候者無之二付雅楽殿江其段

被申上西丸当番被勤名代被差出候事

延享二丑年三月朔日

当番 永井伊賀守

一因幡殿母儀病氣少々快方二付今日方出勤、直二出勤之日方御

番被勤先格二候得共一昨日行列書付出し置候故御番違候得者

行列方も違候間今日罷出可申談と御番被勤候儀、今日者延引

罷出申談因幡殿三日方被致出番行列之方ハ居置、御番一日延

候間十三日方十七日迄之内御番二当り候衆中二ハやはり書付

之通行列被出候様二致し、火之番被務候同役行列二不被出候

間介之心二被勤其外行列之書付違無之様繰合申候、尤助二不

立返番無之相勤候筈二申合候

右行列書付ハ於紅葉山八構就御修行公方様右大将様御参詣二

付而也

寛延二巳年十一月十五日

当番 金森兵部少輔

一講釈聽聞寺社奉行衆当番之節ハ助順より忝人罷出候得共向後

其儀二不及、当番之寺社奉行衆差懸御用有之候而も加役衆多

茂有之候間一人聽聞二可罷出候、御奏者方当番之節も加役衆

方一人ツ、向後ハ聽聞二可被出旨此間何茂申談、猶又十一月

十五日相談相極廻状追而之内二認差出候

寛延三年三月四日朽木土佐殿方同役中江書付被差越候

一助先之者不快二而急助等申来候而も難相勤程二候ハ、次之助

順之方江助心得之儀兼而頼置、日之当番之方江助先誰心得罷

在候段右頼候者より為相知置可申候、右次之助順之方当番日

又ハ御使先之日ハ其次之助順之方江相頼尤其段当番之方江も

為相知可申候

但兩御丸当番江手紙或ハ奉札二而成共可申遣候事

宝曆四戌年二月廿八日青山因幡殿被相渡候書付

急助申来候節差懸御用等有之節次之助順江申遣候而者間違
二相成可申候、且助順之方病氣等二而助心得之儀申来相心
得候節も同様之儀二候得者拙者共四人急助并急助心得共二
御除候様二致度候、於御承知ハ次之順衆急助并急助心得之
儀次之順二而被心得候筈二申合候

二月

当番
青山因幡守

宝曆四戌年閏二月廿九日

一御本丸黒田大和西丸本多長門当番之処長門加役方御用有之御
本丸江罷出候付青山因幡殿助御番被相勤候、然処大和風氣其
上夜中痰氣強差塞不快二罷在差掛り候事故不及御番替助順江
可申越処、西丸長門当番故助先因幡除次之順兵部少方江夜中
申越助御番相務候、右之趣二而西丸助御番二相成候二付助順
前後二相成候得共双方共今朝迄不存候而罷出候上二而承知候
事故其通相濟廻状留二助前後之訳も不相認差出候、依之翌朔
日被出候同役衆江右助順前後之儀何れ之方二可相定哉向後も
ケ様之儀可有之事候間申合置度旨申談候処、西丸助ハ外二而
不存候得共前日方定り居候事、御本丸助ハ夜中申来候事二候

得者急助之筋二可成間、例ハ御本丸之助を先二立候得共此度
ハ西丸之方先二而御本丸助ハ次二可成旨土佐殿初何も被申候
付其通相極候事

一宝曆四甲戌年二月十五日当番永井伊賀守廻状追而左之通

一助先御使先之者ハ上野増上寺江之行列予参二不罷出為御目

見致登城、助先之者ハ還御迄見合可致退出候、御使先之者ハ

御成後見合可罷出候、御成先江相越候跡二而急助御使先等

申来候時ハ間違も可有之哉無覺東候間右之通致し可然候、

右御例正徳元卯年五月九日申合相濟在之候得共、近年此申

合無之候間猶又此間何も申談向後右之通相極候、尤紅葉山

御成之節者只今迄之通助先御使先之者行列予参可罷出旨是

又見合候間、此段為御心得申進候

一宝曆四甲戌年四月十八日

当番
阿部伊予守

廻状追而

一上野増上寺御成之節御本丸西丸共助二相成候ハ、助御番相

勤候段次之助順江早速可申遣置候、左候ハ、其日助先二相

成候者御殿江御目見二可罷出候、此段今日被出候同役衆申

合候為御心得申進候

一 明和二酉五月九日土屋能登守西丸当番之処今日御座敷奉行御張紙出候付助二被相立候

但御目付衆断二而御台所江被参候事

一 正月朔日二日三日西丸当番并添番二加役同役衆相当候節者、

夜中出火等二而詰場江被出候得者急助入申候条、助順之者其心得候様右御番之加役衆方被申合候事

但家来急二難引替二付当日前之方方出シ自分計助罷出候事

明和二酉年十月廿六日

当番 土岐美濃守

一 牧野越中殿急助先之処用事有之他行二付板倉美濃殿江急助先心得相頼置候由部屋迄以手紙被申越候処、退出後越中殿帰宅

二 付急助先被心得候間、若急助先之儀有之候ハ、申越候様二

案内手紙被指越候事

同年同月廿八日

一 御用日延引之儀者前日御届申上候先格二付前広二請取方之儀廻状出候節者請取方不相勤候儀如何二付、尤先達而内藤大和守申合候書付出有之候得共此度も御祝儀ハ先達而御書付茂不

出仕等之訳迄も不欠カ出候、御用日相延候儀先格も有之上ハ御用

無之候ハ、加役方二而茂受取方相勤可然旨今日加役方同役申

談候、仮平日二而茂御用有之節ハ差懸り助二致候事候得者来

月四日之受取方大炊殿被相勤候方二相成候

同年同月廿九日

当番 牧野越中守

一 万寿姫君様御深曾義之御祝儀献上之節平川口請取方今日被出候同役衆申談、助順二而御台様江之献上大炊殿万寿姫君様江

之献上貴様候得共、御加役御兩人二而ハ御用之程難御計難御

勤候旨二付拙者可罷出候、献上有之迄之内助入候ハ、右兩人

立置次之順江申遣候節申合候段何茂被申遣候

明和二酉年十一月十九日

当番 増山対馬守

一 今日拙者二度目御番二付為添大炊殿被出候、然処西丸当番土美濃殿御用有之御本丸江被出候二付難相勤、助順大炊殿伊賀

殿二候得共就同様難被申越助之儀ハ次順江被申越候、迎茂大

炊殿御本丸江被出候間直二添被勤候

宝曆十三未十二月廿八日

助番 朽木土佐守

一 右之外西丸替儀不承候大炊頭当番之処来正月月番御用有之難

相勤候由二付兵庫殿助被相務候筈兼而申合有之候処忌中被相成、依之一昨日遠江殿廻状之通拙者今日助御番相勤申候

宝曆十四月十四日

当番
土岐美濃守

一明日西丸添段々差合流レ候而美濃守添二可相成処土佐殿被申候者、明日之西丸当番板美濃殿二候間新役兩人二相成候故采女殿能登殿越中殿飛驒殿其外同役衆相談二而只今迄例者無之候得共後々二例二相成候而も可然旨、依之助流之節美濃守相除廻状二も其段出候方可然旨采女殿土佐殿被申候付、則廻状二差出候事

但右廻状書面御番之部二有之二付爰二略ス

当番

加納遠江守

明和三戌年三月七日

一今日同役衆病人多助先無之二付其段周防守殿江以常阿弥申達御使先者加役衆二而被心得候様申談是又御同人江以同人申達候、然ル処加役衆二而急助先不被心得と申儀者有之間敷候間、以来御用日之外ハ加役衆二而も急助先被心得候様可仕旨、今日急助入候ハ、土佐守相伴先より罷越候而可相濟事之由御同人以同人被仰聞候

但細川越中守殿江御老中様請有之節也

明和三戌年六月十日土屋能登殿被相達候申合書付左之通

此度急助御使先之儀二付加役衆被相談候二付猶又四人之衆江対談之上申談候趣左二得御意候

一急助之儀翌日御老中方登城之刻限二随三時方前二候ハ、加役衆江も順之通可申遣候、右刻限より以後二相成候ハ、加役衆相除次之助順之方江可申遣候、西丸急助之儀ハ平日迎も御本丸江被遣候御用向勝二付猶以右之通相心得候様可致候

但急助之儀御本丸之方ハ助先之加役衆并月番衆江も可申遣候、左候ハ、其時二より加役月番二而も御間合可被申旨、尤

西丸之方ハ只今迄之通次之本役方江直可申遣候

一出火之節ハ急助之儀只今迄之通申遣間敷候、并御規式御成日御門主御登城等之節是又急助次之本役之助順之方江可申遣候一御使先之儀も右急助先加役衆二而被相心得候通取計可申遣候、尤出火之節ハ加役衆御使先二而も次順之本役二而相心得候様可致候

右之通申談候二付加役衆助先并御使先之節ハ次順二而只今迄

之通相心得可罷在旨何茂申談候

五月

牧野越中守

朽木土佐守

土屋能登守

明和三戌年六月廿一日当番土屋能登殿方廻状之節一所尔到来書付左之通

一是迄助順繰方之儀助ハ何れ之助ニても一添ハ何レ之添ニ而も
二二而相勤候様先達而申合有之候所、其後御内書渡之節御番
順添与中之間助と突合候節者添之方を相勤中之間助ハ次之順
二而相勤来候、右二付添順之儀両様之様ニ相成候得共御内書
渡之節之添ハ御番順之添ニ而助順之添とハ違候故、以来共ニ
御内書之節添助突合候ハ、御番順之添を相勤中之間助ハ次之
順ニ而相勤可然候、右之趣是迄之通ニハ候得共紛敷候付尚又
此度申合候

六月

内藤大和守

土屋能登守

助番
土岐美濃守

明和三戌年八月廿六日

一当时伊賀殿助先之所吟味物御用有之急助先難被相心得候付、

依之右御用相济候迄急助入候ハ、同人相除次之順江申遣候様

被申聞候付此段申進候

宝曆三酉年十二月十九日

助番
本多長門守

一永伊賀殿当番之処被為召候付難被相勤助順河内守候得共不快
次之順飛騨殿貴様被為召候故是又難被成御勤、其次大和殿森
兵部殿二者參勤後未御番不相济候ニ付次之順拙者今日助御番
相勤申候、以上

宝曆十辰年十二月十八日

助番
森川内膳正

一黒大和殿当番之処被為召候付難被勤助順能登守候得共同様ニ
付難相勤、次順段々相除拙者今日助御番相勤申候、以上

追而

一今日黒大和殿被為召候付拙者助御番相勤申候然処、宝曆三
酉年十二月十九日永伊賀殿参府後初而当番之節之趣も有之
候ニ付退出後黒大和殿御番請持ニ被相勤、此已後助順之通
被相勤候筈ニ申談候間、此段為御心得申進候

明和三戌年十二月十八日

助番
牧野遠江守

一兵庫頭当番之処被為召候付難相勤助順出雲守候得共、御用日次順土能登守是又被為召候付難申越、其頃貴様伊賀殿候得共出雲守同様二付難申越、次順采女正候得共一兩日病氣其上致頭痛未眩与不致候二付難相勤、次之順拙者今日助御番相勤申候、以上

追而

一今日兵庫殿被為召候付拙者助番相勤申候、然処宝曆十辰年十二月十八日黒大和守参府後初而当番之節之趣も有之候間今日退出後兵庫頭御番請杯相勤候、此已後助順之通相勤候
筈二申談候間此段為御心得申進候

明和三戌年十二月廿五日

一美濃守当番之処臨時内寄合付助順段々相障兵庫殿、然処去廿一日西丸当番二付歳暮之御祝儀進上之帳今日於御本丸但馬守殿江被差遣候、且西丸当番牧遠江殿ニも歳暮之御祝儀進上之帳右近將監殿江於御本丸被指出候付朝助御番之儀先達而兵庫殿江申来候処、右二付朝助御番者次順江流シ被申候得共御本丸助之義申来候付御本丸助御番被相勤候事

明和四亥年十月六日

一越中殿被申聞候者一昨四日板美濃殿当番之処不快二付助被相立候、右手代差懸御番替も不相調候段認被越候得共、急之不快之儀ニも候間差懸与申儀ハ不宜候、前々も右之所追廻状二而文談相直候儀も有之候旨土佐殿江も越中殿被申談候旨被申聞候事

当番構無之部

一 御黒書院溜二而列座其外遠国奉書渡等有之節、廻り前八当番無構廻り後八羽目之間二罷在候

一 於中之間御三家方其外所々上使被仰渡新番頭組引渡、当番無構

但中之間朝明儀有之節者大目付之上御障子近後江罷在候

一 廻り後御右筆部屋縁類二而御右筆書合有之節当番無構、右相濟外席江被出候事も有之其節者心を附致出席候事

一 寄合医師焼火之間御番醫師於桔梗之間御葉種拜領之御礼老衆若年寄衆江被申上候節当番無構、尤常例之由

一 山吹之間二而中奥御小姓中奥御番被仰付候節且大坂加番駿府加番奉書渡之節当番構無之

一 於桔梗之間增加役被仰付候節当番無構

一 御番衆御役有之節当番一切構不申芙蓉之間罷在候

宝曆十四申年五月十三日

当番 土岐美濃守

一 井伊掃部頭於御黒書院溜來四月日光御名代被仰付候、御座敷廻り前二付当番羽目之間江出席無之

同年五月十五日

当番 戸田采女正

一 井伊掃部頭於御座之間御暇、其後於御黒書院溜來年三月中致参府候様被仰渡之、当番出席無之

同年六月十三日

当番 土井大炊頭

一年寄衆於御黒書院溜詰衆江年号改元之儀被仰渡恐悦被申上、

当番無構

明和元年申年七月五日

当番 土井大炊頭

一 於羽目之間諸司代御城代江御老中御逢之節当番構無之

明和二酉年七月十九日

当番 土屋能登守

一 奈良奉行山岡豊前守参上御黒書院溜御老中列座江罷出、当番

無構

明和三戌年六月廿二日

当番 大岡兵庫頭

一 紀州御使帰御小性組番頭本多備後守羽目之間御老中列座江罷

出ル、当番構無之

明和三戌年六月廿八日

当番 松平能登守

一大納言様御元服二付京都御使帰松平大和守今日御黒書院相障於羽目之間女房之奉書右近将監殿廻り前御請取、当番構無之

大目付衆者出席、尤廻状二茂差出不申候事

当番

明和三戌年八月三日

土岐美濃守

一今日松平上総介御鷹之雲雀被下候二付水戸殿より為御礼石河

土佐守罷出候、御目付謁相成候段当番無構

当番

明和三戌年八月七日

加納遠江守

一表御右筆組頭長野源次郎於中之間組中引渡御老中方廻り後有

之、当番構無之

明和三戌年八月廿二日

当番

土岐美濃守

一御台様江従水戸殿十二番目之鮭被献之、当番構無之

当番

明和四亥年正月九日

土岐美濃守

一紀伊殿於御国許被捉飼候鶴一以御城附被差上於廊下右京大夫

殿御逢、当番無構

明和四亥年正月廿二日

一今日拳鶴御料理御下老衆若年寄衆江被下候由、当番無構

例

宝曆十一年十二月十一日

御拳鶴

明和二酉年十二月十一日

御拳白鳥

明和五子年四月九日

当番

牧野越中守

一於御黒書院溜京都御使帰松平下総守周防守殿佐渡守殿江女房之奉書被指上候、当番構無之

明和五子年十月十五日

当番

土岐美濃守

一阿部飛驒守今日参府之御礼於御座之間申上候、於羽目之間老

衆御逢、当番無構且佐渡守殿田沼主殿殿若年寄衆二も被逢候

由

明和五子年十一月三日

当番

土岐美濃守

御勘定吟味役
上遠野源太郎

右西丸表奥御修復御用被仰付候旨於羽目之間右近将監殿被仰

渡之酒井石見殿侍座、当番無構

一遠国御使等御役所江罷越候衆江山吹之間二而奉書杯御渡候節、

当番構不申芙蓉之間二罷在候

一日光御門跡方例月御祈祷之御礼被差上於燒火之間御老中御逢、

当番構無之

一水戸殿方以御城附静吉田鹿島三社之御稜被差上、当番構無之

明和元年九月廿一日

当番
牧野遠江守

一松平兵部大輔増上寺御先詰初而相勤候付為御礼登城候得共松

平隱岐守例を以当番無構退出候事

明和三戌年五月廿八日

当番
土井大炊頭

一井伊掃部頭松平肥後守於御黒書院溜大納言様御召下御上下被

下旨御老中列座右近殿被申渡出席之儀相伺候処、於奥拜領物

之格二候間不及罷出旨被申聞、当番構無之

明和三戌年十月廿九日

当番
内藤大和守

一上野執当江於羽目之間右近將監殿赦帳御渡、当番構無之

明和四亥年二月十一日

当番
戸田采女正

一増上寺惇信院様御靈前江来月中御台様御参詣被仰出候、右御

用可被扱旨於羽目之間松平伊賀守其外御留守居大目付御作事

奉行御目付江右近將監殿被仰渡、当番構無之

明和四亥年十一月三日

一御拳之雁御三家溜詰松平越前守江被下候、御使於中之間右京

大夫殿被仰渡御拳之雁二付御同朋頭奥方持出被仰渡之席江持

出候事、当番構無之

明和六丑年四月十七日

当番
太田備後守

一大納言様紅葉山御参詣御先立相勤候付為御礼酒井雅楽頭登城

於松溜周防守殿御逢候、当番構無之大目付衆茂不被出候

同日

一上野執当円覚院江於羽目之間右近將監殿来ル辰年四月日光山

御社参之儀随自意院殿江被仰遣候、当番構無之大目付衆も不

被出中之間二被罷在候

御番割之部

一 御番割ハ毎月廿八日之当番翌月之御番割相調於御城廿八日仲間中江遣之、同役中増減有之時御番割中途ニ割替候時も右之御番割相調候仁是を認直シ候、首尾尔よつて其日当番之仁認候事も有之也

△附札

割番之仁差合候時ハ其日之当番江申合当番より割申候事、先ハ割番之仁認候而廻シ候儀ニ御座候

但極月廿八日当番之仁ハ翌年正月六日迄之披露割之書付相調添申候也

当時番割元差合候節ハ前月之廿八日当番之仁番割出シ候、

前月之仁差合候得者前々月之廿八日当番之仁被取計候、且

御暇ニ而茂右同断、番割差出候節番割元産穢等之節ハ番割を認当番江相頼配申候事

一 寺社奉行衆ハ寄合日九ケ日除之跡か先か繰替候事、但正月四

日六日十一日寄合日ニ候得共十二日方評定初有之故右三日ハ無構御番割候之事、只今ハ右之九ケ日繰替無之番割順ニ相勤候、具ニ末ニ記之

一 御番割之末ニ助之順名書之寺社奉行名除之

当時寺社奉行助順ニ相加リ候事

一 正月四月五月其外いつニ而も上野増上寺御参詣之日寺社奉行衆御先江被参候故御番ニ当リ候得者御番跡か先江繰替、乍去紅葉山御参詣ニハ構なし

只今繰替と申す義無御座候寺社奉行衆御用ニ当リ候得者助ニ立申候

一 参勤之仁ハ御目見相濟候得者其日翌日を除三日目方御番を割申候、若御目見之翌日御精進日ニ候得者四日目方御番割候事

新役被仰付候仁ハ被仰付候日方十日除之十一日目方番

但 入候、若十一目御精進日ニ当リ候得者翌十二日目方出

番之事

参勤後初番御精進日除候事ハ近格覺不申候、新役初番ハ御精進日相除申候、日数之儀ハ先右之通候得共不相定其時々

申合と相見へ申候

例宝曆十四甲甲年二月十五日拙者御奏者番被仰付候处在番上野勤番被仰付此節右勤め番中ニ付三月二日初番也

一 差合之仁忌明其日方御番割候事、差合候節御番一ツ之日数ニ而忌明候時ハ助ニ立忒ツニかはり候得者繰詰ニ可致事

但御番二ツ之日数之忌ハ繰詰ニ相成候得共、忌之儀御番之

前日昼迄ニも申来候節ハ先助ニ立其跡ハ繰詰ニ罷成候事△

一 差合候仁忌明其日方御番割仕候事

一同役差合之節御番江忌二ツ懸り候時ハ初一ツハ助、二度目よりハ繰寄ニ成候申合

一 御番江忌一ツ掛り候時ハ御番すハリ尔て割直シ不申候申合

一 石川近江申ノ四月二日方娘之差合之節松平宮内御番割番、

申ノ四月朔日近江娘気色大切ニ付御番割之儀相談ニ而安藤

△附札 右京三浦壱岐松平対馬土井伊予井上遠江高木主水松平備前

と宮内申合向後弥右之通ニ成候筈、依之四月七日近江当番

差合ニ付助番備前相勤候

一 差合之節御番一ツハ助ニ成二ツ目方繰寄ニ成候事

一 右差合之節御番一ツニ而忌明候得者助ニ而相濟御番すハリ

ニ成申候、御番二ツ三ツヘ忌懸り候節之義前々申合違も有

之候処、正徳六申四月七日松平宮内少輔御番割之節於御城

何茂相談ニ而差合之節御番一ツハいつ尔ても助ニ立すハリ

尔て相濟候、御番二ツ三ツニ懸り候時ハ初ハ助二ツ目方繰

寄ニ向後成候申合之事

一 当時何ニ而も二ツ御番を外江頼候得者御番繰詰ニ成り申候

例宝曆十四申五月朔日出雲殿御本丸当番之処故障之旨ニ而

采女殿江御番替被致、同月十四日出雲殿不快ニ付手前江御番替被致候、同月廿五日方繰詰ニなり申候事

一 御法事ニ付上野増上寺江被引越候衆前体一日後体三日之事

近頃助ニ而相濟候格と相見へ申候

一 病氣之節御番二ツ迄ハ御番替ニ罷成候、三ツ目方御番繰詰罷

成候事

御番替ニ而相濟申候不同時ハ助ニ立尤前書之通り三ツ目よ

りハ繰詰ニ成候事

一 仲間病氣登城難成節又ハ俄忌ニ成登城無之時是者急助ニ而候

但病氣ハ夜中ニ而候得者御番替明ケ六時方ハ急助ニ成候事、

近格ハ二三方江も番替申遣不相調時ハ助ニ立申候

一 服有之衆正月五日九月極月十六日十七日御番除之事、并正月

晦日二月朔日六月山王祭礼有之年十四日十五日御番除候事

一 明日之御番之節御用被仰付候節何二而も助二立申候、此儀二付繰寄と申儀ハ無之候

一 寺社奉行当番之節立合二成又ハ不時二御僉議者杯有之節助二立申候事

一 助先二当り候節ハ八時迄在宿、尤遠方江無拋義二而相越候節ハ次助番と当番江手紙可差越事

△附札 御勤給候へと頼遣シ、相心得候と申来候得者其趣其日之当番江茂申遣置候事

右助番奏者番方計被相勤候事

但助番当り候へハ四時迄ハ見合申候、右刻限以後ハ近所江ハ罷出候、若急助入候へハ先右直二御城江罷出候、遠方江参

り候節ハ同役江頼申候而罷越候、尤当番之方江も誰江頼申候段申遣候、但右御用日二而も御奏者方之衆不殘差合二急

助入候節ハ寺社奉行月番之外之衆御老中江伺二不及助被相勤候様二可申談旨、宝永五子九月大久保加賀守殿被仰聞候

事

一式日二日十一日廿一日但正月二日ハ除正月十一日ハ十二日二成、立合四日十三日廿五日但正月四日七月十三日極月廿五日

流二成、内寄合六日十八日廿七日但正月六日極月廿七日除之右之日寺社奉行衆御番当日二候へハ助相立申候事、加役方

御用日二相当候得者前後江繰替申候
但右之通二候得共先ハ翌日江出申候、前日江ハ出し不申候

正月二日四日六日十一日七月十三日十二月廿五日廿七日、此日ハ除不及事

但極月十三日も除不及候、是ハ御煤弘故也

正徳元卯年五月九日
一 助番当り候ハ、向後上野増上寺江之行列予参二も不罷出在宿、可然之子細者御成先江罷越候跡か又ハ御成先江急助番申来候

時ハ間違等も可有之哉無覺束候間右之通二いたし可然候、扱助番有之内御成先二而之披露順当り候時ハ是又右之訳二而御

成先江ハ難相越候間、其次之順より相勤可然候事

当番 石川近江守

△附札 当時ハ助番当り尔ても無構紅葉山上野増上寺江行列
又ハ予参ニも罷出候事

一紅葉山江之御成ニハ助番当り候者も披露又ハ行列予参ニも可
罷出事

但右之様成儀唯今ハ無之候無構罷出候、紅葉山ニ而披露等
無御座候、尤御番繰替等之儀無御座候御用日之構茂無之候、
順之通割寺社奉行衆御用日之処相延候得者寺社奉行衆本番
之通可相勤旨申合相定右之通相勤候

一相障候事有之評定無之候得共御用日除不申御番割出し申候事

例明和元申十二月廿八日当番土井大炊頭殿方出候御番割も

十二月二日西丸当番同人也、是ハ刑部卿殿御逝去ニ付御中

陰ニ候間二日之式日無之故也

元文元辰年八月朔日

当番
土井甲斐守

一越中殿忌中ニ付寺社方紀伊守殿耆人ニ而ハ当番難被相勤候間、
助ニ立候と成とも繰詰ニいたし候と成とも致候様ニと被申候
間申談、五日紀伊守殿御番方繰詰ニ致候積り申談御番割致直
し明日何茂江差遣答候事

同年八月十三日 当番
朽木土佐守

一昨日大岡越前守寺社奉行被仰付候間紀伊守殿西丸御番可被勤

と存候、紀伊守殿申談候処西丸御番助共ニ可被勤旨被申候、当

月越中殿月番ニ候間紀伊守殿計西丸御番可被勤候由被申候

一河内殿も今日方出勤候、致登城候筈之処息切被致候間老衆被

廻候のミルて不被致登城候、尤当分ハ御番も被勤間敷由土佐

守当月御番割致候間式部殿江伝言被申越候事

享保二酉年六月廿八日 当番
松平備前守

一民部少輔忌中ニ付来月朔日御番一ツ助ニ成候筈今日何茂申合

候、依之去年申合候書付相廻シ可然与何茂被申候付別紙進之

候、向後此書付之通可致旨申談候

別紙半切

一同役差合之節忌御番ニ二ツ懸り候時ハ初一ツハ助二度目方御

番繰寄ニ可致候事

一忌御番ニ一ツ掛り候ハ、助ニ而相濟御番割直シ不及候事申四

月朔日同役何茂申合候得共、弥向後右之通ニ可致与今日又同

役中申合候事

元文六酉年三月十二日

当番
牧野越中守

一 甲斐殿痛所不出来二付急ニ出勤難被致由、当時同役少ニ付御
番替も度々差支難相調候、例格御番一ツ方繰詰ニ成候得共右
之通故此節方繰詰ニ致候様ニと被申越候間、致承知御番割相
認明日可差出旨申遣候事

同年四月廿九日

一 越中殿今日日光方帰府之御目見有之候事

右二付先例一日間置御番被勤候事ニ候得共、二日御用日ニ

候間三日御番被勤候積ニ御番割いたし今日差出候事

明和二酉年四月廿八日

一 土岐美濃守酒井飛騨守今日從日光帰府之御目見有之候事

右二付先例之通一日間置五月朔日方御番相勤候様ニ御番割

出候、飛騨殿二者二日当番之処御用日二付三日当番之積ニ

御番割出候事

同年四月十四日

一 内藤大和守今日從久野帰府之御目見有之候、同廿四日方御番
相勤候積ニ御番割出候事

延享二丑年四月廿七日

当番
松平紀伊守

一 因幡殿廿五日迄ニ而忌明ケ廿六日方出勤登城被致候、豊後殿
日光御名代被勤帰府御目見も廿四日ニ相済候間如先格廿六日
御本丸御番被勤、因幡殿廿七日御番ニ候得共八講御修行相済
候、御祝儀差上物廿七日方外二日限無之ニ付御番被務候而ハ
如何ニ付申談繰替廿九日方御番被勤候事

享保六丑年十二月十一日

一去ル七日於御城明後九日半年代之御暇茂被下内藤丹波守御暇

出候ハ、九日之御番主水正ニ候間、先月廿八日丹波守御番ニ

候条如先例主水正御番割致し何茂江遣候様ニと三浦壱岐守始

被申右之通いたし候

一 昨日因幡守御番之処因幡守屋敷近所出火ニ付被致退出壱岐守

被居合俄御番被勤候ニ付助二いたし可然候、寺社奉行衆壱岐

守式部少輔茂被居合申談候

一同役名改候得者御番割元方御番割認直差出候事

例明和二酉年十月六日戸田大炊頭長門守与名改ニ付当月御
番割元久世出雲守方右名改ニ付御番割認直来候事

但右之節久世出雲守忌中二罷在、長門守名改六日出雲守
忌明十一日即日御番割相直り下手紙二而差越候事

一 寛延三年五月鳥居伊賀殿舍弟之忌中御本丸御番二ツ懸り候
二 付先例之通繰詰二相成候、六月十六日忌明二付御番入之儀
土佐殿先例吟味有之出勤之日直二御本丸御番被勤候、右御番
割長門殿方出シ被申候、右先格左之通

享保七寅十一月土井伊予殿忌中十二月二日迄懸り、十一
月十六日之御番助二相成十二月三日出番二而御座候

右之通土佐殿方書付来候事

一 寛延四未年六月金森兵部殿參勤十一日二御礼有之、御番割相
直候付五月廿八日当番長門殿方御番割即日以手紙罷出候、十
一日十二日御番割者是迄之通二候得共先格之通今十一日方御
番割認十三日兵部殿御番入二候、十六日西丸御番割十六日迄
之御番割今日出シ被申候

一 十三日御暇二候得者十三日方当月中之御番割出候筈二候

一 十五日右京殿当番二相成候付此節服有之、十五日八山王祭礼
故如何可有之哉と土佐殿申談候処古キ書留二十五日山王祭礼

有之時ハ服之方御番繰替候段有之候、併近年土佐殿二ハ御暇
年故近例覺不被申候段申来候二付十一日何茂登城之節申談候
処、紀伊守殿撰津守殿金兵部殿鳥伊賀殿二も古例有之上ハ繰
替可然由二付則くり替長門殿方御番割出候、長門殿今日登城
無之候故自分申談候、青因幡殿江ハ長門殿方申談有之候処是
又存寄無之由二而右之通相決候、以後覺二記置候事

一 土佐殿病氣二而以使者參勤之献上物相濟候得共、在府同様二
御番割長門殿方遣被申候事

但右間違同日出不申候由土佐殿押合方内意申来其段長門殿
江申遣則出シ被申候

一 寛延四未年土佐殿參勤之御礼病氣二付以使者献上物相濟閏六
月十三日方出勤候所、未暇与無之二付先例も有之由二而何も
申談之上御番ハ当分不被相勤候

但右御番不被勤候儀年寄衆之御届被申候哉如何其段不承候
得共、先ツハ御届ハ無之趣二候

右之通二而七月十七日方御番入有之候、併当分助ハ断申度候
由何茂江被申聞助順二ハ相除候事

明和四亥年八月十五日

一 今日御番割牧野越中殿方被差出候処、土屋能登守病氣二付登城無之二付今日御暇不被仰出候、依之御番割名前出申候、但戸田長門守今日參勤御礼病氣二付以使者申上候得共やはり御番割名前有之候事

一 明和四亥年正月廿日牧野遠江殿廿日之忌中二相成候処忌明迄御番二ツニかかり不申候付御番繰詰二者相成不申候得共、御番割出候砌之儀故忌中之内ハ御番くり上ニ相成忌明之日二月十一日当番二御番割出出候事

明和四亥年八月廿八日

当番
土岐美濃守

朔日 主水 伊賀

二日 越中 長門

三日 大炊 対馬

右御番割朔日越中殿二日主水殿之当り二候所土佐殿被申聞候者、主水殿服有之候間二日日光御名代被仰渡も有之候二付、例月十七日二拙者朔日主水殿二日越中殿と前後江被繰替候様被申聞候、おして之被申候事二付右之通繰替差出申候事

但服有之日光御名代御目見御暇等之節当番相勤候例

宝曆八寅年九月九日

当番
青山因幡守

一 日光御名代御祭礼奉行御暇二付今朝左衛門尉殿六半迄登城、拙者服中二付酒飛驒守江相頼同人之間江罷出拝領物被仰渡之節も致出席候

宝曆十一己年正月廿四日

当番
内藤大和守

一 日光御名代帰御目見有之候付今朝左衛門尉殿登城之節、拙者服中故飛驒守相頼同人之間江罷出候

宝曆十二年九月八日

当番
毛利讃岐守

一 伊勢御名代日光御名代御祭礼奉行御暇二候処、拙者儀服中二付飛驒殿江相頼同人之間江被出拝領物之節も被致

出席候

明和五子年

一 六月廿五日美濃守娘不幸二付七月五日迄忌中二罷在候、尤忌御番二ツニ懸り不申候二付繰詰二相成不申翌廿六日当番助相立申候、六月廿八日御番割到来七月七日御本丸当番之処三日

方九日迄産穢相成候ニ付七日当番も助相立候而ハ都合御番ニ
ツ助番ニいたし候も如何ニ有之、尤右様之例も無之ニ付御番
割元久世出雲殿江以使者右之趣申遣候処、被致登城於部屋同
役衆相談之上返答可被申越之旨挨拶有之候処、相談相決七日
美濃守当番之処産穢明当日十日ニ繰替ニ相成則御番割七月六
日被相配候事

病氣之節御番取扱之部

- 一 病氣之節御番ニツ迄ハ御番替ニ成三ツ目方ハ繰詰と成候事、
其節ハ同役江不残手紙ニ而申遣候事
- 一 病氣之節御礼日惣出仕其外事立候出仕日ハ御用番江御届申当
番計へ手紙ニ而申遣ス
- 一 臨時御礼衆杯有之節病氣ニ而不罷出候得ハ御用番江届ニ不及、
同役之中当番計被成共其外ニ茂一両所江断申達候事
- 一 出勤之節御用番江御届申候病氣ニ候ハ、出勤之御届罷越候事
前々八月頭一度計引込候而ハ出勤御届罷越候儀無之候処、
延享四年九月酒井雅楽頭殿小出伊勢守江被仰聞候趣有之、
向後者御届可申旨同役中申合有之事
- 一 予参之節其朝病氣ニ候得者御城当番江申達ニ不及予参ニ被出
候同役江申遣候、前日ニも同役中被致候病氣ハ予参ニ罷出
分ニて当日改届断ニ不及候
- 一 当番中之間ニ罷在候中ニ急ニ病氣差発候ハ、大目付衆江申達
部屋江罷越候加役之同役衆被詰合候ハ、退出之節伺候儀并差
懸候儀者被勤候様ニ頼部屋江罷越候事

一当番病氣之節詰合候同役直二助番相勤候事、尤助番江も早速申遣候得共夫迄難見合病氣二候ハ、乗物部屋迄入候事、坊主衆を以大目付江申達直二退出仕候事、助番未被出前二御用番御退出二候ハ、居合候者当番二代り明日之事相同直二助番二成廻状可差出候

元文六酉年正月廿四日高木主水正病氣之節本多紀伊守被詰

合右之通取計被申候

一当番病氣之節加役之同役衆も御用日二而不罷出外二詰合候同役衆無之時ハ早速助順江申遣候事者勿論西丸当番をも呼二遣可申候、西丸当番其段承知候上西丸御老中江申達門通御本丸江被相越助番被罷出候間当番代り被勤候事

右元文二年七月十一日秋元但馬守急病之時之例

元文二巳年七月十一日

助番
秋元但馬守

右之外殿中替儀不承候越中殿当番之処、御用日二付為助番拙者罷出候処俄二眩暈差発難相勤二付、急助之儀和泉殿伊賀殿江從御城申遣候処何茂不快之由二而備中守方江被申越候旨申来候、依之三宅防州江右之趣申達候、其已後左近将監殿御差図

之由二而防州被申聞候者、今日於柳之間使者江拝領物有之候間寺社奉行衆且西丸当番江も早々被出候様可申遣旨二付寺社奉行衆并西丸当番主水殿江其段申遣候処、主水殿内通り早速被出候二而相済直西丸江被相越候、備中殿儀も被出候得共御老中退出二付即刻致退出候

追而

一松平備後守七夕之御祝儀差合二付延引今日以使者白銀壺一枚被差上之左近将監殿江伺之上於桧之間主水殿被謁候

一内藤大和守被下御暇在着二付為御礼一種一荷、牧野内膳正右同断二付干鯛一箱、何茂以使者差上之於廊下拙者謁一紙目錄認左近将監殿江差出候

一松平備後守仏光寺使者謁候儀拙者伺候而相済候得共不快二付右両所使者主水殿被謁候、備後守使者被謁候半切ハ左近将監殿江差出候筈仏光寺使者被謁候一紙目錄認之中務大輔殿江可差出候処、御兩人最早退出二付右両様共明日差出可申旨主水殿と申談候

一左近将監殿九半時前退出御座候、拙者儀致保養追付罷出候、

已上

元文二巳年七月十一日

西丸当番
高木主水正

一 昼時過但馬殿方手紙被差越不快二付御内書御渡候節柳之間江

出由被仰聞候
一 拙者儀不快二付御番紀伊守江相頼中務大輔殿退出前罷成候

出席不罷成其誤三宅防州江被申達候処、左近將監殿江被相伺

候得者西丸御番拙者早々罷出候様被仰候旨防州被申達候由申

来り、鈴木飛驒守を以能登守殿江右之段申達御目付衆江御門

断申内通罷出相勤夫方西丸江罷越候

元文六酉年正月廿四日

当番
高木主水正

一 今四時前増上寺惣御靈屋江被遊御参詣御機嫌能九時前被遊還

御候、御成之節於例席何茂致御目見候、還御之節者不快二付紀

伊守詰合二付御白洲江罷出候

一 還御已後為伺御機嫌御三家并紀伊宰相殿被差上使者於躑躅之

間中務大輔殿御逢候

一 右二付所之御門番衆登城御同人御差図二付於席々紀伊守謁候、

右之外殿中替儀不承候

追而

一 明日之儀中務大輔殿江紀伊守相同候処相替儀無之例刻可有御

出仕心得并伺御機嫌

一 御代々御年忌御法事有之刻初日結願日為伺御機嫌登城御參詣
翌日惣出仕登城、尤其節同役中可申合事

一 窺御機嫌罷出中之間江廻り相伺候所又ハ芙蓉間例席二並居候
迄二而中之間江不廻所、寛延二巳年十月二日土佐殿永伊賀殿

金兵部殿申談候趣左二記ス

一 土用寒入式ハ初雪伺御機嫌ハ例席二並居候迄二而中之間
江不廻候

土用入寒
入初雪御
代々御法
事初日結
願日月次
御礼無之
節も當時
於中之間
御機嫌相
伺候様二
相成例左
二有之

一 御代々御法事初日結願日伺御機嫌罷出候節前之此方計二
而罷出、御書付も不出儀故中之間江廻り伺御機嫌尔不及
候、例席二並居候迄二而相濟候

一 御代々二而無之御法事等二候ハ伺御機嫌罷出候様御書付
出候、右之節并其外御書付出伺御機嫌罷出候時ハ中之間
江廻り候

一 御法事中等二而節句二出仕計有之御礼無之時中之間江廻
り当日御祝儀申上候、月次御礼日右之筋二而御礼無之時
ハ節句とハ違候間中之間江廻り御祝儀等申上二不及候、

芙蓉之間例席二並居候迄二て相濟候

一 寛延三年四月十五日於日光御法事中二付御表江出御無之出
仕計有之候節同役中前々之通芙蓉之間二列居候迄二而中之間
江不廻候処、向後表向出仕遣候節ハ中之間江罷越伺御機嫌候
様何も可申談置旨御用番右近殿順阿弥を以被仰聞候段当番阿
部飛驒殿廻状二申来候事

一 土用寒入初雪御城近辺出火等二而為伺御機嫌登城
右二ヶ条共中之間二而同役一統御機嫌相同之候

例

寛延三庚午年六月十七日

黒田大和守

当番

一 去ル頃右近將監殿被仰聞候趣も有之候付今日土用入伺御
機嫌席之儀罷出候、同役衆申談候処区々二而難決濟候故
伯耆守登城懸先達而左近將監殿被仰聞候趣も有之候へは
今日中之間江罷出御機嫌相同可申哉又ハ芙蓉之間二可罷
在哉と内意相尋候之処、都而ケ様之伺御機嫌ハ於中之間
被相同可然候芙蓉之間二罷在候而ハ諸衆同様之様二有之
御奏者番之分ケ無之候、於中之間被相伺候得者御奏者番

但西丸江登城候
儀同役可申合事

と諸衆との分ケ有之候間右之通可然旨同人申聞候付今日

於中之間伺御機嫌候、右之趣二候得者以来何事二よらす

於中之間伺候方と存候、此段為御心得申入候

元文四未年十二月十九日

当番 牧野越中守

一明日寒入二付例年何茂御出候得共、明日ハ就御成ケ様之節罷

出候例も無之二付大目付衆江申談候而も難相濟候間、席も有

之付左近將監殿江相伺候処明後日何茂申合可伺御機嫌旨被仰

聞候

一元文六酉年五月三日

左近將監殿御渡被成候由二而石野筑州被相渡候御書付写

別紙

土用寒入御機嫌伺之儀当日午刻以前入候ハ、其当日御機

嫌可被相伺候、午刻以後候ハ、翌日可被相伺候

一月次御礼無之廿八日

公方様御鷹野御成之節者奏者番之当番計罷出候

例

宝曆三酉年二月廿八日

一明和元申閏十二月十六日

当番 大岡兵庫頭

一初雪二付於中之間御機嫌伺候、然所当番兵庫殿拝領物被

申渡候席被出候二付不被居合御機嫌伺之節以欲席被致候事

明和二酉年十二月十三日

助番 戸田長門守

一昨夜外桜田小笠原佐渡守屋敷出火之処為伺御機嫌詰衆不被出

御三家使者茂伺之上被差出候由、依之当番長門守順阿弥江伺

御機嫌之儀入可申哉与聞合候処右近將監殿伊予守殿伺御機嫌

登城有之御尊有之候間伺御機嫌可有之旨申聞候、依之廻リ之

節可相伺旨西丸江茂罷出候旨申上候処御承知二付於中之間一

同御機嫌相伺申候

但老衆登城之節ハ伺御機嫌二付非番之者中之間江可罷出候

処、御機嫌伺未相決不申二付部屋二扣中之間江者不罷出候

入掛二御機嫌相伺申候

明和四亥年二月十九日

一御番繰詰二相成候後御礼日等之節当番江断手紙差遣候二不及

候、尤此段土佐殿江承合候処左之通申来候事

明和四亥年二月廿七日

当番 土屋能登守

一今日天英院様御法事御中日二付何茂於中之口御機嫌相伺候、
出雲守二者御法事為見廻り増上寺江罷越相濟外御用二而登城

二付不相伺御機嫌候

但西丸江ハ何茂登城不致候事

明和四丁亥四月九日

助番
仙石越前守

一今八時前京橋辺出火二付被出候同役衆申合今夜御機嫌相伺申
候

但翌日御機嫌伺無之

明和四丁亥五月十一日

当番
牧野遠江守

一今夜八半時日比谷御門内青山大和守屋敷出火二付被出候同役
衆申合今夜御機嫌相伺申候、尤明日も何茂可被成候出と存候

同十二日

当番
土岐美濃守

一今曉御曲輪内出火二付為伺御機嫌高家衆詰衆被出候同役衆茂
被出於中之間御機嫌相伺申候、西丸江も相越候拙者儀も退出

方罷越候

明和四丁亥六月廿五日

当番
土屋能登守

一昨夕土用入二付今日於中之間高家詰衆御機嫌伺有之候処、於

御右筆部屋縁類被仰渡有之致出席候間当番御機嫌伺不罷出候
事

明和三戌年六月十三日

当番
戸田采女正

一土用入午之刻以前二候得共御礼衆有之候得者表出御被遊候付、
翌日伺二も可為成哉と昨日越中守助番相勤候節三阿弥二談候
処無急度右近將監殿江御咄申候由、然処御三家方も伺相濟
明日出候由左候ハ、居残伺可然之旨同人申聞候間例文之通廻
状追而二差出候段同人方申越候

一御暇之衆土用入伺候儀ハ越中守以三阿弥伺之処御宅江被指出
使者候様被仰聞候由申聞候

明和四亥年十二月朔日

当番
牧野越中守

一今月初雪二付伺御機嫌之儀当番無急度御同朋頭を以相伺候処
伺御機嫌候様被仰聞候付、御礼後細廊下方中之間江非番同役
者罷越、当番者今日日光奉行浅野美作守拝領物有之二付如例
芙蓉之間、高家衆詰衆大坂御定番井上筑後守初雪伺御機嫌有
之於中之間同役一同伺御機嫌候事

但当番ハ芙蓉之間拜領物之席江罷出候付御機嫌伺之方江者

不罷出、非番同役ハ伺御機嫌有之候付今日者芙蓉之間御縁

類江者不罷越候事

一於西丸月次御礼与初雪御機嫌伺与両度二申上候

廻状追而左之通

一初雪二付從紀伊殿水戸殿被献物ハ有之候得共御登城被成候

付前々之通使者不罷出候、被指上物ハ朝献上之通相濟候由

二御座候

一同断二付從尾張殿被差上使者候由二候得共退出之節迄不罷

出候

一同断二付御礼過高家衆詰衆被伺御機嫌同役衆例之通於中之

間御機嫌相同申候、西丸江も被出拙者儀も退出_ら罷出候

明和四亥年十二月五日

一昨夜一ツ橋外本庄乙次郎屋敷出火無間茂致消火候、今日伺御

機嫌之儀承合候処伺御機嫌無之候由、尤御三家方も使者不

被指出候事

出仕断之部

一元日

一二日

一三日御謡初二付晚計

一十一日御具足御祝儀二付

一嘉祥

一玄猪

一惣而窺御機嫌

但御書付出候節之

一御祝儀事二付御能見物被仰付候段御書付出候節

一御能等之節御座席奉行当り候節

一御拳之鳥御料理被下候節

右十ヶ條病気差合等候ハ、御用番江御届書以使者指出当番江

も断手紙遣、西丸江懸り候儀ハ品により西丸御老中江茂届使

者入候、尤西丸当番之節者登城掛御用番江御届直勤之事

一正月三日朝

一六日寺社之御礼二付

一 七日七種二付

一 二月朔日上野一山御礼二付

一 月次之御礼無之廿八日

一 六月十五日 但山王祭礼年二ハ当番計登城非番ハ不罷出候

一 七月十五日

一 惣而御礼有之日

一 寒入土用入初雪

一 御法事等同御機嫌

一 御城近辺出火後伺御機嫌

一 惣而伺御機嫌

但御書付不出節也

一 公家衆御対顔御返答御能

但御能之日広蓋御座席奉行等御能紙二名前有之候節者御届

入候事

一 日光御門跡御登山前御饗応御能

一 惣而御祝儀事之御能見物被仰付候段御書付不出候共

一 御法事相済上野増上寺御饗応之節

一 御誕生日

右十七ヶ条病氣差合等之節ハ当番江断手紙遣御用番江ハ御

届無之候、恐悦使者入不申候

一 御規式御成

右病氣差合等之節者当番江断手紙遣候尔不及候、尤御用番

江御届も無之候、人二より当番江断手紙遣候仁も有之候得

とも不及其儀候事

但御使先助先二候得ハ断手紙遣候、勿論外江扣頼置其段

も手紙二書入遣申候事

一 明和二酉六月廿五日朽木土佐殿より被差出候申合左之通

一 上野増上寺御参詣有之日御使先二而御登城之儀火之番之御

方御使先御当り候者次之順江可被仰遣候、尤次之順加役衆

二候ハ、加役衆御除其次江可被仰遣候、火之番之御方御目

見二御登城之儀者勿論之儀御座候、且御不参之節ハ当番江

御断被仰遣候様二と存候、去々年之申合二無之二付申進候、

以上

一大紋行列并予参可罷出処急二不快差合等二候ハ、其訳懸り之

大目付并取集之同役其日の当番へ手代遣ス、不快等尔て兼而

断置候節ハ登城不致候由断手紙二不及候、予参之節者予参可

罷出仁一二ヶ所江手紙遣何茂不罷出候共夫切二致候、何茂不

罷出節ハ当番へ手紙遣し候仁も有之候得とも不及其儀候

一病氣出勤之節ハ御用番江御届罷越候、差合二而引込出勤之節

ハ以使者御届申候

一惣而出火地震等之変事之節ハ時之趣二より断之儀取計有之

一病氣之節御礼日惣出仕事立候出仕日之外ハ御用番江御届二不

及当番江断手紙遣候事

一御暇被仰出発足前并参勤御礼前左之通

一五節句 嘉祥 玄猪

右御祝儀济恐悦使者

一御規式 御成 惣出仕 土用入 寒入 初雪 伺御機嫌

御曲輪内出火

右何茂使者勤之事

一在邑之節ハ本席之無差別諸事雁之間詰之通可相心得事

一御能見物被仰付候当日不快断二而不罷出翌日見物為御礼登城

日不参候とも当番江断手紙不及候事

明和四亥年正月十一日

一土佐殿江出仕致断出勤届之儀二度致断候得者御届二罷出候哉

之段承候処、前方雅楽頭殿之節都而出仕断致し候得者出勤届

二可罷出事之様御沙汰有之候後森川扨同役衆評議、二度断方

出勤届二罷出候評議極候由被申聞候

明和五子年正月十一日

一今日丹波殿西丸当番之処此間中疋痔疾氣二付御番替被致候へ

共相調不申候二付助二被相立候、依之今日御具足御祝儀日二

付御本丸御用番江御届当番江ハ奉礼を以出仕不被致旨被申越

候、右奉礼之例無之候得共土佐殿方右之趣二取計候様案文以

被申越候二付其通り相济候、左之通

以手紙致啓上候今日ハ各様二茂可被成御詰御太儀之候事奉

存候、然者今日丹波守西丸当番之所何々二付難被相勤御助

御番之儀被申上候、今日御具足御祝儀有之候得共登城不被

仕候段御用番江御届被申上候、此段各様迄宜得御意旨被申

付候間如斯御座候、以上

一 今日御番替二而候得ハ断手紙差遣候様是又案文認土佐殿被差

越候二付以後為見合記置、左之通

以手紙致啓上候、今日御当番可被成御勤御太儀之御事、然者

拙者儀今日西丸当番之所此間中何々二付難相勤御座候間誰

殿と致御番替候、今日御具足御祝儀有之候得共登城不仕候

段御用番江御届申達候、依之同役衆其外被相尋候衆も有之

候ハ、宜御挨拶可被下候、右被得御意如此御座候、以上

新役心得

一 御役被仰付初当番当り候迄見習二而有之故老衆退出迄当番者

同様罷在、見習之内者於席々拝領物被仰渡候時ハ当番之跡二

付罷出申候、拝領物之節者当番出席候間見習之者ハ跡二付扣

やはり元之座二罷在候事

初御番相濟候得者見習二而無之候間未見事等席々之様子当番

之勤方老衆之方ハ不見所ハのそき申候

一 当番ハ御台所江罷越候節見習之内ハ罷越候事

一 御役被仰付候已後師匠振廻与申事委細別帳二有之故略之

一 御役被仰付候後御分限帳掛り大目付衆江明細書差出候

一 御役被仰付見習之内ハ其当日ハ三日之内麻上下、四日目当番

ハ相同候而新役之者裏附上下御差図之上二而着用之事

一 初御番相濟候迄ハ小紋之裏附上下着用之事

一端午已後二候得者^(褌) 戾子肩衣薄袴二候故小紋之戾子肩衣嶋之

袴二ても不苦候、尤初御番已後者何二而も不苦候事

一 初御番者麻上下、西丸同断、式度目ハ裏附上下着用之事

一 御本丸初御番式度目迄ハ古役之衆添二被出候、三度目ハ添無

之西丸者初御番計添有之候、式度目方添無之

一西丸初御番以前西丸江師匠之当番之節為見習罷出候、尤裏附上下着用之事

但西丸為見習罷出候義御本丸当番江以手紙申遣候、尤師匠江も其段申遣候

一御本丸初御番之節添二被出候人江其前日押合使者を以明日添二御出被下候様申遣候、押合并書役等茂被召連廻状等御認させ被下候様二申遣候

一新同役被仰付候而御礼日等二而外同役何茂罷出有之候ても年寄衆江御礼者当番壺人二而申上宜候、平日ハ尚以右之通二而右御礼年寄衆御入かけ於中之間申達候、其節間違候ハ、御退出二御礼申達候、尤時計之間口江出向居り御礼申上夫御跡二付参り例之处二而翌日之儀伺候

但右之御用番御礼申上候外之年寄衆江ハ不申上候とも不苦候、退出御礼申上候義出向申上候事間違候ハ、御跡二付参り御礼申上、其上二而翌日之義伺候儀も有之候由

一新同役衆御番入之儀御番一順見習濟御精進日二候へ者其翌日

方御番入有之候、右御番入之儀古役方同役江日限先ツ内談有之相濟又々同役一統江表立手紙二而申談有之、何茂存寄之有無承合之上其月御番割出候方江談有之御番割出候事

一新同役初而披露之儀前二ハ御役儀之御礼被申上候日ハ披露無之其後之御礼日初披露有之候事二候、近来者御役義之御礼之日直二初披露有之、右初而御披露相勤候段から御用番江当番方申達候事之由

一新同役初御番二度目御番添罷出御用番退出二翌日之伺候刻必添番も附添承候二も不及候、跡二付参り候故差添候様二成候段土佐殿申伝二候事

延享元七月廿八日 当番 戸田越前守

一伯耆守殿因幡守殿御役儀之御礼相濟初而御披露被致候、両人之衆中之間二而御礼被申上候事

一新役衆御本丸初御番前日たとへ御使先いり候共御番順先江繰外同役相勤新役衆ハ御使先不被勤候而可然由二而、二度目御番も添有之候間右添有之候内ハ御使先何たり候共先江繰罷出可然旨二候、西丸御使先も西丸初御番前ハ御本丸二准シ不被

勤候義可然由二候、右寛延二巳八月朔日土佐殿申談候

一酒井信濃殿寛延四未八月十一日御奏者番被仰付、古例有之候

二付御役被仰付候日方十一日同廿一日初御番被勤候事

一右御番一順見習十八日迄二而相濟候得共御番入迄ハ見習被出可然旨土佐殿江金兵部殿相談有之、十九日廿日も見習被出候事

一寛延二巳八月十五日朽木土佐殿方被差出候申合左之通

一此間申談候通り新役之内者勿論三四年過候而も一度も御番無之義有之候ハ、非番二ても御出被成様子御覽被成候様可仕旨、去ル十二日相模守殿御咄し申候所御承知之由被仰聞候

一新同役三日見習相濟候ハ、誓詞不濟已前二ても伺近例之通

平服二可然候、夫迄二誓詞も濟候ハ、誓詞茂濟候段申加へ

可然由寛延二巳年九月二日土佐殿申談候事

但見習者被仰付候日方三日之事

一新役被仰付候而当番方誓詞願書別紙認差出候事左二記

覚

何誰

右御役儀誓詞之儀奉願候、以上

月日

宝曆十四申年二月十五日

当番名 牧野越中守

一周防殿三阿弥を以板倉美濃守土岐美濃守御役儀御礼願書明日差出候様当番越中殿江被仰聞、其段兩人江通達有之候事

一翌十七日御礼願周防殿登城前罷出差出申候、御日柄二付御役儀御礼ハ不申上候

但御役儀御礼ハ追而誓詞被仰付候節申上候事

御役儀御礼願書左之通

御席之節御役儀之御礼申上度此段奉願候、以上

二月十七日

土岐美濃守

一非番御老中江之御礼之儀ハ初御番相濟候後罷越候事

明和二酉年十月廿八日

当番 久世出雲守

一誓詞伺当日当番出雲守より差出候事、明日誓詞被仰付候旨即日御同朋頭を以御書付出候、此段於御城相達候、依之翌廿九日

主水殿対馬殿誓詞有之候事

同廿九日

一今日誓詞二付右近將監殿江兩人被相越候節御役儀之御礼被申上、且御役儀御礼願書も直達被致候事

同年十一月七日

一初番添之儀師匠二而不相勤事之由申儀も有之候処土佐殿不苦由加遠江殿江被申候由、依之今日伊賀殿主水殿初番添被勤候事

同年十一月十七日

当番
戸田長門守

一明日西尾主水殿御本丸二度目当番二付添之儀伊賀殿相談有之、長門殿被勤候

一添之節ハ添勤候者方茂古キ衆江ハ被出候様申遣候、尤師匠よりも古キ衆江ハ被出候様頼被申候事

一二度目御番相済申候て助順居残順江入申候事

但助順ハ末江出し居残順ハ筆頭江出シ申候事

明和四亥年十二月朔日

当番
牧野越中守

一新同役御役儀之御礼申上直ニ御披露相勤候節ハ御届入申候、其後初而御披露相勤候節ハ御届無之事

一家督之御礼等有之節新役之内御刀ハ古役江頼候、古格之処今

日ハ御人少ニ付備前殿初披露之日御刀被相勤候事

明和五子年七月十日

当番
土岐美濃守

一今日太田備後殿牧野豊前殿為見習被出候処御三家方江以上使雲雀被進候付当番居残申候得共、先格之通見習之衆ハ老衆退出候者直ニ退出被致候事

例

宝曆十二卯年十二月十四日松平能登殿牧野遠江殿新役之砌増上寺方丈江寒氣御尋上使有之、当番居残

明和酉年十一月二日西尾主水殿増山对馬殿新役之砌以上使

御鷹之雁拜領之面々有之、当番居残

明和五子年七月十一日

初当番
太田備後守
添番
内藤大和守

一明十二日尾州濃州勢州川之御手伝之衆家来拜領物有之由桑原善兵衛被申聞候付拙者可罷出候

但新役二而ハ二度目御番等も相済助順御使先等も相心得不申候而ハ右拜領物添被出候儀ハ如何ニも有之候事、尤翌十

二日拝領物有之備後殿添被相勤候得共以来ハ評議も可有之事

寛延二巳年八月十五日申合書付之内左之通

一御普請御手伝相濟家来大勢拝領物之節ハ非番罷出有之候ハ、一兩人如先格可罷出候、右之外非番ハ芙蓉之間ニ可罷在候

一此間申談候通新役之内ハ勿論三四年過候而も一度も御当り無之儀有之節者非番ニ而も御出被成様子御覽被成候様可仕旨、去ル十二日相模守殿江御咄申候処御承知之由被仰聞候

巳八月十五日

朽木土佐守

明和四亥年十月十三日

一明日増上寺文章院様御靈屋江御参詣被仰出候付土佐殿被申聞候者、丹波殿御礼前之処明日御参詣有之候、新役御礼前御目見之例無之二付序有之右近將監殿江被伺御成之節御目見還御之節御白洲江者丹波殿見習被出二不及旨被仰聞候旨土佐殿被申聞候付、其段丹波殿江美濃守申達候

明和五子年七月十三日

一明十四日紅葉山惣御靈屋江御参詣被仰出候、本多豊後殿未初御番不相濟日々登城万端当番ニ准シ候ニ付明日予参二者不罷出為御目見罷出候心得ニ罷在候、先格無之候付難相決先右之心得ニ罷在候段右京大夫殿江土能登殿以順阿弥無急度被相伺候処、其以後以同人御殿江罷出見習茂予参ニ罷出候茂同様ニ候得者予参ニ罷出候様ニと御指図有之候

明和五子年七月廿九日

当番 本多豊後守

一今日御手伝家来於檢之間拝領物有之候ニ付添之儀昨日大炊殿廻状ニ同人可被出所御用ニ付豊前守被出候様申遣候旨申来候、然処今日豊後守二度目御番之事ニ付当番添共新役之儀ニ付前方美濃守新役之節者新役同士ハ手離前ハ不相勤繰替可然旨土佐殿被申聞候事も有之二付、今日被出候同役衆申談之上大炊殿廻状追廻状ニいたし大炊殿添ニ被出候積りニいたし候、尤今日之添ハ前日当りニ而其外ハ頼合之先格ニ付大炊殿御用有之難勤詰合越前殿罷出候、御目付水野要人三人拝領物罷出候旨申聞候間今耆人ハ新役ニ而も苦ケ間敷旨申談豊前殿被出候事

火事之節之部

一御城風上之節ハ当番早速罷出候、裏附上下之上ニ羽織計着いたし候、乍去其節之様子次第野袴着致罷出候

享保七寅正月廿一日火事之節同役不残踏込着いたし罷出候

一非番之ものも御城風上ニ而候得者不及承合段々罷出候

一御城外ニ而も大火ニ可及様子ニ候得者当番ハ罷出候、尤平服非番ハ其節之申合次第罷出候事

一御曲輪外之火事ニ而も御曲輪内江入候様子ニ候へハ非番も見合罷出候事

寛延二巳正月元日夜増上寺近所出火、御用番御老中方登城

当番牧野因幡守其外同役衆何茂羽織着いたし罷出候事

一当番ニ而罷出候とも御用番御登城茂無之様子に候得ハ部屋ニ而見合罷出候事

一火事屋敷近所歟風下ニ候ハ、助番之方江頼遣屋敷之火防申候、助番之方江も火事近所見へ候得ハ火元へ遠キ次之番江頼遣候事

正徳六申六月十日当番安藤右京亮屋敷近所ニ出火候ハ、御

城江罷出ニ不及屋敷之火防可申旨井上河内守殿被仰聞候

正徳六申年六月十日

当番
安藤右京亮

一河内守殿御呼候而近江殿遠江殿拙者江被仰聞候ハ、只今まで火事之節仲間登城候付右ニ茂段々出仕候得共、御城江風並悪敷節歟又ハ及大火増火消なと被仰付候御用之節ハ御月番計御出可被成候間何茂右ニ准し候様ニ可被致候、且又地震之節も小壁なと落候程之儀ニ候ハ、御用番計可有御登城候、雷なと之節も御曲輪之内江落候ハ、是又御用番計御出可被成候、右之通ゆへ御用番之御老中方ニても大方之儀ニてハ御出不被成候筈ニ候間准右之様為心得被仰聞候由

一供ニハ火事様子次第装束為致候事

一旧格ハ百人番所迄罷出御用番御登城後御城江罷出候

宝永年中ハ昼夜ニ不限部屋迄直ニ罷出候事

一火事方角見定かたき時ハ先ツ下馬迄罷出非番同断宅より野袴着罷出候而不苦候、昼ニ而候得ハ部屋迄罷出御用番登城之有無承り登城無之候ハ、退出可仕事、夜ハ大手桜田御門外ニ而見合可申候事

但當番ハ火事之趣ニ而御用番よりはやく候ても部屋迄罷出

候事

一 押合役書役之ものハ宅方先へ出、下馬ニ而待合召連部屋まで

可罷出候事

一夜ルて候得者中之間迄手挑灯持罷出候事、火事様子次第刀も

中之間迄持罷出候事

延享四卯四月十六日二丸出火之節同役ハ何茂中之間迄刀持

参之事

一 享保六丑年三月五日

追而

助番
丹羽式部少輔

一 先年松平備前殿其後石川近江殿居屋敷類焼之節御番一ツハ

助二成候由、主水正因幡殿江相談候之由ニて牧野因幡殿よ

り申来候、例有之候付松平对馬殿居屋敷類焼ニ付今日之助

番拙者相勤申候

一 享保十七子年三月十八日

助番
稻葉佐渡守

今日秋元但馬殿御本丸當番之処居屋敷類焼ニ付退出、拙者

助御番相務申候

同日

当番
秋元但馬守

一 今日大火ニ付同役衆追々被致登城候、然処拙者居屋敷危く候

故佐渡殿江御番相頼其段伊豆殿江御断申達し七時退出候

一 就右佐渡殿居屋敷方角出火ニ付猶又助之儀玄蕃江相談暮時退

出いたし候

同日

助番
松平玄蕃頭

一 今日助御番佐渡殿ニ候得共屋敷近所ニも出火之由ニ而被致退

出、今日助御番拙者相勤申候

一 今日伊豆守殿六半時退出ニ付罷出候、已上

一 宝曆十三未年七月十四日

当番
土屋能登守

追而

一 當時同役衆四人火之番相勤候ニ付右之衆當番之節差詰場江罷

出候程之出火有之候ハ、其節急助之儀助順之方江早速可申遣

候得共、其時ニ至り助先之方遠方之衆も可有之候得者急成間

ニ合兼可申間介順ニ貪着無之昼夜共ニ先御曲輪内其外最寄之

衆江助之儀申遣無彼是助御番之心得ニ而罷出、夫方助順之方

へも被申越順々衆被出候ハ、介御番可被相勤候、右ニ付火之

番之衆兩御丸当番突合候節ハ兩方より助之儀申來候事も可有之候、同様之差支又者留守等二候ハ、直二其使先方より近所之衆ハ被差越候様ニと取計可然旨何茂申談候

一右様出火之節詰場有之同役衆御使先二当り候得者其次之御番方御使先持申候、其翌日も自分之御使先もやはり持申候

明和三戌年三月廿二日

助番
土岐美濃守

一昨日外桜田辺出火二付為伺御機嫌同役衆被出候

一土佐殿被申聞候者出火之節昼者中之間江刀持候二不及夜者刀

挑灯持候事之由、但先年二丸出火之節者昼二候得共刀持候旨

同人被申聞候

一出火二付当日伺御機嫌候ハ至而之大火或ハ御曲輪内至而之近

辺之節者当日相伺、外御曲輪内出火候ハ翌日伺御機嫌候旨土

佐殿被申聞候

一今日紀伊殿江老衆扣請二付相伴被相越候衆、老衆廻り後二被

相越候得者直二熨斗目麻上下二而伺御機嫌有之候得共、廻り

前被相越候段今日者伺御機嫌不被申候、右二付取計等無之

明和五子年正月十三日

居残御番
牧野越中守

一小菅筋江為御鷹野被為成

追而

一八時過葛西辺出火二付右近將監殿初御老中方登城二付拙者

儀中之間江罷出候、八半時過退出候而御座候

明和五戌子年四月十五日

当番
大岡兵庫頭

一昨日柁町辺出火御郭内之儀二付今日御機嫌伺之儀当番兵庫殿被聞合候処、御三家方使者も不被差上候間今日ハ伺御機嫌無

之候

出火之節心得

一当番之節出火有之御老中方登城二候ハ、早速致登城、若詰場

江相詰候程之儀二候ハ、早速人数ハ指出、尤助先之方江早々

助番申遣其外同役衆最寄之方江助番申遣、誰ニても申談代り

合詰場江罷出候、但助先之者罷出候与助順之通代り合助番相

勤候事、且押合役之者ハ助番之押合役罷出候上二而是又代合

申候事、其節御用番江以御同朋頭詰場江相詰候段御届申達候、

若御同朋頭不居合候節ハ以御用部屋坊主申達候

一当番之節ハ詰場江火事之様子風並之善悪二無差別何レニも致

登城候而助番と代り合候上詰場江罷出候事、万一同役衆一向

二登城無之代り合不相成候節ハ見計候而御用番江相伺候儀ニも可有之事

一西丸当番ニ而登城いたし詰場江相詰候節尤助番申遣候而代り合罷出候、其節当番之御目付衆江詰場江相詰候段申達候事

但先達而人数差出候節ハ届等ニ不及相詰候上ニ而留守居之者御徒目付江其段申達候事

一火事之節昼ハ刀ハ御屋敷江不持刀番ニ渡置候事之由夜中ハ刀手挑灯を持御屋敷江罷出候事之由、乍然先年ニ丸出火之節者昼ニても刀御屋敷江持上り候由、尤御屋敷ハ中之間江相詰申候

一当番之日火事屋敷辺り候節、御城江出候程之時ハ先ツ助番又ハ次之番江成共方角遠キ方江御出被下候様ニと使ニ而早々頼遣候事

一正月七日迄之出火ニ付登城之節者熨斗目麻上下之上江火事羽織着用之事

雷地震之節心得

一大雷ニ而伺御機嫌罷出候例無之

但格別之大雷ニ而候ハ、下馬江使遣し御用番御出候ハ、当番可罷出、非番も右ニ可准申事と土佐殿被申聞候

一地震之時家之内難罷在程ニ候得者出候筈ニ候、但地震之強弱ニ了簡可有之事

一当番非番共ニ手水鉢水こほれ候程ニ候ハ、上下之上ニ火事羽織着罷出中之間迄刀持參、夜者挑灯持席迄罷出候事

一供二者火事装束之事

但黒田大和殿被申候旨地震之節火事装束供二者同様之由、不審ニ候間席茂有之候故伯耆守殿江相尋候処伯耆守殿被申候者、夫者埒も無キ事ニ候、地震ニ火事装束いたし候ハ変ヲ

重ル様ニ而候、自分共ニ平常之着服供之者も常之通羽織袴ニ而召連、若地震之節火事装束ニ而被出候衆も候ハ、却而

咎ラレ可申儀も可有之哉と被申候由

一元禄十六年十一月廿二日夜大地震之節松平弾正忠參勤之御礼前ニ候得共為伺御機嫌下乗迄罷出同役江相談被申越候処、登

城可有旨当番青山播磨守被申遣登城、同役一同二於中之間被
伺御機嫌候事

一元禄十六未年十一月廿六日

当番
黒田甲斐守

地震之節詰所御番所明夕候而成共向寄宜御庭江出候而不苦候
間左様相心得可申候、此段組支配有之面々者其旨可申渡由、上
意之旨有合候布衣已上之諸役人江於中之間御老中列座佐渡守
殿被仰渡之、且又火之元之儀弥入念候様二可仕旨被仰渡候

追而

一今日上意之趣被仰渡候付御老中御退出之刻於中之間御礼申
上可然旨若年寄被申候由承候二付伊賀守殿飛彈守殿彈正少
弼殿申合御礼申上候、今日不有合同役中御礼之義大目付衆
江承合候之処、同役惣名代之御礼二而事済可申旨若年寄衆
被申候由二御座候、併明日為伺御機嫌被成御出候ハ、被仰
合御老中方不殘成共又者御用番江成共御礼被仰上候而も苦
夕間敷哉と寺社奉行衆杯も被申候、且亦地震之節雁之間芙
蓉之間中之間二相詰候衆中中奥衆御数寄屋方ハ御黒書院御
庭江出申筈之由大目付衆被申聞候

一宝永三年九月十五日

当番
松平彈正忠
西丸当番
鳥居播磨守

夜四半時過地震暁迄少宛震老衆登城同役衆為伺御機嫌不殘登
城、池田丹波守忌中二付伺御機嫌使者御用番江指出候

一宝永三九月十六日

当番
三宅備前守

御本丸西丸江伺御機嫌高家衆詰衆同役衆登城

一宝永四年十月朔日

当番
青山播磨守
西丸
松平彈正忠

夜八時過地震為伺御機嫌同役衆不殘登城、西丸江茂罷出老衆

江使者遣

一宝永四年十月五日

当番
青山播磨守
西丸
松平宮内少輔

朝六時過地震二付為伺御機嫌同役衆不殘登城、西丸江も罷出

美濃守殿老衆右京殿伊賀殿越前殿も被出候

一宝永七寅年八月廿二日

当番
本多彈正少弼

四時地震二付松平兵庫頭池田丹波守為伺御機嫌登城

正徳六申年六月十日

当番
安藤右京亮

一 河内守殿御呼二而近江殿遠江殿拙者江被仰聞候ハ、只今迄火
 事之節仲間登城候二付右ニも段々出仕候得共、御城江風並悪
 敷節か又者及大火増火消など被仰付候御用之節者、御用番計
 御出可被成候間何レも右ニ准候様ニ可被致候、且又地震之節
 も小壁ナト落候程の義候ハ、御用番計可有御登城候、雷ナト
 之節も御廊之内江落候ハ、是又御用番計御出可被出候、右之
 通故御用番之御老中方ニ而も大方之義ニ而者御出不被成候筈
 二候間准右候様為心得被仰聞候之由、委細其内面上ニ可得御
 意候

享保二酉年正月七日

当番 松平宮内少輔

一九時余程地震ニ付近江殿申談良阿弥ヲ以山城殿江伺御機嫌候
 処、御機嫌克被成御座候由同人を以被仰聞候

一 地震ニ付御本丸西丸当番之時者御用番御登城有之候得者罷出
 候、非番之時ハ同役罷出候段承候得者登城途中迄罷出其時之
 様子次第、尤昼夜ニ限り不申候事

享保二酉年正月廿三日

当番 阿部飛驒守

一 為伺御機嫌登城退出老衆江罷越此節日々地震付為伺御機嫌同

役衆日々登城

寛保三年閏四月廿五日

当番 朽木土佐守

一 例刻致登城候所四半時頃余程地震いたし候而中之間江罷出候
 明和四亥九月晦日 助番 牧野越中守

一 今日老衆登城二付中之間ニ罷在候節通例より余程つよく長キ
 地震ゆり候処、大目付衆江も内々かけ合候処伺御機嫌候御沙
 汰ハ無之旨被申聞

一 地震ニ付伺御機嫌之儀御三家方御城附御同朋頭を以伺も有
 之候処不及其儀旨御沙汰之由、溜之間詰も被出候旨先番ハ
 参候処右之御三家方之御沙汰之趣ニ付不被出候よし内々承
 ル

差扣之部

- 一 於御城差扣相伺候節部屋二扣罷在同役兩人罷出差扣之儀御同朋頭を以御用番江申込於新番所前溜相同、伺候者中之間二扣罷在当人八部屋二扣罷在候、御用番溜江罷出候様以御同朋頭被仰聞候、兩人罷出差扣不及段被仰聞候得者御礼申上直二部屋罷越右之段申達候、当人御礼二年寄衆江參り候二八不及候
- 一 御目通差扣等ハ先ハ於御宅被仰渡候、為知奉礼入可申候、若於御城被仰渡候ハ、其趣当番廻状可有之候
- 一 右二付当番日添入可申候、当人方御番日前日二添順江頼遣候事二候、前日之当番廻状二書入候二不及候
- 一 右当番日廻状追而二誰添被出候段認候
- 一 右差扣中一紙半切等名前認方先例不相知候
- 一 御目通二而無之差扣ハ御番操詰二可相成候
- 一 御目通差扣被仰付候得者助順之名を除候、享保十七子年十二月先例有之候
- 一 御目通差扣御免被仰渡候而為知奉礼可有之候

貞享二丑年二月十八日
当番
土井周防守

一 明日加番御勤二付若一紙目錄御認被成候ハ、每茂当番与肩書有之候得共、此度之二八御認候方如何二有之候間貴様御名計二而肩書ハ御無用二被成可然由、今日朽伊予守殿松備前守殿松因幡守殿堀豊前守殿江も登城候而其通拙者方方可申通旨被申候

但水野右衛門太夫御目通遠慮中二付

当番
松平因幡守

貞享二丑年四月廿六日

一 水野右衛門大夫遠慮御免付加賀守殿山城守殿登城掛ケ二同役申合、一同二右衛門大夫遠慮御免被遊仲間之者共迄難有旨御礼申上候事

正徳二辰年八月廿五日

当番
松平兵庫頭
添番
高木主水正

一 戸田玄蕃八朔之御祝儀差合二付延引今日以使者差上之於松之間兵庫頭謁、一紙目錄二者主水正致名書大久保加賀守殿江差出候

此節松平兵庫頭御目通遠慮二付添御番高木主水正罷出候、右二付一紙目錄名書主水正名前相認、尤当番共添番共不致

片書高木主水正与計相認候、加賀守殿江差出候儀ハ何茂申
談之上兵庫頭直二差出候

正徳二辰年八月廿九日

当番松平対馬守
添番朽木民部少輔

一松平周防守在着二付為御礼以使者一種一荷差上之、京極若狹
守右同断二付以使者二種一荷差上之如例於廊下対馬守謁、一
紙目錄二ハ民部少輔致名書大久保加賀守殿江差出候

此節松平対馬守御目通遠慮二付添番朽木民部少輔罷出候

享保二酉年五月七日

畠山下総守
中条対馬守

右増上寺御参詣御着座之節不調法之儀有之二付遠慮被仰付候
旨於芙蓉之間御老中列座山城守殿被仰渡之

大友因幡守

右同趣二付遠慮被仰付之引込罷在二付織田讃岐守彼宅江罷越
可申渡之旨於同席御同人被仰渡之

一御三家松平加賀守何ぞ御礼二登城之時御老中退出之後二而御
奏者番懸御目候様御老中御申之時者添番之者可懸御目候由、

右之趣共大久保加賀守殿江直二松平対馬守相伺候処、対馬守
兵庫頭御目通遠慮之内右之通可仕旨御申候由八月廿五日兵庫
頭方申越候、右兩人当番之節者一紙目錄二而も半切二而も当
番之名者不相認添番之名を相認候筈二候事

但寛保亥年十月十二日堀田相模守本多紀伊守御目通差扣被
仰付、同十二月朔日御礼前新番所前溜二而御免被仰渡披露
等も被相勤候、西丸御番一度も不被相勤候助二相成候故一
紙半切謁書等之例不相知候

元文五申年閏七月十五日

当番牧野越中守

一甲斐殿御披露建部内膳右名出し承候二付左近殿側方被仰候、
其内甲斐殿も内膳披露被申候得共左近殿側方被仰候事二候間
被相伺可然と申談候、伊賀殿茂森川主水少々つかへ候二付申
談候処早速御披露被申候間伺二及間敷と申談候、当番方被相
伺候処何之御沙汰も無之旨被仰候由二付何茂致退出候事

寛保二年戌十二月晦日

一昨夜中永伊賀殿より以使者被申越候ハ、永井外記改易被仰付
候二付差扣之儀被相伺候処今日右伺書差出候様二と左近殿差

図二付御番相勤かたく、依之今日御番被相頼土佐殿西丸当番被相勤候事

寛保三亥年三月朔日

一今日備中殿松平左兵衛佐家来之披露左衛門佐と被申候と年寄衆御聞候旨備中殿江順阿弥申候、備中殿ハ左兵衛佐家来と披露被致候与被申候、然其上二茂左衛門佐と御聞被遊年寄衆も同様二何も左様被承候間紀伊守殿并伊賀殿江丹後殿被仰聞候間備中殿差扣之儀被相伺候、右二付何も中之間二罷在候差扣二及不申旨伊予守殿備中殿伊賀殿御呼被仰聞候者重而之儀入念候様二被仰渡候由

寛延三午年三月三日土佐殿申談相極候趣

一月次御礼日等当番之者出御差懸り何ぞ間違有之、差扣等同候程之儀二而俄二当番之代り入候節ハ翌日之当番之方右代り相勤可申候、翌日之当番西丸御番等二而詰合無之候者御番之順二翌々日之当番之方右代り相勤可然候旨申談候

寛保三亥年五月十五日

当番
松平豊後守

一相模殿足輕三人不埒之儀有之追放被仰付候、依之御目通差扣

候様二仰渡候付先例も有之候間相模殿御番之節者御本丸西丸共二添罷出候先格也、相模守殿今日不快二付登城無之候間越

前守右之例書被相達候筈二候、尤御用番江も届不致候由候事

一寛保三午年十二月朔日三奉行御目通差扣御免之節西丸江者当御祝儀計寺社奉行衆被出御免之御礼者不申上候、右為御礼老中若年寄衆西丸方共二不残并加納遠江殿江被参候由、大岡越前殿承合記置之

一寛延四未年九月十四日松平周防殿從弟中根平十郎御預ケ被仰付二付周防殿御目通遠慮被仰付候、御番者被勤候故御番割二入有之、助ハ不被勤候二付助順を除候而土佐殿方御番割同十五日被出候

一右十五日青山因幡殿西丸当番之処御用有之御本丸江被出候故難被勤、助之儀助先長門殿江十四日夕申来候へ共長門殿二も御用有之難被勤、次之順周防殿二候処右之通遠慮被仰付候故未助順除不申内二候へ共難被勤、從長門殿直助之儀其次遠江方江申来十五日助御番相勤候

土佐殿承合宝曆元未年十一月廿八日直右衛門を以答申来候

明和四亥三月九日

織田対馬守

右一昨七日円寿院御門跡御饗応之砌御銚子両度可差出処差留

一度差出不調法之至候、依之差扣被仰付候

前田出羽守

前田伊豆守

右同断御銚子両度可差出処一度差出候段不心得罷在不念之至

候、依之御目通差扣被仰付之

酒井備中守

松平市正

鷲巢式部

右同断御銚子両度可差出処一度指出不調法之儀、依之御目通

差扣被仰付之

一右二付御座席奉行出雲守右近将監殿江差扣可相伺哉之旨御内

意伺候処其儀不及旨被仰聞候付伺無之事

雜之部

一於中之間伏見奉行出席二候ハ、間ヲ明ケ上之方江当番着座之事

一両丸共調合ハ当番添番二而調合外同役ハ不及罷出候

一暮之御褒美被下候節初而ハ焼火間御杉戸はづれ候事、二日目

ハ御右筆部屋本間之戸障子も不残はづれ本間之内壺間しまり

御屏風圍二相成候、尤御杉戸もはづれ候事

右御座敷拵候而も当番平日之通無差別候事

一月次講釈初ハ当番ハ老衆登城迄平服揃後麻上下被着替、講釈

相濟候而又平服二相成候事

但外席江老衆被出当番出席二候へ者講釈聴聞之儀大目付衆

江断其節ハ平服二而麻上下不着替事、尤大目付御目付衆も

講釈聴聞節ハ麻上下被着替候事

一大納言様小菅江御成御止宿中者西丸当番之者ハ八ツ打候已後

退出いたし候

一国持衆方振舞之時被扣候而も近キ由緒ハ格別大概ハ断申遣候

方宜事

一途中二而若年寄衆逢候節駕籠を不留二可致会釈事

一紅葉山御太刀渡之儀前広二被仰渡弥相勤候得者其段二者日々
当番江前日申遣候、此儀十七日当番方申遣候事

一土御門より二月巳之日の御被六月晦日名越之御祓惣而御祓御
札守并御代官面々方上り候五菜者、一紙目錄進物帳并押合帳
二茂不付

前々此通二候得共近年ハ進物帳二付被申衆も在之候、尤押
合帳ニも付申候、畢竟兩様之内何連ニても不苦と相聞候得
者右之類御進物帳ニも不付押合も無之事

一五節句者御老中廻り無之使者も不出候事

一婚姻之被仰渡等自分二付申候事之御礼者於中之間御礼不申上
候事

一御礼衆差掛り急病人有之時者大目付中取計被申、御前二而急
病人有之時者例未無之故格不知候得共時宜ニより披露人取計
可有事

一宝永六年十月五日当番三浦壱岐守江向後順阿弥珍阿弥伝阿弥
三阿弥四人頭被仰付旨若年寄被申渡候旨、為心得若年寄衆被

申聞候

一元禄四年未十二月九日牧野備後守亭江御成之節息式部初而御
目見右御太刀目錄表書之儀御本丸当番牧野因幡守江申来候、
例無之不相認候、同晦日於殿中同役申談候処重而ケ様之類表
書調可然与申合候事

元禄九年酉六月十六日

当番
朽木伊予守

一貝塚卜半以使者水之粉献上仕候、使者申候者每度御奏者番方
江懸御目候由申候、伊予守被申候者終二使者二逢候儀覺不申
候、尤一紙二茂及不申候故逢不申候由被申候、御進物帳二者付
候由

元禄十五年午三月十四日

当番
松平弾正忠

一一位様御位階之為御祝義山王神主樹下民部方以使者干鯛一箱
差上之、使者申候者寺社方松平日向守殿江相伺候得者中之口
江持参御奏者方御家来江相渡候得者御差図候由、尤一紙半切
不及候、乍然御帳二付可申哉と飯高七左衛門江承合候処輕キ
義御帳二付候二茂不及候よし指図也、致押合計候

元文元九月八日

助番
朽木土佐守

一 還御伺御機嫌御門番衆被出候ハ、今日者為待七置候様と中務殿被仰候旨甚阿弥申聞候、御目付加藤弥次郎御門番衆被出旨被申候、其趣順阿弥江無急度被申上候様被申聞候、無程順阿弥參中務殿御逢被成趣二候由申候、依之弥次郎江心得二右之段咄置之処御門番何方二被居候様二可致と被申候、帝鑑之間二被居可然候、老衆御逢事終二無之何之席二而被逢可有之も不相知候、弥被逢候哉後程伺可申候、其節席々之義も伺可申達段其後菊之間二而中務殿被逢可有之旨被仰候間、朽木様紀州并弥次郎江其段申達相濟候事

元文三十二年十八日

当番 戸田越前守

一 今日官位被仰付候面々大勢有之、侍従四品者壱人ツ、被仰渡諸大夫之面々不残一同二罷出被仰渡相濟、一位様月光院様御願二付諸大夫被仰付候面々江者別段壱人宛罷出被仰渡候事

元文四未三月廿日

当番 戸田越前守

一 西丸江名代之者御礼罷出候儀遠国留主名代も出候二不及都而当人江被仰渡候趣相達不申、西丸江御礼二罷出候義有御座間敷事二奉存候、為御礼御老中方右京大夫殿能登守殿江も相廻

り候義二御座候間名代之面々万石以上万石已下共罷出申間鋪義と奉存候

午九月

大目付

一元文四未年六月十三日於御本丸御暇被下候面々於西丸も拝領物被仰付候節、西丸当番只今迄平服二有之候得共向後麻上下致着用候様左近將監殿御相談之上能登守殿被仰聞候由、当番松平備中守江松前安芸守被申聞候

一 阿蘭陀人拝領物之節伊豆守殿於大広間阿蘭陀人致拝領物候節四之間江上り御老中方列座之末二罷在候様二前々伊豆守殿二も左様二被成候、近頃御縁類二罷在候間右之通致候様二と被仰聞其通二候、其已後於羽目之間猶又右之通被仰聞左近將監殿初御仲ケ間方御同意被仰候間向後右之通可致由被仰聞候

一元文五年正月八日

西丸当番 永井伊賀守

能登守殿方以泉阿弥御渡候御書付

正月

十七日

四月

紅葉山御宮江竹千代様方御名代老中右京大夫能登守之内參

拜

御進納之

御太刀

御奏者番

右之通例年可被相勤候

延享元十二月十五日

当番
青山伯耆守

一去ル十一日日記方江之書付大岡忠四郎支配神尾助三郎銀馬代
員数相違二付吟味之内延引、右相济今朝日記方江書付石河土
州江相渡候、一昨日之東本願寺先住遺物者進物帳二付申間鋪
与何も申談候事

延享二年五月十九日

当番
朽木土佐守

一昨十八日方御用部屋御修復有之二付西湖之間御縁類御用部屋
二相成山吹之間御右筆部屋二成候由、羽目之間入口屏風立奥
二成候、中之間上之方屏風立御茶所二相成候間例方少シ下り
罷在候事

一寛延二巳年八月四日

当番
朽木土佐守

相模守殿被仰聞候者昨日菊之間跡目被仰付候節御縁類江当
番添番之外非番茂罷出候、ケ様之義者聊之事二候得共諸事古

格二致相違候而者如何二候間、向後何事も古格之通申合置可
然之旨被仰聞候付、何も相談之上向後非番出席之義申合同十

二日相模守殿江無急度被申達候

一寛延二巳八月申合左之通

一惣出仕之節只今迄之通席々江可罷出候

一公家衆御対顔御返答之節只今迄之通大広間四之間江可罷出
候

一公家衆御暇之節柳之間江両三人可罷出候

一御礼日御白書院御縁類二而被仰渡并拝領物之節只今迄之通

溜二可罷在候

但四月六月御暇之衆拝領物之節も可罷出候

一惣而芙蓉之間拝領物之節只今迄之通御障子際二可罷在候

一御普請御手伝相济家来大勢拝領物之節者非番罷出有之候

ハ、一兩人如先格之可罷出候、右之外非番者芙蓉之間二可

罷在候

一此間申談候通新役之内者勿論三四年過候而も一度茂御当り
無之儀候ハ、非番二而も御出被成様子御覽被成候様可仕

旨去ル十二日相模守殿江御咄申候所御承知之旨被仰聞候

八月十五日

朽木土佐守

右十五日被相達候節口達有之候者、非番二ても様子見申度被出候時当番と並不申其席之外二而見候様可然之旨相模殿思召之由被申聞候

一寛延三年二月朔日同役中江為心得土佐殿被相渡候書付

一去ル已八月四日拙者御本丸当番二付罷出候処相模守殿被仰聞候者、昨日菊之間跡目被仰渡候砌御縁類江当番添番之外二非番之者も罷出候事御意無之、昨日杯之儀ハ聊之儀二候得共古格二致相違候而者如何二候間、向後諸事古格之通申合置可然之旨被仰聞候趣委細其節書付進候通故此度者荒増二相認候、猶又御扣無之御方ハ可被仰聞候、尤大概絵図も致置候、御覽可被成候者可進候

一十一月十五日伯耆守殿拙者御呼被仰聞候者、惣而御礼衆御披露相濟御取合有之候已後立ケ急之衆も有之又御取合無之礼も立急候者御披露仕候、同役共方罷立候様二心附申候様二何茂申談置候様二被仰聞候、其以後十一月廿八日又候伯

耆守殿被仰聞候者、御礼衆立急候節罷立候便二申聞候者随分外江きこえさる様二可申聞候由被仰聞候

一旧冬相模守殿私江被仰候者、先頃御礼日当番之方月番年寄衆退出候間合不申候衆有之、同等不相濟候月次御礼日杯者退出早キ儀相知候事二候、御礼過中之間二不明様二罷在可然趣惣而中之間二同役罷在候儀已前と違候儀も有之由被仰聞候、此義ハ都而御礼衆有之日稽古相濟揃前二候者直二中之間二並居可然候、其外同役一同二罷出候日なと年寄衆登城之節中之間二御並居可然候、且又平日茂無間違退出之節急度中之間江御出可然、尤書面之外二茂可有之哉急二者存当り不申候、何レニ茂其節御相談被成可然候、随分被添御心候様二可被成候

一又此間相模守殿被仰聞候者頃日西丸当番之衆相模守殿登城前御逢二御越候御方有之候、ケ様成義者曾而有之間敷儀其上若登城之間二合不申候而者何共不相濟以之外之事、相模守殿御身分二茂不相濟右之通之儀二而者御出被成候而茂忝共不被存との事二候、已後ケ様之儀無之様二何茂得与可申

談旨被仰聞候、且当番日退出二も外勤被致候衆も有之様之御口振茂相聞工候間先達而私方書付進候趣二弥御心得可被下候、已後能々被入御念万端被附御心御師範方御聞合又ハ何茂御相談被成候様二と奉存候、私江度々彼是被仰聞候処得と申談も不仕様二相聞候而致迷惑候

一御当番日無扱御用事二而御退出より外江御越候節、退出後御頼合ルて御越候儀も適候ハ苦ケ間敷事と奉存候得共度々ハ如何ニ奉存候、若途中二而年寄衆ニ御逢候節相済申間敷候

右之通私江被仰聞候儀共書記進之候間相模守殿伯耆守殿被仰聞候趣二弥無相違様ニ御心得諸事被附御心候様ニ仕度奉存候

二月朔日

朽木土佐守

一寛延三年四月於日光山大猷院様百回御忌御法事右御用懸り青山因幡殿被仰付日光江御暇被仰出候、已後御番繰詰二相成四月廿四日帰府之御目見相済廿六日より御番入、同日御本丸御番之積り御番割出候事

一右因幡殿帰府後御本丸初而之当番ニ参府、已後之初番ニ誰廻状之返事遣候、西丸御番帰府後初而之節ハ不遣候、右土佐殿申合候事

但参府後ハ西丸初御番も返事遣候事

一寛延四未二月朔日土佐殿方来候紙面左ニ記之

此間雪故而余寒強御座候、弥御堅康被成御勤奉珍重候、然者去年得御意候部屋江火入持参之儀極寒之節御手あぶり持参可申段其節何も申談候旨其砌差進候書付ニ茂右認申候、然ル処此間少々沙汰も承候間此節ハ勿論極寒之節二而も手あぶり堅く御持参無之様御心得可被成候、御一同江右之段申談先達而差上候書付手あぶりのケ条除候様可仕候得共、此節御暇中義故参勤御礼申上候上右ケ条相除可申候、先御師範仕候御方江計有之段申上候付得御意候代筆申付候、御免可被下候、已上

二月朔日

卷上
井上遠江守様

朽木土佐守

一寛延四未年三月東本願寺参向上野増上寺参詣固メ被仰付候衆

相濟登城菊之間於御縁類御用番伯耆守殿御逢候、右之体之節
当番罷在候席土佐殿承合候所芙蓉之間御縁類障子を後二致罷
在候旨右同月廿五日申来ル

宝曆三酉年三月朔日

当番
青山因幡守

昨日拙者江佐野右兵衛市川雲州申聞候、都而御礼衆之節進物
番進物之側罷在同役致会釈進物を持御前江罷出候、右之通二
而者遅く候付進物を持立罷在同役致会釈候与直二無猶予御前
江持出候筈候

一 御前二而行違候茂前々御目通りを放レ御杉戸之際辺二而行違
申候、是又遅く候付御障子と御杉戸之立合七御柱際程二而行
違尤少々御目通り之分者不苦候、右之通若年寄衆番頭衆江被
申渡候、今日方進物番右之趣二相勤候、若無礼二茂可存候間為
心得物語被致置候由御座候、已上

一 宝曆三酉年十一月九日

当番
酒井下野守

廻状追而

右近将監殿被仰聞候由二而石河土州被申聞候者、只今迄平
日致急度候節何茂小紋裏附上下致着候得共、向後者右之節

島裏附上下二而茂勝手次第致着候様寄々無急度可申通旨被
申聞候、依之伺御機嫌之節之儀も土州江承候処其節茂嶋上
下二而も不苦候由被申聞候

一 宝曆十辰五月廿二日

公方様御誕生日御祝義御役後始而頂戴為御礼御用番松平右近
将監殿江毛利讃岐守直勤被致候由

一 宝曆十三未十月廿五日

西丸当番戸田采女正殿廻状追而

今日拙者若君様御誕生日御祝儀頂戴御礼之儀於御本丸右近将
監殿江以良阿弥無急度相伺候処、同役一同御礼相濟候間別段
二御礼不及申上之旨以同人被仰聞

一 伊賀殿承合候処、公方様御誕生日并若君様御誕生日右兩度御
役儀初而被致頂戴候節共為御礼御用番江も不被相勤候由

一 明和元申十月廿五日

当番
仙石越前守

若君様御誕生日御祝義初而頂戴仕候得共御用番并伊予守殿江
御礼二罷越不申候

右大和殿飛驒殿江及相談候処御礼入申間敷旨被申候二付右

之通二候

一明和元十一月朔日

当番
仙石越前守

今日以上使御鳥拜領之衆有之候間居殘申候二付西丸江月次之
出仕不被致候由、右之段届等被扱無之由

附老中退出後裏附上下被着替候由

一明和二酉四月廿五日

近々御舞台依上覽二今日老衆廻りより見分有之、尤若年寄衆
も被出候、奏者番当番大目付衆も跡二付罷越御白書院溜りへ
老衆ノ跡二付罷在候旨今日之当番土井大炊頭殿咄被申候事

一明和二酉五月五日

当番
酒井飛驒守

今日者例年井関次郎左衛門御礼二罷出候処不調法有之御仕置
相成候二付御礼書二名前無之、已後見合二可相成与記置

一明和二酉五月十一日

今日御張紙二牧野遠江守広蓋渡シと西湖之間座席奉行江名前
両方二有之二付、御目付松平縫殿頭江広蓋渡と御座敷奉行と
両様ハ差問難相勤繰替候儀申達、初御座敷奉行遠キ仁先江書
付出候処高順二書付出し内大和守縫殿頭江相渡申候

但今日者本設計名前書付出申候、加役八月番相除キ書付差

出候方之由可然旨飛驒守被申聞

一明和二酉九月五日戸大炊頭殿重陽上帳明日於西丸差上可申哉
之旨伊予守殿江盛阿弥を以被相伺候候、御本丸二而上可申旨
以同人被仰聞候事

一明和二酉九月十六日

今日戸田大炊頭方昨日於御本丸松平富次郎遺領無相違被下置
候為御礼西丸江罷出候二付右謁書今日御本丸江差越之処、遺
領被仰渡之御礼故今朝者御清メ二付差出候事如何と休阿弥江
被懸合候候、今朝ハ不差出候方可然由申聞候二付不差出則戸
大炊頭方江謁書被差戻申候、伊予守殿御宅江被差越候由当番
板美濃殿可申遣候旨被申聞候

一明和二酉年十一月朔日

今日助番伊賀殿候所板美濃殿不快二付登城無之断手紙当番久
世出雲守殿名当二而手紙来候、然処昨日方も助番相知御披露
割も伊賀殿方取二来候事故同人名当二而遣候方宜敷由飛驒殿
被申候事

一松平筑前守御暇之節御礼書二上使老中与申肩書老中文字無之
二付廻状江も上使与計認、例年二月十五日御礼書御廻状二者
老中与申文字不認事

一延享二丑年

丑十月三日左近將監殿江進達

書面之通相心得可申旨被仰聞承知仕候 松平備中守

御代替御礼寺社献上物之儀二付伺書

年始之通御本丸江相納候様可仕旨被仰聞承知仕候

丑十月三日

大岡越前守

一諸向献上物御本丸西丸江相納候得共来ル五日六日寺社御礼之

献上物者御本丸江相納候様仕度候、依之奉伺候

十月

明和四亥三月三日

当番
松平能登守

一明四日公家衆円満院御門跡御対顔專修寺登城之旨周防守殿被

仰聞御規式書御渡二付明日之当番加遠江殿江差遣候、且亦円

満院院家專修寺御礼二付進物番五六人被指出候様番頭衆江申

達候

明和四亥四月廿六日

当番
大岡兵庫頭

一松平右近將監殿御渡候御書付

諸向新役被仰付候砌其御役筋致相伝候者可有之儀勿論之儀
候、然処場処二より古役之者与新役之者一席致し候而も差
別を附候類之儀も有之哉、御役名者一同之儀候得共御役名
江対し自己二差別を附候儀抔決而有之間敷儀二候、其上近
来者御役筋相伝候者并古役之面々より事六ヶ敷申なし、出
会并弁当其外諸入用道具等之品々二至迄形を出し其通二無
之候而者不相成様二致懸ヶ候儀共間々有之由二候、右体之
義毛頭在之間敷儀二候、向後新役被仰付候者之取計方共具
二御目付より相尋承置且其向々之風聞為承礼候筈二候、惣
而前々御書付等を以被仰出候儀共奉承知候迄之様二成行如
何成事二而以後者堅相守段々其旨を申伝忘却無之様二可相
心得候、若此已後猥ヶ間敷筋も有之候ハ、急度相糺二而可
有之候間一同格別二申含可相守候、右之趣自今以後急度可
被相心得候
右之通可被相触候

四月

明和四亥九月十八日

一 稻垣羽州口達之覺

当番

戸田長門守

五節句月次其外都而御礼之節御目付寄七候ハ、無遲滯早々

寄り被申候様寄々可相達旨松平右京大夫殿被仰聞候

享保三年戌七月

一 御鷹方上役餌差組頭并肝煎

一 御馬乘

一 進上奉行

一 伊賀之者

一 御下男頭

一 御小人

一 大工棟梁

一 手代組頭共

一 諸同心只今迄着来候分

一 御鉄炮玉薬奉行組之者

一 吹上御花畑役所筆頭

一同御鳥方組頭

一同世話役

一同御鳥方上役

右之輩向後熨斗目并七夕八朔白帷子一切堅無用仕間敷旨向々江急度可被相達候

明和四亥年十月九日

当番

久世出雲守

一 右近將監殿被仰聞候趣大井勢州被相達候口達之書付二通

口達之覺

惣而諸向御礼等之節御老中方被仰越候刻限方少々早メニ被罷出処、近来者遅ク御老中方登城之節ニ至リ被罷出候面々も在之候、御礼前稽古も有之事ニ候間少々早メニ可有登城儀ニ御老中方思召候旨、此段寄々申達候様被仰渡候

十月

口達之覺

御規式御成遠御成之節共ニ御門番之面々御門番所江相詰候儀近来者断多有之候、病氣候事二者候得共少々之儀者御門番所ニ勝手も有之候得者保養も相成候事ニ付押而茂可被相

詰儀二御老中方思召候旨、此段寄々申達候様被仰渡候

十月

一 朔望之外廿八日御礼可有之分

正月 二月 四月 七月 十二月

廿八日御礼無之分

三月 五月 六月 八月 九月 十月 十一月

右之通向後可被相心得候、若右之内廿八日御礼被為請候ハ、

前以可被触候

一只今迄月次御礼無之時ハ四品以上江老中ヨリ以切紙相達候得

共、向後者大目付ヨリ可申通候間可被得其意候

右之趣可被相触候

十月

右御書付已十月廿六日松平紀伊守殿当番之節出

松平左近将監殿御渡候御書付写

土用寒入伺御機嫌之儀当日午刻已前入候ハ、其当日御機嫌可

被相伺候、午刻已後候ハ、翌日可被相伺候

右之通寄々可被達候

右御書付酉五月廿九日松平備中守殿当番之節出ル

一 御鏡餅御用被仰付候当人ハ為御礼西丸江出仕御老中江も廻勤

之事

明和五子年五月十五日

当番 遠藤備前守

一 今日於奥徳川右衛門督殿被任中納言殿候由御座候

一 相伴相越候節御使先助先二候得者心得之儀頼置候而相越候儀

も有之候得共、相伴二相越候儀兼而相伴割元より書付も配り

有之候事二付、御使先助先其次之順二而相心得候儀故近格心

得相頼二不及之段采女殿方被申越候事

当番

宝曆十三未年十一月廿四日

戸田采女正

松平筑前守

右昨日賀養子被仰付候為御礼罷出於御白書院御縁頼御老中御

逢候、且已来同席並之通鍵二本挟箱対二為持可申段御書付右

近将監殿御渡候

明和五子年十月廿八日

当番 戸田長門守

松平隠岐守

右昨日賀養子被仰付候為御礼罷出於白書院御縁頼御老中御逢

候

宝曆二申年三月二日

当番
鳥居伊賀守

一今日西園寺殿花山院殿進上之太刀目録添書之儀去々午年醍醐殿参向之節添書殿書二無之付高家衆より茂今度被申聞候品有之、此間中何茂及御相談候処古格諸家之無差別大臣以上之分ハ添書之趣二付、左候得ハ撰家衆同様ニ殿書ニ而可然旨何茂申談西丸当番金兵部少輔申合其通今日添書相認、右古格之趣書付写為御承知進之候、右之段為御心得申進候

別紙

正徳末享保初頃

覚書之内

一堂上方目録撰家官方大臣何茂添書也、其外者裏書小馬代二而茂直印

但清花二而限大臣之分ハ添書、清花二而も大臣以下者裏書

一宮門跡其節々承合添書認可申事、惣体堂上方之儀者其節承

合添書裏書相認候事

宝曆七丑年七月廿八日

去ル十九日大和殿西丸助番之節從御本丸水戸殿江御鷹之雲

雀被遣其外之衆江も同断被下之、右為御礼水戸殿御出仕ニ

付被懸御目其外之衆茂為御礼被出候、謁二付御届書二通并

於御本丸夏目弥次左衛門大御番組頭被仰付候為御礼罷出候、

謁書翌日可被差出之処退出之節於途中不幸被承忌中ニ被相

成候故、謁書届書之儀可被致如何哉と相談ニ而謁書届書夜

中ニ被指越候、尤先格茂不相覚致吟味候得共先例不相知候

条明日拙者西丸当番ニ付但馬守江承候上差凶次第謁書并届

書何れ共宜様可致旨大和殿江申遣、翌廿日但馬守江以常阿

弥承候処、謁書ハ拙者方ニ而認替差出可申候届書者其俣ニ

而差出候様ニと同人を以申聞候故、謁書ハ認替届書者大和

殿方被差越候俣ニ而差出申候、尤以後之例も相極宜候段同

人申候趣常阿弥物語ニ而御座候

一謁書者大和殿方被差越候通部屋ニ而認直す由候迄ニ而文言

等茂相違無御座候、且又日記方江之書付も被差越ニ付勿論

其俣相渡申候、以後為御心得申進候

七月廿八日

朽木土佐守

明和四亥年二月十六日

当番
土岐美濃守

一 今朝牧野遠江殿方昨日西丸当番之節之謁書如例被差越候間
 揃後但馬守殿江以常阿弥差出候処、下手紙二而遠江殿方今
 朝妾腹男子出生之段申来、依之今朝之手紙且下手紙迄相見
 セ右之通申来候間認直可差上哉、甚取計不行届段何分恐入
 候段同等二而も入可申哉宜取計被呉候様申達候処、但馬守
 殿江申上候処今朝者謁書差出候事二付最早御前江茂差上候
 儀之旨被仰聞、且伊予守殿二も前方右謁書前日二差越候事
 も有之段被仰相濟之段常阿弥申聞候、以之右之趣帰宅後以
 直書牧遠江殿江申遣

一 毎月月次講積之節相濟年寄衆会積有之候、是者番頭衆江之
 会積二而当番会積二者不及旨申候方も有之付土佐殿江承合
 候処、一統江之会積之事二付当番茂会積いたし候様被申聞
 候、為見合記置

明和六丑年八月五日

一 八朔之御祝儀進上之帳今日主水殿持参、同断西丸上帳越中
 殿持参被出候、然処松平土佐守去月廿八日国元到着之御札

献上物損有之、不調候付以親類差扣之儀被相伺候所於国元
 承知之上相伺候様右近將監殿被仰聞候由、依之今日上帳之
 儀以御用頭主水殿被伺候処上帳差出候様被仰聞候付、土佐
 守名前書載候候二而被差出候

例

宝曆元未年十二月廿一日

当番
森川兵部少輔

歳暮之御祝儀時服献上相濟翌廿二日柳生備前守居屋敷

出火差扣中二候得共上帳差出候

宝曆十二年十二月廿一日

当番
黒田大和守

歳暮之御祝儀時服献上相濟翌廿二日溝口主膳正居屋敷

出火二付差扣中二候得共上帳差出候

明和六丑年九月二日

当番
増山対馬守

一 今日重陽之御祝儀上り上帳被差出候砌、主殿頭殿去月十八
 日御老中格侍従被仰付候付宝曆十一巳年右京大夫殿御老中
 末江可罷出旨被仰付候節之例を以、豊後守殿次江桁明無之
 相認候段右近將監殿江以御同朋頭申達候処御承知之旨被仰
 聞候、依之西丸当番丹後殿二も豊後守殿江右之趣御届被申

達候事

一 当御祝儀御礼其外御礼之献上物伺書御指図御同朋頭を以御

附紙二而相濟候得者右為御請使者御用番江不及差出候、御

同朋頭江宜敷御挨拶給候様二相頼申候事、尤其節之御同朋

頭江右之段申談可取計儀也

一人二被頼候而も名代之御礼杯二不罷出候、同役其外無拋節

者可為格別事

宝曆四戌年十二月五日

御白書院

助番

阿部飛驒守

縮緬五卷

閑院殿使者披露高家衆

御太刀金馬代

浅井和泉守

二種

御樽代五百疋

追而

一 閑院殿使者御目見有之二付溜江御番之順二而三四人相廻候

明和五子年十月廿七日

当番

牧野豊前守

松平隠岐守

右被為召田安中納言殿次男松平豊丸賀養子被仰付之旨於段之

間御老中列座伊予守殿被仰渡之

当番

松平能登守

明和五子年十一月晦日

一 明日日蝕二付出仕之面々五時残之由稻垣羽州被申聞候

当番

酒井下野守

宝曆三酉年正月朔日

松平遠江守

右明後三日御謡初着座被仰付之旨於驚之御杉戸際右近將監殿被

仰渡候

当番

永井伊賀守

宝曆五亥年十二月廿八日

牧野駿河守

右来年始御謡初之節着座被仰付之旨於驚之御杉戸際伯耆守殿被

仰渡之

当番

内藤大和守

宝曆六子年十二月廿八日

松平丹波守

右来年始御謡初之節着座被仰付之旨於驚之御杉戸際左衛門尉殿

被仰渡之

当番

毛利讃岐守

宝曆十二年十二月廿八日

松平主殿頭

松平山城守

右來年始御謠初之節御次着座被仰付之旨於驚之御杉戸際右京

大夫殿被仰渡之

一松平千太郎家督後四品不被仰付以前者柳之間席之事

寛延二己年五月二日

当番 松平豊後守

一松平喜八郎端午御祝儀進上之帳柳之間筆頭二出候事

明和五子年九月二日

当番 遠藤備前守

廻状追而

一松平千太郎家督以後初而時服差上候付寛延二己年五月二日

例茂有之候付昨日之当番越前殿江申遣伊予守殿江順阿弥を

以被相伺候処、例書差出候様被仰聞候付喜八郎家督後初而

時服献上之節使者柳之間江罷出候段書付認以同人被差出候

処、其通可心得旨被仰聞候段越前殿方被申越候付、使者柳之

間罷出相濟申候

但右進上之帳柳之間筆頭江出候事

明和六丑年正月二日

当番 土屋能登守

松平遠江守

右御謠初之節御次着座被仰付之旨於驚之御杉戸際右近殿被申

渡之

明和六丑年正月二日

当番 土屋能登守

松平右近將監殿御渡候御書付之写

万石以上座順之儀諸席打廻候節者前々之通高順二いたし同

高之面々八家督之前後次第之義勿論之事候処、御側御用人

詰衆御奏者番之嫡子与座席混雜之様二相聞候、如前々右嫡

子之分者菊之間縁類之可為上席候、御普代外松之内二菊之

間縁類詰方高低之面々落合之節八右嫡子之分八席を替或ハ

向江並候歟又ハ脇席二並候歟可被致候

右之通向後可被相心得旨寄々可被相達候

十二月

明和七寅年五月朔日

当番 牧野越中守

一今日所替村替之御朱印頂戴之面々有之、御老中方鯉之御杉戸

際二列座、松平隱岐守名代松平近江守方以下一同罷出所替村

替之御朱印被下旨右京大夫殿被仰渡、西御縁類方表御右筆組

頭長野源次郎白木三方二御朱印戴之右京大夫殿前二差置、一

人少、罷出右京大夫殿被渡相濟御朱印手二持一同御礼二罷出

当番溜り二罷在、夫方芙蓉之間江御老中方御出北之方後二出

席、土井大炊頭名代土井遠江守方以下一同罷出如前被仰渡、御

廊下方長野源次郎御朱印持出如初相濟申候、当番御縁類例御

柱際二罷在、御礼日二付両席共非番之面々茂罷在候

明和七寅年五月五日

出雲守嫡子
久世隱岐守

右座順之儀諸席打込城主之次無城之上二可相心得旨、御礼前於

同席列座同前御同人被仰渡之

明和七寅年八月

一御三卿附御附人役順并御目見以上以下之儀二付田安殿家老衆

江承合候処左之通被申越候

田安

当番
土岐美濃守

右近將監嫡子

松平主計頭

右京大夫嫡子

松平下野守

周防守養子

松平左京亮

佐渡守嫡子

板倉伊勢守

豊後守養子

阿部能登守

主殿頭嫡子

田沼大和守

家老

下ケ札

番頭

用人

簾奉行

長柄奉行

物頭

郡奉行

勘定奉行

広敷用人

目付

家老番頭用人之外簾奉行以下書面
役名之者御附人被仰付候へ者公儀
御目見以上之者二御座候、御附人
二而も田安二而立身被申付候分者
公儀御目見以下家筋も御座候、勿
論右役名之分田安二而新規被呼出
候者ハ公儀二而者御目見以下之者
二御座候、併番頭用人之儀者新規
被呼出候者も役儀相勤候内ハ公儀
御目見以上二御座候

右座順之儀諸席打込城主之次無城之上二相心得以来同席打込詰
日茂可相勤之旨、御礼前於芙蓉之間御老中列座右京大夫殿被仰
渡之

大炊頭養子
土井遠江守

小性

徒頭

小十人頭

近習番

右之通之役順二御座候

明和九辰年正月廿八日

御白書院

御太刀一腰

紗綾五卷

金 二枚

金 馬代

右当地詰合之節者年始五節句月次御礼罷出候筈二候、年始

者当地法眼之医師並之通大広間江罷出時服頂戴、五節句ハ

鶴之小溜月次ハ羽目之間江差出候様可被心得候

同年五月廿九日

此度銀座年寄共月次御礼罷出候二付、席之儀者後藤本阿弥

其外一統打込罷出候積リ被仰渡候、依之為御心得御達申上

候、以上

五月

水野要人

河野吉十郎

本多伊勢守

太田播磨守

明和九辰年八月十五日

京都町奉行

右昨日随意院宮就御下向御供罷下候付御黒書院溜御老中列

座江罷出候

安永四未五月五日

一明六日大納言様羅漢寺筋江御成被仰出候付豊後守殿御先江御

越候、然処明日者端午御祝儀進上之帳差出候定日二付明朝豊

後守殿御成前登城之節差出候儀無急度以御同朋頭当二日之当

一細川越中守御礼過居殘細川与松家督中務少輔隱居之御礼申上

候、御礼申上之於驚之御杉戸際右近将監殿御逢候

安永三年二月八日

当番
京都醫師
土屋能登守
山脇道作

家督之御礼

細川与松
伊賀

隱居之御礼

細川中務少輔

名代
細川若狭守

当番

土岐美濃守

助番

増山対馬守

番松能登守申達置候

右例明和八年五月六日其節者前日以同朋頭相伺候之事

東京阿部家資料 文書編(14)

発行日 二〇二四年(令和六年)三月三十一日

編集 福山市経済環境局文化観光振興部文化振興課

歴史資料室

〒七二〇・〇八一二

福山市霞町一丁目一〇番一号

TEL 〇八四・九三二・七二六四

発行 福山市教育委員会

印刷・製本 株式会社かもめいと